

# 古本州島における後期旧石器時代前半期／後半期移行期の構造変動研究

—国府系石器群・角錐状石器の広域展開と地域間変異の解明を通じて—

森 先 一 貴

## 本文目次

序言	1
第Ⅰ章 研究の目的と背景	
第1節 本研究の目的	4
第2節 研究の背景	5
1. 構造変動論という立場	5
2. 後期旧石器時代前半期／後半期の移行問題	7
第Ⅱ章 研究の方法的枠組み	
第1節 石器群の認識法	13
第2節 技術構造と資源	15
1. 技術構造	15
2. 石器モードと石材消費戦略	16
3. 石器の分類と用語	18
4. 技術構造と石材分布構造および居住形態	19
第3節 伝播論の意義	23
第4節 本研究のフレームワーク	24
第Ⅲ章 編年研究	
第1節 編年の方法	30
第2節 古本州島西南部の編年研究	31
1. 後期旧石器時代前半期後葉	31
(1) 関東地方	
(2) 東海地方	
(3) 中部高地	
(4) 近畿・瀬戸内地方	
(5) 中国山地・山陰地方	
(6) 九州地方	
(7) まとめ	
2. 後期旧石器時代後半期前葉	44
(1) 関東地方	
(2) 九州地方西南部・東南部	
(3) 東海地方	

(4) 中部高地	
(5) 九州地方東北部・西北部	
(6) 近畿・瀬戸内地方	
(7) 中国山地・山陰地方・四国地方南部	
(8) まとめ	
第3節 古本州島東北部の編年研究	-----64
1. 後期旧石器時代前半期後葉	64
(1) 古本州島東北部における前半期編年研究の問題	
(2) IX層並行期の石器群について	
(3) VII～VI層並行期の石器群編年研究	
(4) まとめ	
2. 後期旧石器時代後半期前葉	73
(1) 古本州島東北部における後半期編年研究の問題	
(2) 新潟県・北陸地方	
(3) 奥羽山脈東部・西部	
(4) まとめ	
第4節 技術構造の変化と情報伝播	-----81
第IV章 国府系石器群の伝播形成過程	
第1節 国府系石器群と国府系石器群に関する既往研究	-----198
第2節 国府系石器群の荷担者推定	-----201
第3節 国府系石器群からみた人と情報の動き	-----204
1. 九州地方の国府系石器群	204
2. 四国地方・中国地方・山陰地方の国府系石器群	207
3. 東海地方の国府系石器群	208
4. 関東地方の国府系石器群	209
5. 中部高地の国府系石器群	211
6. 古本州島東北部の国府系石器群	212
7. まとめ	216
第4節 情報の受容様式	-----217
第V章 角錐状石器の広域展開と地域間変異	
第1節 角錐状石器の再分類	-----226
1. 角錐状石器という分類カテゴリーとその問題	226
2. 角錐状石器の再分類	227
第2節 角錐状石器の地域的多様性	-----229
1. 九州地方	229

2. 近畿・瀬戸内地方	230
3. 四国地方南部・中国地方・山陰地方	230
4. 東海地方	231
5. 関東地方・中部高地	231
6. 東北地方・北陸地方	232
7. まとめ	232
第3節 角錐状石器の通時的変化と技術構造上の位置	-----233
第VI章 地域環境適応戦略の転換過程とその背景	
第1節 ここまでの要約と問題設定	-----239
第2節 後期旧石器時代前半期から後半期への環境変化に関する研究	-----241
第3節 地域環境適応の進行過程	-----244
1. 技術構造の地域差とその背景：VI層並行期	244
2. 技術構造の地域差とその背景：V層上部～IV層下部並行期	245
(1) 古本州島東北部	
(2) 古本州島西南部	
3. その後の地域差について	254
第4節 まとめ	-----255
結語—結論と今後の課題—	
第1節 まとめと結論	-----259
第2節 今後の課題	-----260
引用参考文献	-----262
【論文】	262
【発掘調査報告書・都府県市史】	272

## 目次

### ・第I章

第I-1図	構造変動論	12
第I-2図	システム論的進化・発展論	12
第I-3図	二極構造概念図	12

### ・第II章

第II-1図	人間集団の重層的適応系	26
第II-2図	技術構造概念図	26
第II-3図	国武によるIX層中部からIX層上部VII層下部にか ける技術構造の変容	27
第II-4図	石材選別戦略の構造差をあらわすモデル	28
第II-5図	文化要素の伝播の捉え方	28
第II-6図	本研究のフレームワーク	29

### ・第III章

第III-1図	台形様石器の分類	85
第III-2図	VII層並行期の石器群：関東地方1	86
第III-3図	VII層並行期の石器群：関東地方2	87
第III-4図	VII層並行期の石器群：関東地方3	88
第III-5図	VII層並行期の石器群：関東地方4	89
第III-6図	VII層並行期の石器群：関東地方5	90
第III-7図	VI層並行期の石器群：関東地方1	91
第III-8図	VI層並行期の石器群：関東地方2	92
第III-9図	VI層並行期の石器群：関東地方3	93
第III-10図	VI層並行期の石器群：関東地方4	94
第III-11図	VI層並行期の石器群：関東地方5	95
第III-12図	愛鷹・箱根山麓遺跡における層位と年代	96
第III-13図	VII層並行期の石器群：東海地方東部1	97
第III-14図	VII層並行期の石器群：東海地方東部2	98
第III-15図	VI層並行期の石器群：東海地方東部	98
第III-16図	VI層並行期の石器群：東海地方中部・西部	99
第III-17図	VII・VI層並行期の石器群：中部高地	100
第III-18図	VI層並行期の石器群：中部高地	101
第III-19図	VII層並行期の石器群：近畿・瀬戸内地方	102
第III-20図	VI層並行期の石器群：近畿・瀬戸内地方1	103
第III-21図	VI層並行期の石器群：近畿・瀬戸内地方2	104
第III-22図	VI層並行期の石器群：近畿・瀬戸内地方3	105
第III-23図	VII層並行期の石器群：中国地方	106
第III-24図	VII・VI層並行期の石器群：山陰地方	107

第III-25図	VII層並行期の石器群：中国山地	108
第III-26図	VII層並行期の石器群：九州地方1	109
第III-27図	VII層並行期の石器群：九州地方2	110
第III-28図	VII層並行期の石器群：九州地方3	111
第III-29図	VI層並行期の石器群：九州地方1	111
第III-30図	VI層並行期の石器群：九州地方2	112
第III-31図	VI層並行期の石器群：九州地方3	113
第III-32図	堤西牟田遺跡の層位別出土遺物	114
第III-33図	VI層並行期の石器群：九州地方4	115
第III-34図	V層下部並行期の石器群：関東地方1	116
第III-35図	V層下部並行期の石器群：関東地方2	117
第III-36図	V層上部並行期の石器群：関東地方1	118
第III-37図	V層上部並行期の石器群：関東地方2	119
第III-38図	V層上部並行期の石器群：関東地方3	120
第III-39図	IV層下部並行期の石器群：関東地方1	121
第III-40図	IV層下部並行期の石器群：関東地方2	122
第III-41図	IV層下部並行期の石器群：関東地方2	123
第III-42図	IV層下部並行期の石器群：関東地方3	124
第III-43図	VI層上部～IV層下部並行期の石器群：関東地方	125
第III-44図	宮田栄二による大隈半島北部を中心とした石 器群の編年	126
第III-45図	V層下部並行期の石器群：九州地方東南部・西南部1	127
第III-46図	V層下部並行期の石器群：九州地方東南部・西南部2	128
第III-47図	堂園平遺跡における剥片尖頭器・台形様石器の 分布と伴出石器	129
第III-48図	V層上部並行期の石器群：九州地方東南部・西南部1	130
第III-49図	V層上部並行期の石器群：九州地方東南部・西南部2	131
第III-50図	V層上部並行期の石器群：九州地方東南部・西南部3	132
第III-51図	V層上部並行期の石器群：九州地方東南部・西南部4	133
第III-52図	IV層下部並行期の石器群：九州地方東南部・西南部1	134
第III-53図	IV層下部並行期の石器群：九州地方東南部・西南部2	135
第III-54図	IV層中部並行期の石器群	136
第III-55図	V層下部並行期の石器群：東海地方東部	137
第III-56図	V層上部並行期の石器群：東海地方東部	138



第IV-6図	九州地方東南部・西南部の国府系石器群	222
第IV-7図	中国地方・山陰地方の国府型・国府系ナイフ形石器	223
第IV-8図	東海地方中部・西部の国府型・国府系ナイフ形石器 と日野1遺跡接合資料	223
第IV-9図	中林山遺跡の横長剥片製ナイフ形石器と出土層位	223
第IV-10図	関東地方・中部地方の国府型・国府系ナイフ形石器	224
第IV-11図	東夷遺跡H2地点の石器群	224
第IV-12図	樽口遺跡A-KSE文化層の剥片素材石核の一例	225
第IV-13図	国府系石器群と良質安山岩原産地の分布	225
第IV-14図	最終氷期の古植生	225
・第V章		
第V-1図	舟底様石器と角錐状石器	236
第V-2図	多田による角錐状石器の分類	236
第V-3図	本論での角錐状石器分類	236
第V-4図	角錐状石器の分布	237
第V-5図	角錐状石器の地域性と変遷	238
・第VI章		
第VI-1図	ダンスガード=オシュガー・サイクルと日本海階梯堆積物暗度変化の対応	258
第VI-2図	居住形態・石材分布構造の変化を主要因とする技術構造差の形成モデル	258

## 表目次

### ・第二章

第II-1表	石器モードを構成する諸技術とその効果	29
--------	--------------------	----

### ・第三章

第III-1表	東北地方における後期旧石器時代前半期編年の比較	165
第III-2表	仲町遺跡JS地点の層位別器種点数	181
第III-3表	古本州島西南部の石器群編年(1):東海~関東	195
第III-4表	古本州島西南部の石器群編年(2):九州~近畿	196
第III-5表	古本州島東北部の石器群編年	197

### ・第V章

第V-1表	瀬戸内型角錐状尖頭器の出土率	237
-------	----------------	-----

### ・第VI章

第VI-1表	技術構造の変遷と地域性の形成	257
--------	----------------	-----

## 序言

本論は、酸素同位体ステージ3から2への気候変動期に相当する後期旧石器時代前半期／後半期移行期において、古本州島（氷期の海面低下によって本州・四国・九州が一体化した島：佐藤 2005b）に展開した旧石器時代石器群を対象とする。年代は概ね 25000<sup>14</sup>CyrsBP を中心とする前後数千年間である。この時期には、人間の環境適応システム（人類生態系）が構造的変化（構造変動）を遂げることが指摘されているが（安斎 1991a・2003、佐藤 1992・1996）、その具体的プロセスや背景は現在もなお十分に明らかにされていない。本論は、上記した石器群について、当時の人間集団の主要な生活利器を構成していた石器の製作技術構造の変化と地域差を分析し、古本州島各地における環境適応戦略の転換過程について、その基盤的側面の追究を目的とする。

本論では、わが国の後期旧石器時代において、現在観察可能な考古資料の大半をなしている「石器」を検討対象とする。分析方法は石器製作にみる技術構造分析を主とした。また、基本的には対象とする時期のできる限り多くの石器群を分析対象として扱う。さらに、古本州島の広範囲に展開し、本論の対象時期の石器群をよく特徴づけている国府系石器群および角錐状石器と呼ばれる石器は、特に重点的な分析の対象とすることとなる。その理由は第三章の編年研究ののちに述べるが、両者がこの時期に、広い範囲において、各地の石器製作技術構造に、実に重要な影響を与えていると予測されるためである。

\*

論述は次の構成で進める。第I章では研究の目的と背景を論ずる。最初に目的を述べた後、本論の依拠する構造変動論という立場について、その内容を説明する。続いて、研究の目的に照らし、後期旧石器時代前半期／後半期という時期区分の提唱以後を中心に、両時期間の移行過程に関する研究がどのように展開し、現在に至っているのかをレビューする。以上の作業を通じて、方法的な問題点や既往研究の説明モデルに見られる不備・欠点を抽出する。

第II章では、前章で導かれた問題点を克服するための研究の方法について論述する。本論の研究枠組み、使用する用語や概念を提示して、第三章以降の議論の前提を整える作業をおこなう。

第III章では、対象時期の石器群の編年研究をおこなう。石器群の時間的・空間的編制を整合的に整理し、本論の骨格をなす広域編年網を構築する作業である。この編年に基づき、対象時期の各地域における技術構造の推移の概要を明らかにする。

第IV・V章では、前章の知見に基づき、本論の対象時期を特徴づける国府系石器群と角錐状石器について、古本州島各地域の人間集団の石器製作技術構造に、いかなる影響を与えているのか、またその影響はどのようにしてもたらされたのか、という点を分析する。特に、古本州島のなかでも特殊な技術に特徴づけられる国府系石器群については、その広域展開のプロセスをかなり具体的に推定する。

第Ⅵ章は第Ⅲ～Ⅴ章の内容を踏まえた総合的考察である。石器製作技術構造が、通時的にどのような変化を遂げ、かつ地域的差異に富む古本州島各地の資源構造といかなる対応関係にあるのかを整理し、その関係性から当時の人間集団が構築していた地域環境適応の戦略的特質を解釈する。この作業を通して、自然環境・社会環境の諸コンテクスト下において構築されていた人間の適応戦略が、後期旧石器時代前半期／後半期移行期にどのような構造的変化、すなわち構造変動を遂げたのかを解明することを目指す。

\*

なお、本論は基本的にすべて書き下ろしであるが、以下の各章節については既発表論文・報文を基礎とし、大幅な加筆・修正を加えて成稿した部分を含む。

第Ⅱ章 第1節：森先一貴 2007 「第12章 拡散と伝播」佐藤宏之編『ゼミナール旧石器考古学』同成社、209～222頁。

第Ⅱ章 第3節：森先一貴 2008 「〈潮流と展望〉東京大学公開シンポジウム『伝播をめぐる構造変動—国府石器群と細石刃石器群』『石器文化研究』14、57—61頁。

第Ⅲ章 第2節2：森先一貴 2007 「角錐状石器の広域展開と地域間変異—西南日本後期旧石器時代後半期初頭の構造変動論的研究—」『旧石器研究』第3号、85-109頁。

第Ⅲ章 第3節1-(1)：森先一貴 2007 「東北地方後期旧石器時代前半期研究の諸問題—特に台形様石器の分類と型式を巡って—」『秋田考古学』第51号、1～13頁。

第Ⅲ章 第3節2-(1)：森先一貴 2004 「杉久保型尖頭形石器の成立とその背景—東北日本日本海側石器群の批判的再検討—」『考古学』Ⅱ、41—75頁。

第Ⅳ章 第1節：森先一貴 2007 「第12章 拡散と伝播」佐藤宏之編『ゼミナール旧石器考古学』同成社、209～222頁。

第Ⅳ章 第2節：森先一貴 2008 「東北日本・日本海側における国府系石器群の形成過程」『東京大学公開シンポジウム予稿集—伝播を巡る構造変動』佐藤宏之編集・発行、14—31頁。

第Ⅳ章 第3節1：森先一貴 2008 「九州地方における国府系石器群の伝播と形成」『考古学ジャーナル』No.575、10-14頁。

第Ⅴ章 第1節：森先一貴 2007 「角錐状石器の広域展開と地域間変異—西南日本後期旧石器時代後半期初頭の構造変動論的研究—」『旧石器研究』第3号、85-109頁。

## 謝辞

執筆にあたり、指導教官である佐藤宏之先生には、本論の論理構成から分析方法、解釈の方法にいたるまで、懇切丁寧なご指導をいただいた。また、辻誠一郎先生には、本論の結論を得るために重要である古植生環境について、具体的なお教示をいただいた。安齋正人先生（現在、東北芸術工科大学東北文化研究センター教授）にも、本章の各論の内容について、幾度にもわたってご指導賜ることができた。また、資料見学に際して、各都道府県の博物館・埋蔵文化財センター・大学をはじめとする諸機関には大変お世話になった。このほか、特に次に掲げた諸先生・諸氏には、考古資料の見学を通して、また日常的な議論を通じて、本論の内容にかかわる貴重なご助言、ご教示をいただくことができた。ここに記して感謝申し上げたい。

阿部 敬、伊藤栄二、岩瀬彬、氏家敏之、沖 憲明、尾田識好、出穂雅実、亀田直美、木村剛朗、国木田大、国武貞克、澤田 敦、渋谷孝雄、鈴木美保、須藤隆司、諏訪間順、高橋 学、多田仁、富樫孝司、中村雄紀、西井幸雄、野口 淳、藤野次史、松藤和人、松本 茂、宮田栄二、森川 実、柳田俊雄、山口卓也、山田 哲、吉川耕太郎 （敬称略・五十音順）

最後に、博士論文を審査してくださった佐藤宏之先生、辻誠一郎先生、鬼頭秀一先生、清家剛先生、清水亮先生に、改めて深く感謝申し上げます。

# 第 I 章 研究の目的と背景

## 第 1 節 本研究の目的

わが国の後期旧石器時代（およそ 3.3 万年前から 1.3 万年前：炭素年代）は、2.5 万年前ごろを境に大きく前半期と後半期に区分されている（佐藤 1992）。この時期は亜間氷期（酸素同位体ステージ 3 = OIS3）から亜氷期（OIS2:最終氷期最寒冷期）への気候変動期でもあり、ほぼ同時期に火山活動も活発化したこともあって、自然環境の大幅な変化が生じる時期にもあたることが指摘されている（辻 2002・2004）。そして、後期旧石器時代前半期から同後半期の移行期には、わが国では人の活動を示すほぼ唯一の考古資料である石器にも、一見しただけで大きな変化が生じていることが、以前より認識されている。

この石器の変化が、どのような変化を反映したものであり、またその変化の背景が何であったかについても、既にこれまで多くの研究が提出されてきた（石器文化研究会 1991・1995）。本論も、このレベルでは同じ問題意識を有するものだが、それまでの研究とは異なった問題設定をおこなうことによって、新しい仮説を提示することを目標としている。というのも、旧来の研究の理論と方法に致命的な問題があることが認識されてきたからであり（安斎 1990・1994・1996、佐藤 前掲）、その結果、上記の問題意識から立てられる具体的な問題設定にも、根本的な欠陥があることが判明したからである。ひとことでいえば、これまでの旧石器時代研究は、人間集団の「文化」の変遷史（文化史）であったが、後述するようにこの「文化」認定方法自体に無視し難い問題があった、というのが致命的な欠陥の中身である。そして、これを克服する方法の模索と体系化の結果として提唱されたものが、構造変動論（安斎 1991a・2003c・2008、佐藤 前掲）であると位置づけられる。

本論の目的は、酸素同位体ステージ 3 から同 2 への気候変動期におおむね相当する、後期旧石器時代前半期／後半期移行期における人間集団の石器製作技術構造の変化から、古本州島（佐藤 2005a）における地域環境適応戦略の変化の様相を、構造変動論の立場から読み解くことにある。従来の研究の欠陥を克服して、新しい視座から、この時期の石器群の変化にみる人間の適応行動史に関する基礎的考察をおこないたい。

まず、本論の基本的枠組みをなす構造変動論について、提唱者である安斎正人等の研究（安斎 1991a・1996・2003c）にもとづき整理しておきたい。

## 第 2 節 研究の背景

### 1. 構造変動論という立場

構造変動論とは、従来、日本の旧石器研究の主流をなしていた石器文化の階梯論に対するアンチテーゼとして提出されたものである。

まず、石器文化の階梯論とは、石器の形態や組成から得られるまとまり（石器文化）を、生活や人間集団の「文化」の反映とみなし、その段階的変化を叙述するという方法であった（杉原 1956）。ここには大きく二つの問題がある。ひとつは、石器の形態や組成をもとにした単位をそのまま生活の反映、生活様式を共有する文化集団の象徴とみなす考え方である。もうひとつは、石器文化の段階的変化（ナイフ形石器文化→槍先形尖頭器文化→細石刃文化）が、列島をひとつの地理的単元として展開すると考えられたことである。

この研究法については、すでにパラダイム論の立場から体系的な批判が多く提出されており（安齋 1990・1994・1996・2003c、佐藤 1992）、詳しく繰り返さないが、本論に関連して重要な点は次のようにまとめられる。

①遺跡に残された石器は、生活の一側面であることは確かだが、遊動生活におけるシステム化された多様な活動の部分的発現に過ぎない。したがって、遺跡に残された石器組成内容の類似によってまとめ上げられた単位（要素の集合）が、生活の全体像をそのまま反映していると考えすることは単純である。それは、我々の生活を構成する物質文化諸要素をいくらリスト化しても、要素間の諸関係を解き明かさないう限り、生活の全体像に近づくことができないのと同じことである。石器文化の階梯論には、システム・構造論的視点が決定的に欠けている（安齋 1991a）。②さらに、石器文化を「文化」（集団）の反映として捉えているため、石器文化の変化を、集団移動に基づく文化伝播によって説明する方法が定着した。しかしこの方法では、地域間、あるいは地域内の石器群の多様性を説明することができなくなっている。現生狩猟採集民研究からのアナロジーでは、先史狩猟採集民社会が、そのような大規模かつ頻繁な移動を繰り返すような緊張と対立の関係に支配されていたと想定するよりも、通常は集団間に恒常的な同盟網・婚姻網を維持することで、社会的再生産や地域内外の情報獲得を志向していたとみなすほうが現実的と考えられる（佐藤 前掲書）。③しかも、列島をひとつの地理的単元として、石器文化の段階的変遷が起こるという見方は（ナイフ形石器文化→槍先形尖頭器文化→細石刃文化、が代表的）、石器文化の階梯論が提出された 1950～60年代には一定の有効性があったものの、1970年代以後の発掘調査事例の増加を経た現在では、有効性を失っている。④さらに、石器の通時的変化の論理にも問題がある。現在の資料から見て、例えば石刃技法の単線的発達論（藤原 1983）、ナイフ形石器の調整加工技術・加工部位の単線的発達論（安齋 1986）といった、石器群に見られる特定の技術要素の画一的・単線的配列による編年研究は成立しがたい（佐藤 1992）。石器の組成によるまとまりが、単純かつ画一的な段階変遷を遂げていることを示す資料は、現在無いためである。

一方、構造変動論では、文字どおり、構造とその変動をみきわめることが目標とされる。考古学における構造変動論とは、道具の組織性（システム）の解明をてがかりとして人間集団の生活の構造性を読み解き、その歴史的展開を説明しようと試みていた渡辺仁の人類進化に関する理論（渡辺 1985）と、そこに歴史研究の本質を読み取っていた廣松渉による文字どおりの構造変動論とを基礎としている（安齋 1991b・1996）。それは、人間の対自然的関係を、技術（生産）的側面に注目しながら人類史を見直していく作業とされる。構造変動論の「構造」とは、人と自然の関係性であるとされ、「構造とその変動を考古学的方法を使っ

て解明しようとするのが考古学における構造変動論」である（第I-1図）。自然環境に軸足を置いてこの関係性の歴史を見る方法を「生態系史」、人の文化環境・社会環境に軸足を置いてこの関係性の歴史を見る方法を「景観史」、と安斎は呼んでいる（安斎 2008）。

考古学における構造変動論では、人と自然の関係を捉えるために、多くの方法を検討してきた。この立場では、石器文化の階梯論のように、石器の形態や組成はそのまま生活や「文化」の表象とはみなさない。遺跡に残された石器とは、周囲の環境生態への適応としてシステム的な遊動生活を営む人間集団が、それぞれの場においておこなった個別的な生活行動の反映と考えるからである。したがって、注目されるのは多様な遺跡間の活動を統合して組み立てられているシステム的な全体性であり、そのシステムの根底を貫く構造的な性質ということになる。考古学において、共時的切断面における生態適応システムとして遺跡の多様性を説明しようとする方法は、文化人類学においてJ. スチュワードの文化生態学に由来を持ち、考古学ではシステム論に系統をもつL. ビンフォードらのプロセス考古学の特徴である。しかし考古学にかぎらず、共時切断面の構造や機能を重視する研究法には、通時的な変化や歴史的固有性が軽視されている、という批判が繰り返し加えられた。

構造とその変動の解明を目標とする構造変動論において、あるシステムがどのように次のシステムに変化するのかという上記の問題は、取り組むべき中心的課題である。「人類の進化史も少なくとも先史時代にあつては、環境変化との相関的歴史過程であつた」と安斎（2007）がいうように、先史狩猟採集民社会は、第一に、突然かつ急激で不安定な気候条件・環境条件（多田隆 1997）への対応としての適応システムを構築してきたと考えられる。したがって、最も重要視されるのは、人間集団が所与の環境条件（資源の種類や量や配置、隣接諸集団との社会関係）という制約の中で、どのように生活を成り立たせていたのかを、考古資料（石器群）に反映された生活技術のシステムから読み解くことである。それだけでなく、先行のシステムと後続のシステムを捉えて比較することで、その変化がどのようなものであつたか、背景的な要因（自然環境の変化、社会関係の変化等）がなんであつたかという、時間軸を加えた考察が最重要とされる。

構造変動論の中核的課題をなすこのシステムの形成過程については、佐藤宏之（1992）による詳しい説明がある。佐藤によれば、石器文化の階梯論に代表される「従来の文化発展論では、単純から複雑への時間軸上の漸移的变化を機軸に、定方向的变化と変異を加味した解釈論」であつた。この論理は、時代間にわたるような一般進化的現象の説明においては一定の妥当性をもつ。中期旧石器時代・後期旧石器時代・新石器時代、といった大きな時代変化のレベルでは、確かに文化や社会の複雑化が認められる。しかし、地域生態への適応手段としての、生活システムに組み込まれた石器群の変化の論理としては不適切である。システム論の立場からいうと、地域進化、すなわち人間集団の生態適応の過程においては、新しい適応「システムの初期段階に急速に変異が広がり、その後システムの成立を促した自然的・社会的環境により適応する方向へ変異が狭まり、発展・特殊化する」と考えたほうがよい。しかも、異なる論理によって制御されている「新システムと旧システムの変化の方向性は一致する必要はなく、変異の広がりの方角も異なるのが原則と考えられる」。このように述べ、

その概念図として第1-2図を提示した(佐藤 前掲書:p56-57)。新システムと旧システムの間には要素の連続性も認められるが、システムの構造的特質が異なるために、要素の機能的位置も異なっている。逆にいうと、要素の連続が必ずしも適応システムの定方向進化を示さない。むしろ、新システム・旧システムに共通する要素を探し出し、システム間の系統的連なりと変化のプロセスおよび背景を説明する、「先適応」概念<sup>(1)</sup>をもちいたシステムの進化・発展論(構造変動論)が肝要とされる。

要約するとこのようになる。石器群は人間集団の生活に組み込まれた存在であるが、彼らの生活文化の直接的反映ではない。石器群に含まれる技術や石器組成の多様性、すなわち多様な生活行動から組織されているシステム的な全体性と、その基盤的構造にこそ生活の本質が反映されている。つまり、石器群の構造的分析によって、それを残した人間集団の生活システムの基本的特徴を捉えることができる。人間集団の生活システムは所与の環境条件への適応の方策と考えるならば、環境条件との対比・対応関係を生態学的モデルを参照枠として解釈することで、人間集団の適応戦略の具体的側面を解明することができる。こうした分析を通時的に、かつ空間的な広がりをもっておこなうことにより、過去の間人集団の適応の歴史を明らかにしうるであろう。

さて、後期旧石器時代前半期から後半期とは、まさにそうした適応戦略の転換期であるとする仮説がある(安斎 1990・2003c、佐藤 1992・1996・1997)。しかしながら、この時期の石器群を広範囲にわたって構造変動論の立場から本格的に論じた例はない。こうした現状をうけ、本論の目的を設定した。方法の提示や実際の分析に入る前に、後期旧石器時代前半期から後半期にかけての変化が、従来どのように捉えられてきたのかという学史を整理して、問題点を具体化しておきたい。

## 2. 後期旧石器時代前半期/後半期の移行問題

後期旧石器時代前半期・後半期という区分は佐藤宏之(1992)によって提唱されたもので、当時新しく導入された石器群の構造的研究所とした区分である。区分の論理は後に述べるが、その画期はおおむね武蔵野台地立川ロームVI層石器群(約25000<sup>14</sup>CyrsBP)を前後する時期に想定されている。VI層の時間幅の内部を境に、それ以前(X~VII・VI層)を前半期、以後(V~III層)を後半期と見るわけである。

石器群の構造的研究所以前には、石器群を構成する石器の型式や技術の組み合わせ・要素集合を「文化(集団)」と対応させ、石器群の変化を段階的な発展・進歩の歴史として記述する「石器文化の階梯論」という研究法を、ほぼすべての研究者が共有していた。石器に直接的に「文化(集団)」をみてとる石器文化の階梯論では、変化が急激である場合には、当然ながら型式の分布範囲やその拡大縮小の動きを集団移動・文化伝播によって説明する集団的伝播系統論が組み合わせられている。そして、こうした考え方にもとづく文化史研究が、これまでの研究の主流をなしていたことをさきに述べた。したがって当然、後期旧石器時代前半期・後半期の移行期においても、この思考法による研究が中心をなしてきた。

特に、前半期/後半期移行期には、瀬戸内に分布する国府石器群に類似した国府系石器群

や、同じく西日本に多数分布する角錐状石器と呼ばれる石器が広い範囲に現れるため、文化伝播によって石器群の変化を説明しようとする研究が多く提出された。後期旧石器時代後半期のはじめごろ（IV下・V層段階）にナイフ形石器が石刃素材のものが少なくなって、横長剥片素材のものが卓越するという変化を問題視した白石浩之ら（白石・荒井 1976）は、ナイフ形石器の起源・系統を西方に求める佐藤達夫（1969）の見解を参照して、その変化を西日本（瀬戸内地方）からの影響によって引き起こされたものと考えた。ただし、横長剥片製の国府系ナイフ形石器を最古のものとし、みなした佐藤達夫の学説は、高井戸東遺跡等、武蔵野台地におけるその後の発掘調査を通じて、横長剥片製ナイフ形石器より古い石器群が相次いで検出されるに従い、資料的裏づけを失い棄却されている。

これに対し、この時期のナイフ形石器の形態に西日本からの影響はなく、関東独自の発展で説明できるとする安藤政雄の学説（1979）も一方ではみられた。しかし、のちに埼玉県殿山遺跡や、神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡で国府型ナイフ形石器が次々と発見されたことで、現在ではこの時期の石器群の変化の背景に西日本からの影響を重視する見解（織笠 1992 など）が強まっていることは確かである。

その結果、服部隆博（1991）のように、国府系石器群の影響を認めつつも、石器群は漸移的に変化していると述べ、従来の伝播論と石器群の連続性とを折衷しようとする研究も提示されることとなった。

主として1980年代以降になると、ATを相前後する時期の石器群の変遷に注目が高まり（白石 1983）、その後ATテフラによる植生変化説（辻 1985・1991、辻・小杉 1991）の研究が進行すると、後期旧石器時代前半期・後半期の石器群の変化の背景には、こうした環境要因も考慮されるようになる。先の服部の議論のほかにも、伊藤健（1991b）による研究例がある。ただし、石器群や環境変化の関係についての服部や伊藤の議論は抽象的で、理論的根拠をもたない。

このような大勢への反対意見を、最近野口淳（2005）が提出している。野口は、瀬戸内地方からの影響として捉えられた技術的類似現象は、単純にそのようには捉えられず、各地の連動的技術変化（調整加工重視の石器製作）の中で生じた表面的類似である可能性を示唆する<sup>②</sup>。ただし、野口をはじめ、外的要因によらない説では、なぜそうした技術変化が生じたのかが言及されないことが多い。なお、野口の研究は、詳しい編年的検討を経ての結論ではなく、その主張の根拠は弱い。

いずれにせよ、これまでの理解では、この時期の石器群の変化を単純な集団的伝播系統論および石器文化階梯論以外の視座から本格的に取り扱ったものはみられない。各地での技術変化を重視する野口の研究も、そうした技術変化の背景とプロセスを合理的に説明しえない以上は、石器文化階梯論の域を脱することができていない。また、ATが植生環境に与えた影響に関する説が提出されるにおよび、1990年代以降にはこの時期の石器群の変化を環境変化と結びつけようとする議論がおこっている。しかし、両者間の因果関係について具体的な説明が加えられることはなく、抽象的議論にとどまってきた。瀬戸内地方からの何らかの技術的影響関係が、この時期の石器群の変化に関与していたのが事実であるにせよ（あるい

は野口のように、影響関係がなかったと理解するにせよ)、その変化の具体的プロセス・機制・背景の解明に取り組んだ研究は、ほとんどないというのが現状である。やはり現在も、石器群の文化史研究が依然として研究の大勢をなしている。

環境変化、あるいは技術伝播のいずれを石器群の変化要因とみても、明らかな問題は、石器群の変化を人間の行動と結びつけて理解する理論と方法の欠如にあることは、前節で述べたとおりである。伝播も環境の影響も、それを受けるのは人間であって石器ではないからである。石器群から人間の適応行動をいかによみとっていくのかを議論せず、上記した諸研究の欠点を埋めることはできないと考えられる。

一方、構造変動研究とは、可能な限りで「なぜ＝背景」「どのように＝プロセス」という課題に取り組むものである。それは、単に石器群の変化に注目するのではなく、石器群の背後にある人間行動のシステムや構造が形成される過程に注目し、説明しようとするからである。

構造変動論では、石器群の捉え方自体が文化史研究とは異なっている。石器群とは、人間集団の個々の活動を通して残されたものであるのだから、石器群の残された場の機能的差異を反映して多様に現象化することが考えられる。したがって、文化史研究でいう石器（型式）集合としての石器群はそのまま文化的単位となるとは考えにくく、むしろ石器（型式）の集合体の背後に通底し、多様性を生み出している石器群の構造、すなわち石器運用の構造的特性の把握に力点を置くべきである。すなわち、石器群を構成する諸要素（剥片剥離技術と石器器種・型式）間の関係から読み取られる石器製作技術の構造的性、石器群の残された遺跡間の関係から読み取られる居住・行動の構造的性、技術・居住・行動の各側面から読み取られる社会的動態、などがまずは追究の対象とされる。

構造変動論の提唱者である安齋正人は、1991年の論考（安齋 1991a・b）を嚆矢として、石器群から見た道具－行動－認知系からみる人－自然の関係（人類生態系）の構造的変化を追究し、後期旧石器時代開始期、AT降灰前後、後期旧石器時代・縄文時代の移行期において不連続変化（構造変動）が生じていることを体系的に示している（安齋 2003c）。

構造変動研究には、特に本論に関連する研究として佐藤宏之（佐藤 1992）のものがある。佐藤の研究は、安齋と同様の立場から、列島を対象とした技術構造を中心とする研究を提出した。これは、技術構造分析を中心に据えつつも、実際は遺跡間システム、社会構造にも言及する総合的な仮説である。

後期旧石器時代前半期と後半期という時期区分はこのとき設定されたものであり、その違いは次のように規定されている。前半期とは、ナイフ形石器系と台形様石器系を対立項とする二極構造と呼ばれる技術構造に特徴づけられ、両石器を製作する技術系列は、各々異なった契機で発揮されつつも、同一集団に保有された選択的・互換的技術であるとされた。両者は、従来、異なる文化集団が残したと考えられていた。しかし、その同時期存在が次々に明らかになるにつれ、石器文化階梯論では説明できなくなっていたのである。佐藤の二極構造論は、この現象を清楚に解釈することを可能とするものであった（第I－3図）。

前半期においては、この二極構造が、石材その他の資源の特徴を共有する地域単位を超え

て、汎列島的に確認されるとまとめられた。他方、後半期とは、広域で共通していた二極構造が各地で同時に変化し、概ね石材その他の資源の特徴を共有する地域単位毎に、異なった構造へと変換していくとされる。つまり、前半期から後半期への転換は、汎列島的に共通する構造から、より小さな地域ごとに独自の技術構造に変換すると指摘されたのである。資源構造が共通する範囲ごとに特有の技術構造（地域性）が形成されていくこの現象は、「生態適応の深化にともなう社会・集団的な地域適応」（佐藤 前掲：267）の反映と考えられ、こうした地域環境への適応進化が急速に進行することが、後期旧石器時代前半期から後半期への移行期の特徴であるとまとめられた。また、より小さな地域への生態適応の進行は、地域社会の成熟を促し、その結果として、社会再生産（婚姻網）や情報交換（情報網）を可能とする地域社会間の同盟網の強化にも繋がったと予測されている。

石器群の構造的な研究により、日本後期旧石器時代における石器群の変化が、人間集団の適応戦略の推移として把握され、その画期（前半期／後半期）が歴史的に評価された意義は大きい。以上の成果は現在も大枠での参照軸として有効である。

ただし、佐藤のこの仮説は、主に後期旧石器時代前半期を対象とした資料分析にもとづくもので、約 25000<sup>14</sup>CyrsBP 以降の後半期に起こった上記の変化は、おもに理論的な予測として提示されている。編年研究や技術構造分析はまだ詳しくなされていない。このため、前半期から後半期にかけて起こった地域性の形成過程に関する佐藤の仮説を、詳しい資料分析から検証していく作業が残されている。編年研究や技術構造分析を通じて、前半期における二極構造とその後半期にかけての解体という佐藤の学説を、詳しく検証すること、そのなかで後期旧石器時代前半期から後半期への石器群構造の変化に、人間集団の適応戦略の歴史を読み取っていくことが本論の課題である。こうした問題には、関東地方（田村 1992）を除いてはまだ踏み込んだ研究がなされていない。

前述の本論の目的は、こうした研究背景を踏まえて設定した。地域環境のどのような特徴に適応して、いかなる適応戦略が、どのように構築されていったのか、その背景は何かを、各地の石器群の構造的な研究から具体的に明らかにしていきたい。

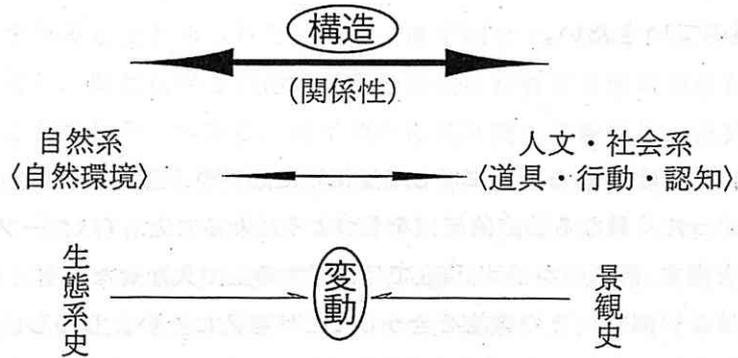
ところで、急速な資料の蓄積が一段落した 1990 年代以後、行政区分を単位とした地域研究の進展は著しいが、広域的な地域間比較の体系的な研究はほとんど行われてこなかった。最近の研究では、行政区分等を基本単位とした小地域内に主たる研究対象を限定することが多い。このため、そうした区分とは本来関係をもたないが、人間集団の適応戦略に基盤的制約を与えている諸条件（古植生環境や石材環境等の資源構造）との関係が見逃されやすいという欠点があった。そしてなにより、佐藤の説にも、またそれ以外の研究者の指摘にもあるように、後期旧石器時代前半期・後半期移行期の変化は広域的に連動して生じていることはまぎれもない。したがって、小地域に区切られた研究では、同移行期を特徴づけている地域を越えた広域的な連動的变化を、正当に評価し解釈することができていないのである。広域的連動性、地域的特殊性の両者を等しく取り扱うためにも、当該期の研究は広域的な地域間比較研究をもっておこなうことが不可欠と考える。

次章では、以上で列挙してきた既往研究の問題点を克服するための、本論の研究方法につ

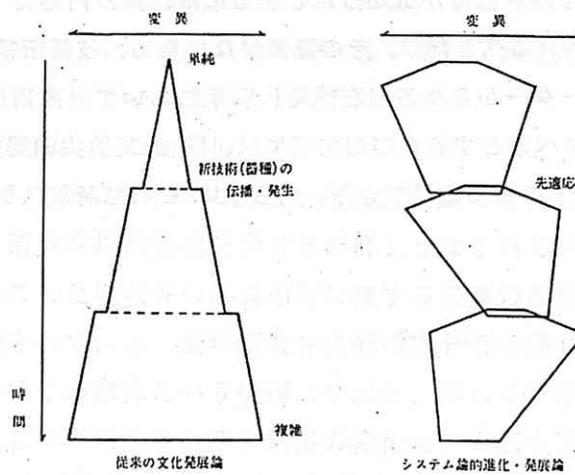
いて具体的に述べていきたい。

## 註

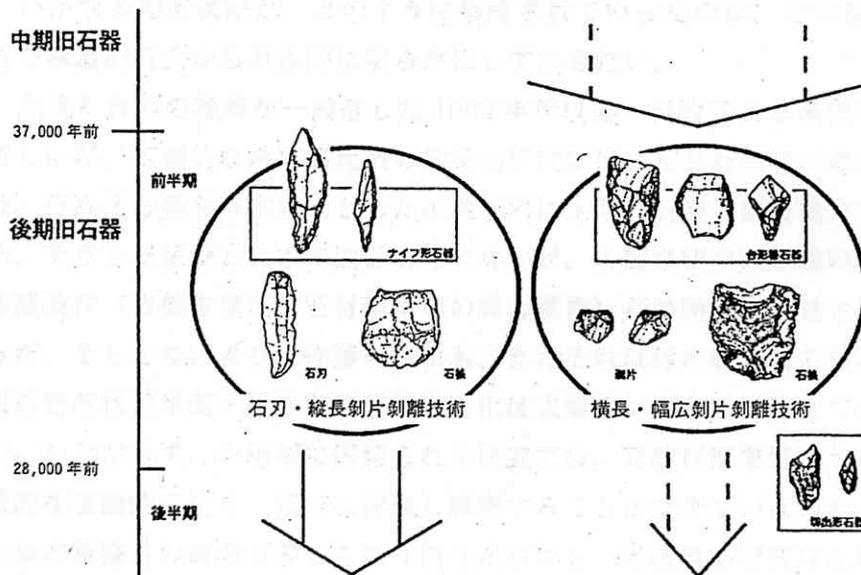
- <sup>(1)</sup> 先適応（前適応）とは、「ある機能に関して進化した形質が、環境条件や生活様式の変化により、それまでとはまったく異なる適応的価値をもつようになること」（パターソン〈磯野直秀・磯野裕子訳〉1982）を指す。鳥類の羽根は、現在では飛行する上で欠かせない重要な機能価を有するが、完全な状態ではない限り、その機能を全うしたとは考えにくい。しかし、鳥類の祖先が今日の鳥と同じく恒温動物であったならば、羽根が不完全であったとしても、体温の保持に十分な役割を果たしたと考えられる。あるときにこれが機能転化を起こしたと説明するのが、先適応の考え方である。
- <sup>(2)</sup> なお、野口は瀬戸内地方から技術が広がったとするには、瀬戸内地方で最も古い段階の国府型ナイフ形石器製作が行われるべきだが、その証拠がないため、技術伝播ではないと考えている。数百年～千年程度のオーダーからなる旧石器時代編年において、技術伝播に段階を超えた時間差（傾斜編年）を想定すべきとする野口の主張には、「中部高地尖頭器文化」に対して加えられた佐藤（1990）の批判がそのまま適用できる。明らかに、これは時間スケールの取り違いである。



第1-1図 構造変動論 (安斎 2008)



第1-2図 システム論的進化・発展論 (佐藤 1992)



台形様石器の技術系統はそれ以前の時代から引き継がれたものだが、基部加工尖頭形石器やナイフ形石器の技術系統は、大型狩猟具の本格的出現に対応して新たに生まれた。

第1-3図 二極構造概念図 (佐藤 2005b)

## 第Ⅱ章 研究の方法的枠組み

### 第1節 石器群の認識法

本章では、前章に見たような構造変動論の立場から、石器群の分析によって人間集団の環境適応戦略をどのように理解していくのかを述べる。構造変動論の立場に立つ安齋正人や佐藤宏之の方法を参照して研究方法の枠組みを構築しているため、すでに前章でも簡単に触れた部分もあるが、本論で採用する方法の枠組みとして、ここで再び体系的に説明したい。最初に、石器群の捉え方についてまとめ、次に実際の分析枠組みや用語・概念を説明する。

遺跡に遺された全ての石器群は、当然ある文化伝統を有する社会集団が残したものである。この意味で、全ての石器群は文化的産物といえる。しかし、そうであるからといって、石器群の示す諸特徴、例えば石器の形態や組成、石器製作技術、およびその組み合わせ（従来の意味でいう「文化」）が、そのまま文化論的単位となるとは限らない。言い換えれば、文化的指標とみなしうるような特徴が、単純に、また直接的に、石器・石器群の表層に反映されるとは考えにくい。

なぜなら、器種・型式は、特定の時代・地域に限定されるということはほとんどなく、むしろ汎世界的に共通したものが存在するというのが常識的理解だからである。とりわけ旧石器時代において、この現象は顕著である。例えば、日本でナイフ形石器と呼ばれているものなどは、日本に限らず旧大陸各地において共通した技術形態的特徴を有するものが存在することは、よく知られている（佐藤 2003a）。また、日本の国内においてさえ、後期旧石器時代後半期に発達する砂川型ナイフ形石器と九州型ナイフ形石器の技術形態的類似性は古くから指摘されてきた。しかし、両者間には直接的な系統関係がなく、発生や発達の時空間を異にして生じうることの背景が明らかにされるにおよび、それらが他人のそら似であって、系統的關係で説明するべきではない現象であることが指摘されている（安齋 2003a）。

この例だけを見ても、器種・型式やその組み合わせに文化伝統を直接対応させて理解することは、有効性に乏しいといえる。現代の我々の生活においても、一見同じように見える道具が必ずしも同じように用いられているわけではないことを考えれば、むしろ当然のことといえよう。

その理由について考えてみたい。まず個々の石器群とは、ある社会集団が日々の生活を営む中での、多様なコンテキストにおいて残されたものである。周知の例で示せば、それは拠点的な居住集落において残されたものである可能性もあれば、狩猟活動中に残された可能性も想定されよう。あるいは、何らかの作業場の可能性もある。私たちの生活の中で考えてみても、日常生活の各場所に残されている様々な道具は、それぞれに大きく異なっているが、それらは全て同じ人間の生活の一側面を構成している。同じように、個々の石器群も、極めて機能的な存在である。だとすると、石器群の内容が異なっても、それが、そのまま文化系

統の違いを示すとは限らないはずである。逆も同じで、同じ内容の石器群が、単純に同一文化系統に属する人々の手によって残されたということにも慎重であるべきである。このため、文化・系統といった観点だけで石器群を理解しようとするのは、現在ではあまりにも一面的といえる。

このような注意を最初に促したことは、プロセス考古学の成果である。プロセス考古学のもたらした、システム論的思考法と民族考古学的知見を踏まえれば、個々の石器群とは、まず当時の社会集団の生活の一側面を、間接的に反映した行動単位として捉えることができる。たとえ同一の社会集団がそれらを残したとしても、生活の場の機能的多様性を反映して、様々な特徴をもつことが普通である。人間集団の文化が直接的に石器群の表層に表現されていると考えるよりも、むしろ多種多様な石器群を残した人間集団の諸活動が、相互に有機的連関をもって、地域的な環境諸条件のなかで生活を成り立たせる適応システムを形成していた、と考えるほうが合理的である。

そもそも、旧石器時代の生活集団は、所与の生態環境下で生存するために、どのような食料資源を、いつ・どこで・どのようにして獲得するかということ、計画立てて遂行していたはずである。そしてそのために、食料資源を効率よく入手するための利器の材料、なかでも石材資源の獲得と消費を、どのようにしてその計画的行動に組み入れるかが常に現実的な課題であった。その際に問題となるのは、石材の性質や形や大きさおよび分布といった石材環境であり、これへの技術適応として、石材的条件に見合った石材の運用技術が、ある時点までの技術伝統の枠内でデザインされている。つまり、食料資源の獲得戦略と、石材運用戦略・石器製作技術は、相互に密接に関連したシステムをなしている。

資源の利用をめぐる人と人との関係もまた、生存戦略のデザインを規制する一側面である。利用可能な資源を、全て望むだけ利用するということは現実には不可能で、技術水準や資源の分布・予測性および量次第で、人間集団が生存する為に必要な資源開発範囲というものも、自ずと変化するものである。資源開発範囲の拡大・縮小、それにともなう人口配置の変化は、当然社会集団間に諸種の軋轢を生むので、その解決方法である社会戦略の再構成が、同時に求められる。したがって、生活システムと社会システムもまた重層的にシステム化されており、不可分の関係態をなすと考えられる。

個々の石器群とは、人間集団のこのような重層的適応系を背景として形成されるため、その形成プロセスには、特に社会と生態に関わる多種多様な条件が階層的に関与していることは明らかである。だからこそ、石器群が示す石器形態や石器製作技術の類似性といった、ある特定の要素（群）を直接石器群荷担者の文化系統とばかり結び付けて理解することには、慎重であるべきなのである。全ての石器群には、これを残した社会集団の日常生活を構成するあらゆる側面が、間接的・重層的に反映されているものと考えられる必要がある（第Ⅱ-1図）。逆にいえば、以上のような想定の方がより堅固な理論的根拠や民族考古学的裏づけを持ち、より説明力が高いと考えられるからこそ、石器群を手掛かりに人間集団の生活行動を解釈する保証が得られるのである。

## 第2節 技術構造と資源

### 1. 技術構造

前節において、石器群が社会生態学的な制約のもとで構築された適応システムの具体的・個別的発現（行動痕跡）であることを論じ、石器群から導かれる考古学的パターンを、文化や系統という観点のみから解釈することの問題を確認した。とはいえ、特に本論のように、広範囲を対象とし、後期旧石器時代前半期から後半期にかけての人間集団の適応戦略を研究主題とする場合、石器群に関与する膨大な変数を問題とし、そのシステム的な相互関係と、構造性を研究対象とすることは至難の業である。

そこでまず、本論では、多くの資料を対象とすることができるため広域での比較がおこないやすい石器製作技術構造を主たる分析対象とする。すなわち、石器群の技術分析を通じて抽出される、石器（ツール）製作と素材供給技術の相関関係を明らかにし、これを技術構造と呼んで、その石器製作の基盤的構造を抽出する。この捉え方は佐藤宏之の二極構造論（佐藤 1988）を先駆とする。佐藤は、この分析法によって、後期旧石器時代における石器製作に通底する基盤構造を明らかにしたことは前章で述べた。

第Ⅱ-2図は、石器と素材供給の関係について、現在知られている例をもとに、網羅的に示したものである。繰り返すように、器種や型式の単なる集合体として「文化」復元を行うという方法は非現実的である。個々の石器は、当時においては道具であり、主に環境資源の利用に使われた石製利器であって、資源利用と直結した機能的存在である（佐藤 2004）。第Ⅱ-2図にみるように、ある機能を担うための石器の種類はおのずと限られてくるのだから、限られた器種・型式の単なる集合体として石器群を整理し（例えば第Ⅱ-2図の、要素間をつなぐ線を取り外して理解する）、この単位間の関係に文化系統論的説明を加えるといった方法は有効とはいえない。そうではなく、限られた種類の石器であっても、石器や技術間の具体的関係（システム）と、これに通底する規則（構造性）、言い換えれば石器の利用法、運用の仕方・原則には、地域固有の環境適応戦略の技術特性がよく反映されると考えられる（佐藤 1992、安斎 2003c）。またそうした構造性は常に通時的に形成されるものであるから、おのずと歴史的固有性をも帯びてくると考えられる<sup>(1)</sup>。

この石器製作の技術構造は、適応行動を構成する諸技術に組み込まれた道具製作の、最も基礎的な側面を反映し、かつ石器群からの直接的アプローチが容易と考えられる。そこで本論でも、この分析法によって、人間集団の環境適応戦略の最も基盤的な側面を読み取ることが第一としたい。またさらに、技術構造の地域間変異や通時的变化の解明から、人間集団の適応戦略の時間的・空間的差異を明らかにしたい。すなわち、多様な石器群を生み出しつつ、それ自体は長く変化しない、石器製作における以上のような不変的・基幹的關係性の時空間分布を抽出するとともに、それらと資源環境との相関的關係を分析することによって、適応戦略の地域固有の特徴とその歴史的变化の意味を評価していきたい。

## 2. 石器モードと石材消費戦略

次に、以上のような方法的枠組みにたって、技術構造に行動論的性格を与えるための諸概念を整理する。技術構造は、例えば〈石刃モード—剥片尖頭器／剥片モード—台形様石器〉というように、静的に表現される。しかし、ここで石刃モードや剥片モードと呼ぶ石器素材供給技術群には、後述するように、石材の消費戦略上の相対的（機能的）な有利／不利の特性がある。そのため、どのようなモードを組み合わせた技術構造であるかということは、その技術によって資源を利用し、生業を営んでいた人間集団の行動戦略上の特徴をよく反映するものである。ここでは様々な特性を持った素材供給技術にかかわる用語・概念を整理しておきたい。

我が国でもよく知られているグレアム・クラークのモード論（Clark 1977）は、発展段階を含意せずに石器群の技術形態学的特徴を記述するものとして有効とされる（佐藤 2003）。我が国でもこれを参照した石器モード論（田村 1989、安齋 2003c）があり、技術に発展段階論的な意味を付与しがちな伝統的技術進歩観を遠ざけて、石器群の技術的特徴を記述するために有意義と考えられる。

さて、我が国の後期旧石器時代には次の石器モードが知られている。

- ・石刃モード
- ・剥片モード
- ・両面体モード
- ・細石刃モード

このうち、本論の対象時期には石刃モード・剥片モード・両面体モードが確認されている。技術構造で表現すれば、石刃モードと剥片モードがそれぞれナイフ形石器・尖頭形石器と台形様石器に結びついた技術構造を成すのが後期旧石器時代前半期であり（二極構造：佐藤 1988）、この関係が解体して新しい技術構造が形成されるのが後期旧石器時代後半期であるとされる。本論ではこの移行過程の解明を主題としていることは、すでに述べてきたとおりである。

さて、石器モードはそれぞれに異なった意味を有すると述べた。その意味は次の通りである。例えば、石刃モードは規格的な石器素材を連続生産することにおいて効果を発揮するが、これを素材として製作可能な石器の形態は、当然ながら石刃自体の形状に制約を受ける。また、石刃モードは石材の選択から、石刃剥離過程に至るまで、相対的に入念な維持管理過程を経ねばならない高コストの技術である。石刃という素材の範囲内で製作可能な石器（道具）を、安定して量産せねばならない場合等には有効であるといえる。しかし、そうでない場合には、より簡便で低コストであることが多い剥片モードを選択・採用するほうが効率的である。

このように、各石器モードはそれぞれ相対的・機能的な特長をもっているのであり、コンテキストを無視してあるモードが他のモードより優れているといった評価を下すことはできない。モード論の主たる意義はここにあると考えられる。したがって、むしろ追究の対象

とせねばならないのは、各々独自の利点をもつ諸石器モードのうち、技術構造の主たる構成要素となっている石器モードが、どのような目的のもと、いかなるコンテキスト（制約条件）によって選択・採用（デザイン：Hayden et al. 1996）されたのかという点になる（佐藤 2003b）。この点の解明により、技術構造の適応行動上の特性を評価していくことができる。

ただし、例えば石刃モードといった場合も、それは「石刃を目的生産物とする」という共通項で包括された諸技術を含んでいる。しかしながら、ここに包括された諸技術も各々異なった石材消費戦略上の特性を有している。そこで、本論ではモード論に立脚しつつも、技術構造の行動戦略上の意義を議論する場合には、各モードを構成するさらに下位の諸技術に着目する。この目的で、最低限区別すべき諸技術を以下に示しておく（第Ⅱ-1表）。

石刃モードは周縁型石刃剥離技術と、小口面型石刃剥離技術に分けることができる（安斎 2003b）。安斎による説明があるとおりに、周縁型は、主に非尖頭形の幅広薄手の石刃を規格生産（量産）するものであり、得られる石刃は刺突具である「背部加工尖頭形石刃石器」<sup>(2)</sup>以外にも、搔器・彫器・削器等の各種石器素材として利用可能な汎用性をもつ。ただし優良石材を前提とし、かつ石核管理がかなり入念に行われねばならず、高コストである。一方、小口面型石刃剥離技術は、主に尖頭形のやや厚手の石刃を規格生産（量産）するものである。この技術で得られる石刃は、打面部付近に最大幅をもつ先細りのものであるため、主として「基部加工尖頭形石刃石器」の素材とされ、汎用性には乏しい。また、小口面型の多くは、単一剥離面（ないし自然面）からの連続打撃によるため技術的に容易で低コストであるが、そうして得られた石刃から有効な形状のものを選択して用いるので、石材消費の上では無駄が生じやすい。

剥片モードには、縦長剥片剥離技術・横長剥片剥離技術がある。いずれも、規格的な石器素材の連続生産はできないかわりに、技術的に簡便であることから、石材選択上の制約は少ない。ただし、制約が少ないというだけであって、粗悪石材だけではなく、優良石材であってもこれらの技術の適用対象となることは注意せねばならない。つまり、適用対象範囲が広いということになる。また、剥片モードのなかにも技術的に特殊化したものがあり、瀬戸内技法や米ヶ森技法として知られているとおりに、それらは規格剥片の連続生産を可能とする。しかしながら、これらの技術から得られた剥片は規格的であるが特殊な形態をもつため、製作可能な石器が限定され、汎用性には乏しい。また優良石材の利用が前提となっている場合が多い。

両面体モードは特異であり評価が難しい。というのも、石刃モード・剥片モードが石器の素材生産技術であるのに対し、両面体モードは素材生産技術とも、石器製作技術とも、あるいはその両者ともなりうるからである。つまり、両面体モードは、単純な石核→素材→石器という構成とは根本的に異質であり、その石材消費戦略上の特性も多様であるので、評価はその採用・運用の現場を捉えて行われねばならない。したがって、石刃モード・剥片モードとは、同じレベルで石材消費戦略上の特性を記述すべきではないが、第Ⅱ-1表では便宜的に示している。

以上、石器モードを構成する諸技術の多様性と、その固有の効果を述べてきた。ところで、

例えば周縁型石刃剥離技術は、伝統的に素材供給を石刃モードでおこなってきた人々の間において、石材消費プロセスの汎用性向上と長寿命化（石材消費ライフサイクルの延長）が求められる場合に採用されやすい。このような特徴を与えられた技術を、「管理的 curated」技術という（Binford 1979）。管理化度合いの高い技術は、高い予測性のもと、入念な維持・整備の下におかれ、様々な状況に対処しうるようにデザインされている。対立概念として、技術の場当たり性を意味する「便宜性 expedient」がある。技術の管理度合いを示すこの二項的概念は、阿子島香や佐藤宏之によって我が国に紹介され（阿子島 1989、佐藤 1988）、技術の特性を解釈する参照枠として有効であるため広く普及しており、本論でも積極的に用いる。

管理性／便宜性に類似するが、異なる概念として、「信頼性 reliable」／「保守性 maintainable」というシステムデザインに関する二項的概念（Bleed 1986）がある。信頼性システムとは、特定目的を遂行するために特殊化したデザインを施されたシステムをさし、可能な限り多くの不測の事態を予見して、できるだけシステムのダウンが起こらないように綿密に構築される。他方、保守性システムとは特定目的に特殊化せず、多様な目的の遂行に適用可能なようにデザインされたシステムであり、システムのダウンなどはしばしば起こるが、保守整備によって継続的な運用が可能ないように構築される。石器製作技術のシステムの性格を説明する場合、このシステムデザインの二項的モデルに基づいたモデル作りが行われることが多い。

なお、管理性／便宜性と信頼性／保守性という概念は、直接対応しない。このことは、例えば湧別技法として知られる細石刃生産技術が、両面体の管理的消費戦略を基本としつつ、各種目的に対処しうる保守性重視の技術であり、管理的かつ保守的な性質を合わせもつことから分かるであろう。厳密に区別して用いられるべきである。

さて、これらは多分に一般性の強いモデルであることから、個別具体的な諸技術を二項的概念のいずれかに直接当てはめる解釈は誤りである。現実にはこの両極端のあいだは間断なく連続体が充填している。これらの概念は、技術的特性を説明するためのモデルづくりにおける準拠枠として参照すべきもの、とみるのが適切である（佐藤 1996）。

### 3. 石器の分類と用語

次に、技術構造を構成する石器と素材供給技術のうち、製作される石器の分類と用語について整理しておきたい。

従来、日本の旧石器考古学では、後期旧石器時代はナイフ形石器の時代とされてきた。この枠組みに基づき、ナイフ形石器の型式論や製作技術分析を通じて得られた考古学的「文化」（石器文化）の時空間配置を調べる文化史研究が主流であった。

しかし、安斎正人は次のように批判する。ナイフ形石器という分類は、その設定以来、著しい定義の拡張を伴っており、「この定義に則れば、列島のいたるところにナイフ形石器が認められることとなり、したがって、後期旧石器時代は『ナイフ形石器文化』として特徴づけられるわけである。裏を返せば、後期旧石器時代は『ナイフ形石器文化』として特徴づけ

られることから、列島のいたるところにナイフ形石器を見出さなければならないわけで、そうした意味では旧石器研究者は自家撞着に陥って」いたのである（安齋 2000）。

そこで安齋は、この文化史的な意味合いだけを与えられた「ナイフ形石器」を解体する作業を進めてきた。すなわち、「ナイフ形石器」に対して先験的に一系的な系統関係を措定すること、文化史・発展段階論的な意味合いを与えることを避け、素材・加工部位・形態を基準とした石器分類を組み立て、分類カテゴリー相互間の関係を読み解いていくことによって、石器の進化的系統関係を再点検したのである。まずは、「ナイフ形石器」とされていた石器のうち、個々の石器がどのような由来をもち、かつそれがどのような変化の背景をもっていたのかを見直せるような分類を設定する必要からである。これによって、安齋は、「ナイフ形石器」に含められていた諸石器が、一系統どころか、それぞれが極めて多様な経緯と背景をもって出現・発達・衰退を繰り返していることを突きとめている（安齋 前掲・2003c）。

本論はこの指摘の重要性を鑑み、安齋およびそれに同調している佐藤（2000）により提唱された石器分類で分析を進めていく。従来基部加工ナイフ形石器や側縁加工ナイフ形石器とされてきたものは次のように分類する。基部加工尖頭形石刃石器（尖頭形石器と略称）・背部加工尖頭形石刃石器（ナイフ形石器と略称）は石刃を素材とした尖頭部・基部を有する石器であり。前者は素材に基部加工を、後者は素材に側縁加工をくわえて製作したものである。主に刺突具（狩猟具）として機能したと推定されている。基部加工尖頭形剥片石器（尖頭形剥片石器と略称）・背部加工尖頭形剥片石器も、素材が剥片であるという点が異なっているが、同じように理解する。切出形石器は二側縁を加工し、斜刃となる刃部が器体中央部より上に位置する石器をさすものとする。端部加工ないし部分加工ナイフ形石器とされてきたものは、着柄のための基部や刺突のための尖頭部をもたないため、截頂石刃として区別する。このほかの分類は概ね従来の分類に基づくが、角錐状石器と呼ばれてきた石器カテゴリーには再検討の余地がある。これは第V章で扱うのでここでは述べない。

#### 4. 技術構造と石材分布構造および居住形態

さて、技術構造は、食糧獲得戦略を中心とした資源利用戦略と密接不可分に構築された、石製道具製作技術の基本的特質を反映している。したがって、石器製作に関わる技術構造は、資源の構造的特質（種類・質・量・分布パターン）の制約を受けつつ計画立てられた生業・居住形態に、かたく組み込まれていたと考えられる。先史狩猟採集民研究では、この生業・居住形態は、居住地点・滞在地点の選定の多様性や規模、各地点における作業内容の変異の分析と、それらのシステムの総合によって導かれる（Binford 1980、安齋 1985、野口 1995、国武 2003）。この生業・居住システムに組み込まれた道具製作技術の構築にあたり、強く作用すると考えられる環境条件は、石器の素材となる石材環境である（第II-1図）。そこで、ここでは石材環境・生業・居住形態と技術構造との関係を論じた重要な研究事例を取り上げて参照し、石器製作技術構造から人間集団の適応戦略の特徴を評価するための方法を整理しておく。

最初に田村隆の研究（田村 1989）を取り上げる。田村は、東部関東～東北地方の後期旧石器時代前半期石器群を対象として、個々の石器群を構成している二項的属性群、すなわち、<限られたタイミングに獲得可能な優良石材—石刃モード—ナイフ形石器>と、<日常的に獲得可能な粗悪石材—剥片モード—台形様石器>という二項的技術系列を見出し、それらが相互に関連して働きつつ多様な廃棄空間（遺跡）をなしていることを指摘し、これを二項的モードと呼んだ。既に佐藤宏之によって提唱されていた二極構造（前述）を、石材獲得消費戦略の視点から捉えなおしたものと評価できる。例えば、良質だが手近では獲得できない石材の場合、その消費にかかわる技術は節約的に工夫される傾向にある一方、日常的にふんだんに入手可能だが質の劣る石材は、浪費的かつ洗練されない粗放な技術で消費される傾向にある。田村は、佐藤によって提唱されていた二極構造を構成する二項的技術、すなわち石刃・縦長剥片剥離技術と幅広・横長剥片剥離技術を、それぞれ石刃モードと剥片モードと読みかえ、前者が優良石材を前提とした技術であり、後者が粗悪石材を前提とした技術であって、両系列が相互補完的に組み合わせられて技術適応をなしていたと説明した。それは、在地に優良な石材産地を持たない石材環境への対応として構築された、技術の構造的特性であったという。石材環境と技術構造の相関的関係を石材消費戦略の観点から具体的に論じた点は、後の研究においても大きな影響を与えている。

ただし、田村自身が述べるように管理的な石刃モードと便宜的な剥片モードの二項的系列化およびその選択は、単に石材環境だけを背景とするものではない。後期旧石器時代前半期二極構造が、上記した石材環境下でない地域でも等しくみとめられることは、二極構造論が指摘するところである。技術の選択に働く石材的要因は、我が国でも 1990 年代以後に多数提出されており（会田 1993、山口 1984・1994 等）、確かに重要な視点ではある。しかし、以上のように、技術の管理化（後述：Binford 1979）は、石材産地との距離や石質と単純な対応関係をみせないということに注意が必要である。例えば、後期旧石器時代前半期の二極構造とその推移は、単純な石材環境のみでは説明できないことを捉え、同時期を通じて認められる石刃モード系列の進展と大型刺突具の拡充傾向は、獲得の方法・タイミングにより大きな制約のある大型獣狩猟への特化と関係がある、と説明する佐藤宏之（1993）の仮説は重要である。第Ⅱ-1 図に示したように、技術構造の変化や地域差が、単に石材環境という要因のみでは説明できない重層的適応系を背景とすることをよく示している。

この大型刺突具の推移に関する佐藤の論点を踏まえ、大型刺突具の供給方法と生業・居住システムとの関係という観点から、技術構造の変化のプロセスに関する地域モデルを提出したのが国武貞克（2005）である。後期旧石器時代前半期中ごろ（武蔵野台地立川ローム層層序記号でいう、Ⅸ層下部～Ⅸ層上部・Ⅶ層下部期）の東部関東の石器群を主に対象として、国武は、製作に際して石材の質やサイズにとりわけ大きな制約を受けるが、生業戦略上、極めて重要な利器であったと思われる大型刺突具を中心として石器製作の技術構造（二極構造・二項的モード論を継承している）を抽出し、その時間的変化を、石材消費行動から推定される生業・居住システムの具体的変化と関連付けて説明している。国武によれば、東部関東におけるⅨ層下部からⅨ層上部・Ⅶ層下部の時期にかけては、技術構造に二項性（二極構

造)が曖昧になり、石刃/剥片両モードから小型刺突具の製作が行われるようになる。また、大型刺突具では、先細り石刃を用いた基部加工尖頭形石刃石器(尖頭形石器)が減少し、先端の尖らない幅広の石刃を用いた背部加工尖頭形石刃石器(ナイフ形石器)が増加する(第Ⅱ-3図)。

技術構造のこのような変化の背景を、安斎正人の所論を参照しつつ国武は次のように説明する。Ⅸ層上部・Ⅶ層下部期には、大型刺突具の素材である石刃の運用方法が、各地点での石刃核消費によってではなく、石刃そのものの携帯へと変化しているため、生業活動に対する予測可能性が高まっていると考えられる。また、石刃や大型刺突具が残される範囲、すなわち国武が生業領域と仮定する範囲が拡大している。したがって、生業領域の広がりとし生業活動の(対象となる資源の)予測可能性が高まっていたため、大型刺突具の素材石刃の量産が必要となった結果、石刃生産において生産される頻度の低い先細り石刃に限らず、多様な形態の石刃をも刺突具素材として用いる必要性が生じた。その帰結として、素材形状の大幅な変形を特徴とする背部加工尖頭形石刃石器(ナイフ形石器)が増加した(安斎 2003a)と同時に、剥片モードが刺突具製作(小型ナイフ形石器)に結びつくようになったのだ、とする。

国武の研究は第Ⅱ-1図でいう生業・居住のシステムと技術構造との関係を具体的に考察したものである。資源獲得の諸戦略の変化が、技術構造にどのような影響を及ぼすかという国武の論において、生業・居住システムの変化は地域を限定した悉皆的な石材調査(田村・国武・吉野 2003、田村 2006)を基礎とする石材利用パターンの研究から組み立てられている。このため、分析と解釈の方法としては十分参考になるが、本論のように広範囲を対象とした場合、遺跡数の保証されない地域では、生業・居住システムの具体的復元が困難となる。以下では、生業・居住システムやその構造の一面を反映していると考えられる考古学的現象(たとえば、遺跡数や遺構の増減パターン等)に言及する場合、生業・居住システムという用語を用いず、「居住形態」という用語でこれを指すこととしたい。

本論では技術構造の通時的変化・地域間変異を、主に石材環境や植生環境から推定される地域的な資源環境の差異と対応させることによって、人間集団の適応系を考察することを中心的主題にすると述べてきた。その際、国武の議論にならい、居住形態が技術構造と資源環境の両者を具体的に媒介する位置づけを有することに注視したい。ただし、国武のいうように居住形態が技術構造を一方向的に変化させるというよりも、技術伝統・技術水準の枠内で居住形態も規制されているわけだから、両者は双方向的に規制し合う関係にあると考えるほうが適切だろう。本論では、技術構造を静的な構造体として抽象化し、その行動戦略上の特性を整理したうえで、資源環境との相関関係から適応戦略を論ずることを基本としながらも、技術構造の実践的な運用状況(遺跡間システム≒生業・居住システム)の部分的反映としての居住形態)にも目配りしながら、地域資源環境(地域生態)への人間集団の適応戦略を、人間の行動的側面に即して論じることを重視する。

ところで、旧石器時代人の道具素材となる石材資源の環境について、ここまで「石材環境」という用語を用いてきたが、以下、本論では「石材分布構造」という概念を用いる。「石材環境」という曖昧な用語とは異なり、「石材分布構造」という場合、石材資源の種類・質・

量・サイズおよびその配置関係と、仮定される生態開発圏との相互的關係を意味するものとする。この概念は、以下の佐藤宏之（1992：298-309）による研究を参照している。

佐藤は、後期旧石器時代後半期を対象に、関東地方と瀬戸内地方の石器製作技術や石材運用戦略の構造的異なりの背景を第Ⅱ-4図のようなモデルで説明する。要約的に述べれば、瀬戸内では、植物相の類似性から推定される回廊状の生態圏を地域集団の開発圏と仮定すると、この開発圏の内部もしくは外周部にほぼ等距離で、単一の優良石材であるサヌカイトが分布する。さらに、瀬戸内では原産地間に石材の優劣の差異が乏しい。このため、瀬戸内の地域集団は開発圏に近接しアクセスの容易な石材分布構造のもとにあったと考えられるので、最近接原産地の利用を基本とし、通時的に安定した石材運用戦略・石器製作技術を構築し得たと考えられる。またその結果、相対的に安定度の高い集団間関係を構築していたと予測できそうであるという。他方、関東地方では、同じような推定の下に求められた開発圏からみて放射状に黒曜石原産地が位置し、さらに産地間の石質の優劣も大きいだけでなく、最優良の信州産黒曜石は開発圏から離れた位置にある。開発圏自体も大河川による地理的分立が顕著である。こうした条件下では、遠方への放射状の石材獲得行動を、日常的な資源開発戦略に組み込むことが困難であったとみられ、在地産の石材を補完しつつも、交換行為によって石材供給を保障するようなシステムが構築されていたとし、石材獲得の方法（当然、石器製作技術に関連する）が時機によってめまぐるしく変化する傾向にあったのではないかという。

この論考の目的は、理論的考察に重心をおいた仮説の提示にあったので、先述の居住形態に関する分析はおこなわれていないのであるが、次のような意義を有する。すなわち、石材環境のうち、人間集団にとって特に重要であったと考えられる諸要素の相互関係を構造的にとらえ（石材分布構造）、植生環境や型式差から推定される推定生業エリア（開発圏）との自然的・社会的関係（距離）を推定して、人間集団の適応系を理解しようと試みている点である。石材産地を単純に、また恣意的に特定の遺跡からの距離関係で捉えるのではなく（遺跡は石材産地から直接移動してきた人々が残したのではないため）、まず石材間の性質の異なりを問題としつつ、その配置を推定生業エリアとの関係で構造的に捉え、その獲得・運用戦略を行動論的に論じていることが重要である。これは、特に後期旧石器時代後半期の地域性形成プロセスと背景を考察するに際し、極めて重要な視点を提供する興味深い方法論と思われる。当然、佐藤の扱った地域を越えて敷衍できる方法的可能性を秘めていながらも、現在に至るまで本格的に取り上げられ、応用された研究例が少ない。この方法は、最近関東地方を中心に活発に行われている一連の石材研究の基礎をなすものと評価せねばならず、先述したように生業・居住システム研究（国武 前掲）を介在させて技術構造の変化や地域差の背景を論じることでさらに有効性を高めうる。しかも石材分布構造に関して現在得られる情報を参照すれば、関東地方ほどの精緻な研究が達成できない地域にも十分に応用できる利点があり、本論のような広域比較研究によく適合する。本論でも、技術構造と石材との関係を考察するにあたっては、この石材分布構造の把握を基本とする。

以上のように、本論は①技術構造の通時的・空間的展開⇄②居住形態⇄③石材分布構造の

3項目のうち、①の分析を軸足に、③との関係を（可能であれば②を媒介として）考察し、人間集団の適応行動の多様性と変化を論じるという方法を採用する。

### 第3節 伝播論の意義

ところで、物質文化に表れた諸現象は、前節で述べたような環境適応行動の経済的合理性だけでは説明しきれない多様性を有することも明らかである。人と自然との関係（構造）とその変動のプロセスを解明するには、生態学的アプローチ重視の中範囲モデルを参照することはもちろん不可欠であるものの、それだけでは不十分と考えられる。閉鎖的条件下における環境への最も合理的な適応、という側面ばかりに注目すると見落とされがちだが、人間の生活文化において断続的に、看過し難い影響を与えているもののひとつに、人やモノに媒介されて社会間を往来する情報の流れが挙げられよう（安斎 2004、森先 2008c）。思考法・行動・技術といった多種多彩な情報の伝播は、生活行動の諸側面に様々な互換的選択肢を追加し、その内容を豊かにするからである。この点は我々自身の生活を意識的に振り返ってみてもよく実感されよう。石器群をてがかりに適応戦略の多様性を理解するにあたっては、生態学的アプローチのほかに、社会集団間を巡る情報伝播の役割にも注意を払うべきである（安斎 1993）。

ところが、従来はこうした伝播現象を考察する場合も、その分析単位が考古学文化であったことに問題がある。というのも、これまで石器群が「文化」、すなわち要素（技術・器種・石材等）の集合体として捉えられているため、石器群の一要素に起こった変化を、他の要素と関係づけて理解する姿勢に欠けていたからである。したがって、伝播とは、基本的にある文化的要素だけが、他のあらゆる条件を無視して一方向的に場所だけを移し、石器群に付加されることを意味していた（安斎 1994・2002）。つまり、伝播とは要素の移動であって、伝播論とは、要素の貸借関係がそのまま文化の変化を表すとの考えにもとづくものであった（第Ⅱ-5図モデルA）。

本論でいう伝播論とは、このような旧来の文化伝播論とは異なる。言い換えると、類型化された考古資料間の相互関係を文化間の関係として捉え、技術の進歩や文化要素の貸借関係（文化間の影響関係）・集団移動によって、文化の変化・変容を論じる伝播論とは別のアプローチである。そもそも、伝播という現象は人と人との間において生じるのであり、またそれは情報の伝達というかたちをとる。したがって、我々が伝播という現象をとおして究明すべき対象も、「文化」間関係ではなく、人間社会間関係であるべきであると考え。この視点で問題とすべきは、彼らが主体となっておこなった情報の伝播プロセスや、情報受容の具体的契機、および多様性の背景ということになる。

本論では、石器群は生活・社会システムに組み込まれた人間集団の諸活動の反映と考えている。したがって、石器群中に認められた変化とは、第一に、人間集団が営んでいる適応行動の組織的変化を背景としているとみなす（安斎 1991a）。もしその変化に、異文化からの何らかの影響関係を考慮する必要がある場合（変化が以前には認められなかったような種

類の遺物の存在によって特徴づけられているなど)も、それは文化間の抽象的な影響関係・要素貸借としてではなく、戦略的行動によって生活を営む人や集団間を巡る情報の伝播を背景とした、適応行動の組織的変化と考える(第Ⅱ-5図モデルB)。

このとき、人間生活を成り立たせている適応系は、自然環境や社会間関係という自らを取り巻く諸条件に対処するために構築されているのだから、情報の伝播は無脈絡に集団間を巡り、受容されるわけでは決してない。モノや情報の社会的受容とは、それぞれの人間集団が、その時点で構築している生存のための適応系において必要とされてこそ、実現されるはずだからである。

例えば、石器製作技術に関する何らかの情報が伝播したとして、情報の受容者側の社会集団が、この技術的情報を全面的に受容し、自らの石器製作技術を、地域コンテクストを無視して抜本的に改変すると考えることは、合理的ではない。なぜなら、情報の解釈は、その時点までに受容者側の社会が地域固有のコンテクストにおいて歴史的にかたちづくられてきた技術伝統に基づいておこなわれるはずだからである。その上で、新しい情報をもとに、地域の石材環境や資源開発戦略に適合するような新しい技術の構築へと向かう必要性に直面してはじめて、適応系の組織的転換を伴う情報の受容が起こると考えられる。このプロセスが社会的受容であり、その結果生じた全体論的な意味での文化変化が「文化変容」と呼ばれるものに相当しよう。

したがって、伝えられた情報は、受信する側の社会のコンテクストに適合するように解釈されるため、情報発信元となる社会において有していたものと同じ機能的位置を担うとは限らない。基本的にコンテクストが異なっている(したがって生活のシステムも異なる)地域間では、一方から他方へと伝えられた一見同種の情報であっても、システムの相違に応じて異なる機能的位置を担うと考えられるためである。

要するに、伝播という現象も、人間集団の適応戦略という脈絡の中でその意味を検討する必要がある。ここでは、情報伝播は人や集団間の接触を通じて頻繁におこなわれているが、この受容にあたっては、各地の人間集団が日常的に直面している生態条件等の地域的諸条件への適応過程を無視して理解すべきではない、ということを確認しておきたい。表面的な「文化」交流や、集団的伝播系統論による「文化」・文化要素の単なる移動・付加という抽象的な議論よりも、地域社会集団が、現実的な問題への解決策として試行錯誤を繰り返している生存の諸戦略に照らして、そうした情報を解釈・受容しているのだ、という理解にたって、伝播の具体相を論ずる方がより現実的であろう(森先 2007c、森先 2008a・c)。

#### 第4節 本研究のフレームワーク

最後に、本研究の基本的フレームワークを提示しておく(第Ⅱ-6図)。要点を次のようにまとめておきたい。

- ①本論では、石器群の技術分析によって、それを残した人間集団の適応行動の基盤をなしていた技術構造を、広範囲にわたって通時的に抽出し、比較することを主におこなう。

②この技術構造を構成する石器素材供給技術には、人間集団の石材消費戦略および行動戦略上の効果が反映されている。モード論に基づいて、その特徴を明らかにすることで、石器群の特徴から人間集団の行動的側面を読み取る。

③こうして明らかにした技術構造の特徴を、実際に技術が運用されている仕方（居住形態）にも注意しながら、石材分布構造との相関関係で捉え、人間集団の適応戦略（特に資源開発戦略）の特徴を明らかにする。これを地域間で比較し、また通時的変化を追跡することによって、人間集団の適応戦略の地域差と変化を評価し得ると考えられる。

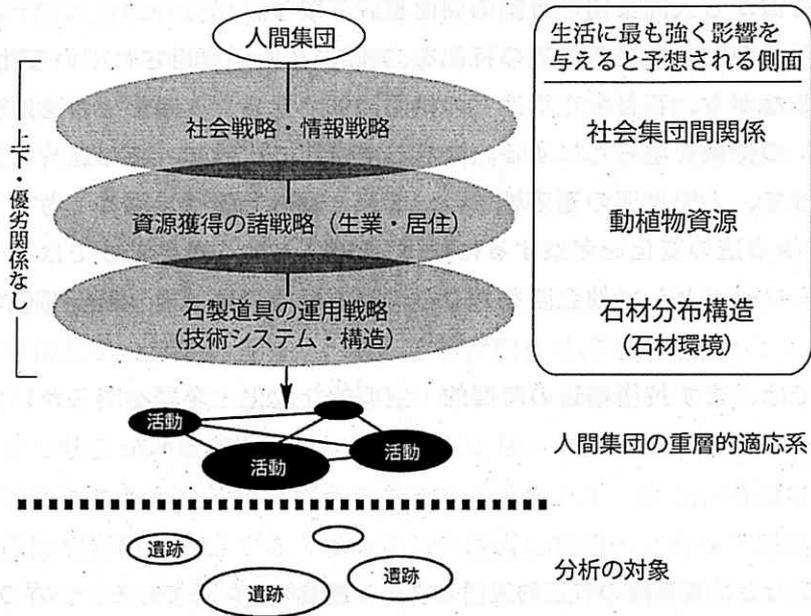
④ただし、技術構造の変化を考察するには、生態適応という観点だけでは不十分である。「情報」をキーワードとして社会間をめぐる情報の伝播の具体相と影響関係の読み解きが重要となる。

次の第Ⅲ章では、まず技術構造の時間的・空間的な変化・変異を明らかにするための編年研究をおこなっていきたい。

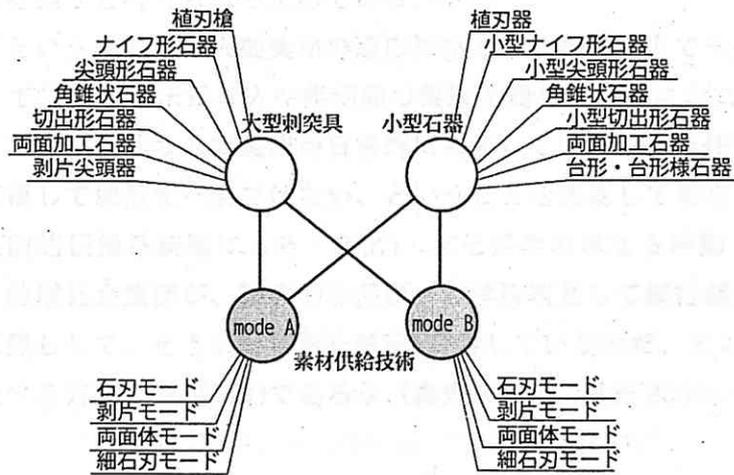
#### 註

(1) なお、システムとは要素間の有機的連関よりなる機能的全体性である。一方の構造とは、システムを生み出すコード・規則である（安斎 2000）。ある構造がいくつものシステムを表現形として生み出す可能性がある。この場合、システムは構造布置ということができる。例えば、後期旧石器時代前半期には、二極構造という技術構造を基本としつつも、地域毎にやや異なる技術システムが構築されていたこと（佐藤 1992）などは、その好例である。

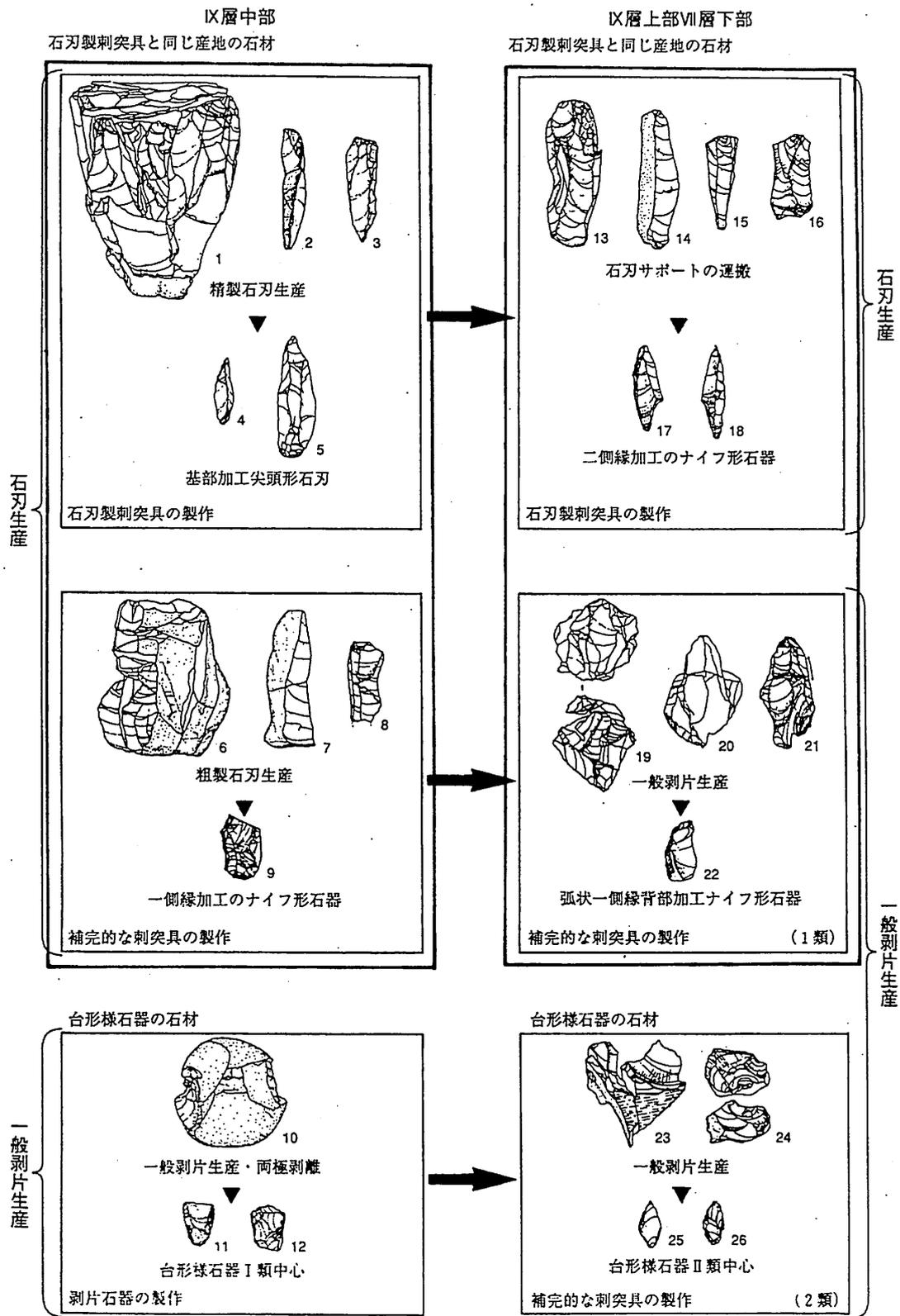
(2) 石器の分類については後述する。（第 2 節 3）。



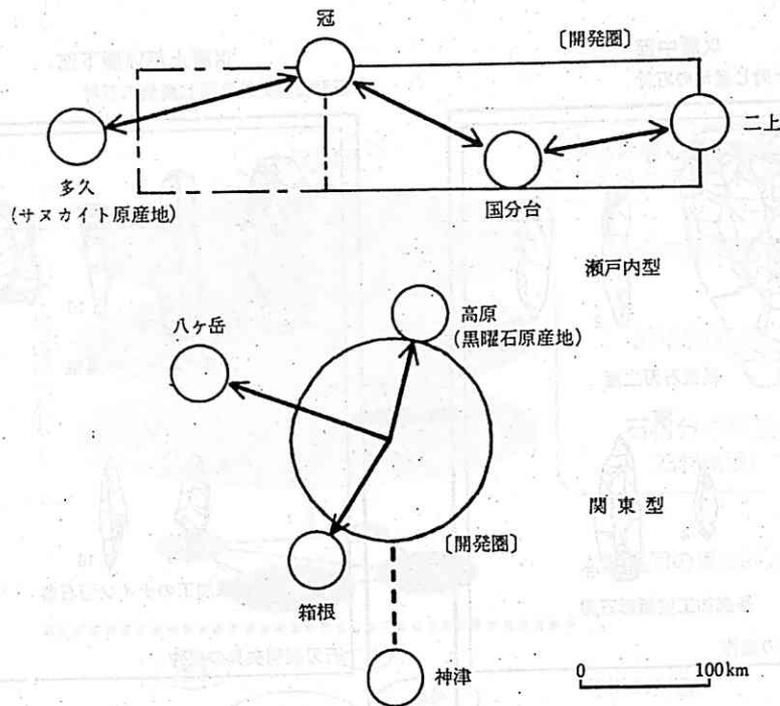
第II-1図 人間集団の重層的適応系



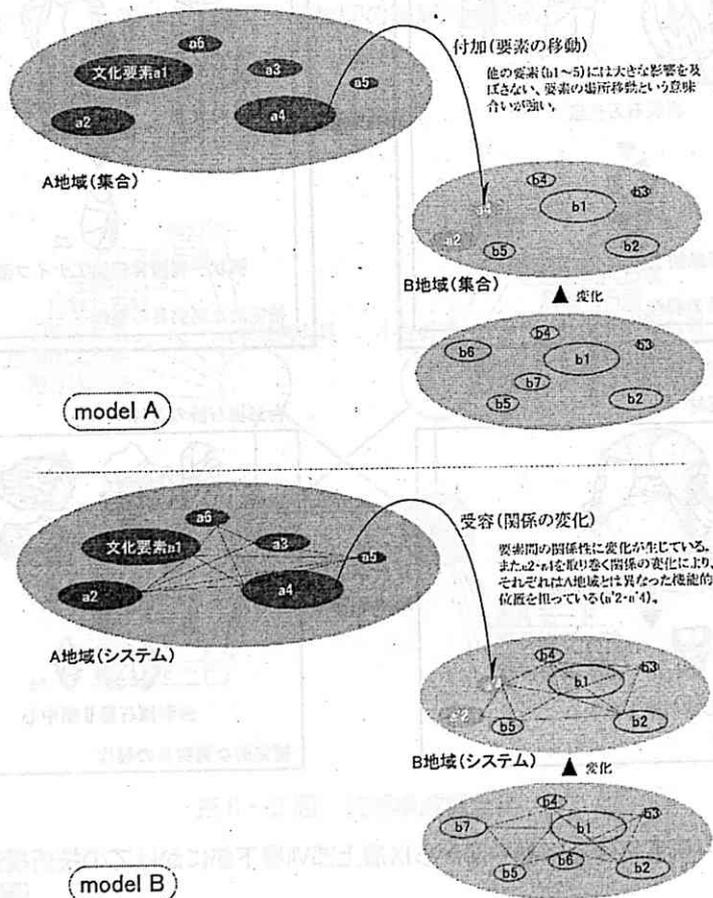
第II-2図 技術構造概念図



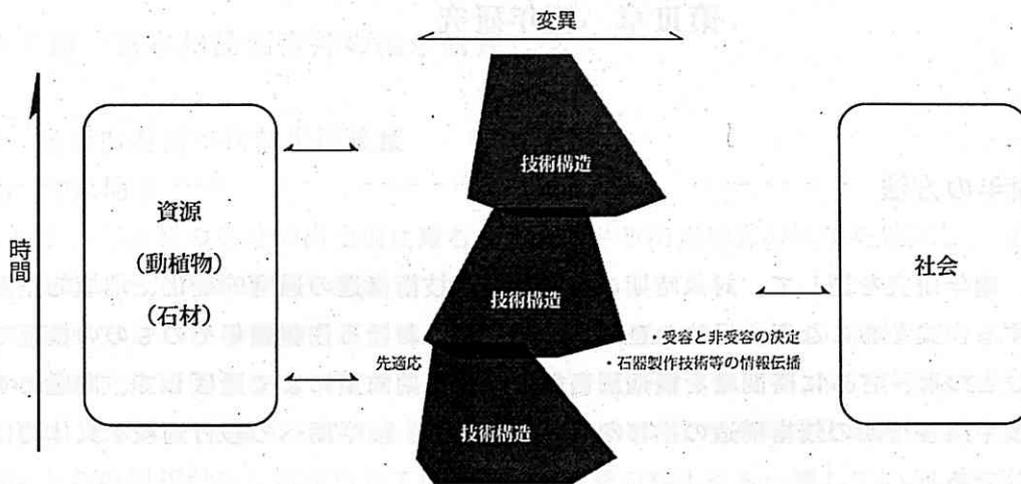
第II-3図 国武によるIX層中部からIX層上部VII層下部にかけての技術構造の変容 (国武 2005)



第II-4図 石材運用戦略の構造差を表すモデル (佐藤 1992)



第II-5図 文化要素の伝播の捉え方 (森先 2007a)



※適応戦略の基盤的側面を反映する技術構造の変化の把握と、そこに作用する自然的・社会的コンテクストの同定によって適応戦略の変化の理解を目指す。

第II-6図 本研究のフレームワーク (佐藤 1992 を参照して作成)

第II-1表 石器モードを構成する諸技術とその効果

モード	素材供給技術	規格生産性	節約生産性	汎用性
石刃モード	周縁型石刃剥離技術	●	●	○
	小口型石刃剥離技術	●	-	-
剥片モード	縦長剥片剥離技術	-	-	○
	横長剥片剥離技術	-	-	○
	規格的横長剥片剥離技術	●	○	-
両面体モード	両面体生産・消費技術	●	●/-	●

凡例) ●: 高い, ○: 普通, -: 低い

### 第三章 編年研究

#### 第1節 編年の方法

本章では、編年研究を通して、対象時期の石器群から技術構造の通時的変化、地域的差異を明らかにする作業をおこなう。目的のひとつは前半期における佐藤編年そのものの検証である。もうひとつは、さらに時間軸を後期旧石器時代後半期前葉にまで延ばして、問題とする前半期／後半期移行期の技術構造の推移を分析・整理し、後半期への移行過程を具体的に跡づけることである。

本研究が対象とするのは、後期旧石器時代前半期から後半期の移行期およびその前後の時期である。具体的には、関東地方立川ロームⅦ層相当の時期からⅣ層中部相当の時期であり、必要に応じてその前後の時期にも言及する。空間的には、氷期の海面低下によって現在の本州・四国・九州が一体化して形成していた島、すなわち古本州島（佐藤 2005a）全域の主要な遺跡を取り扱う。

編年は石器の型式分析（技術形態的分析に基づく）を方法とする佐藤宏之の方法論（佐藤 1992）を参照している。一言でいうと、機能型式学を基本として、石器の系統識別、発達の程度（変異体の多寡）、連動する地理的範囲を確認し、その地理範囲内において定点となりうる層位事例・年代値等を参照しつつ石器群の縦横配置関係がもっとも整合的となるように石器群の年代編成を行った（森先 2007b）。言い換えれば、石器の型式比較によって共時的関係にある石器群を抽出し、これを通底する技術構造とその地域差を導く。さらに、技術構造を共有する地理的範囲の推移を通時的に追究していく。石器の技術形態的特徴は、特定の時期に限られない場合が多いため、石器群の位置づけを型式比較だけでおこなうことは十分な方法といえない。一般におこなわれているように、層位（一遺跡内での新旧関係、広域火山灰との新旧関係）や、理化学年代によってこれを補足・検証しながら、個別石器群の時間的・空間的位置づけ作業を繰り返していく。

ところで、古本州島では、後期旧石器時代を通じて、東北部と西南部で石器群の内容に表面的にも違いがあることが以前より知られている。古本州島東北部（東北地方・新潟県・北陸地方）では基部加工尖頭形石刃石器（尖頭形石器：安斎 2000）が前半期より発達しており、基本的には後半期においてもこの傾向が継続する。一方の西南部（東北部以外）では、背部加工尖頭形石刃石器（ナイフ形石器）が通有の石器であり、ここに基部加工尖頭形石刃石器が加わる。また、台形様石器も東北部では西南部に比べてⅡ類が発達する点に特徴を持つ等の差がある（佐藤 1991）。

東北部と西南部の範囲は常に一定であるとは考えにくいだが、以下では便宜的な地域区分として用いる。ここからは、まず古本州島西南部を、続いて古本州島東北部を対象とした編年研究をおこないたい。

## 第2節 古本州島西南部の編年研究

### 1. 後期旧石器時代前半期後葉

#### (1) 関東地方

まず、石器群の層位的出土例に最も恵まれている関東地方の編年を確認し、編年網を他地域へと広げるための基準を設定しておきたい。

関東地方における後期旧石器時代前半期編年研究には、多くの蓄積があり、すでに1990年の石器文化研究会シンポジウムにて一定の合意が得られてもいる（石器文化研究会1991など）。ただし、佐藤宏之による編年研究（1992）により石器文化の階梯論、集団的伝播系統論からの脱却が成し遂げられて以降、編年研究の枠組みも一変している。同編年は、その後、現在まで同地方を含む前半期編年研究の骨子をなしている。この編年の検証が最初の作業である。筆者は佐藤編年の方法論を参照しているが、その後の資料の蓄積が進行しているため、同様の方法論であっても編年の検証作業が必要である。以下、前半期後葉の編年研究については、新出資料を含めた石器群の分析によって、佐藤の編年案の妥当性を検討していく。この過程で、当該時期の技術構造上の特徴を再確認することになる。また、後述する後期旧石器時代後半期前葉との技術構造の比較に重点を置いての石器製作技術構造の性格付けを行う。

佐藤によれば、前半期前葉の関東地方立川ロームIX層（第二黒色帯下部）期石器群は、典型的な二極構造を示相する。平坦調整・錯向調整による器体整形が発達した台形様石器Ⅰ類（第Ⅲ-1図上段）が中心となり、IX層でも新相には台形様石器Ⅱ類（同中段）と分類される尖頭部を有する台形様石器がしばしば認められるようになる。Ⅲ類（同下段）は形態が安定せず、かつ数量も少ない。これに共伴する石刃モードの石器は、基部加工尖頭形石刃石器（尖頭形石器）と背部加工尖頭形石刃石器（ナイフ形石器）である。後者は素材石刃を斜めに切り取る、いわゆる「茂呂型」はほとんどみられず、素材石刃打面部が基部に据えられ、片側縁全縁に調整が及ぶものを中心とする（佐藤1992）。またいずれも4～6cm程度の中型品を主体とし、際立って大型のものはほとんど見られない。剥片モードと台形様石器、石刃モードと基部・背部加工尖頭形石器が結合して石器製作を成り立たせており、前者からなる遺跡は多数あるが、後者のみ、あるいは後者を伴う遺跡は非常に少なく、石刃モード系が管理的存在であったことが示される。佐藤宏之は、この技術構造と遺跡間システムを捉えて、当時の人間集団の行動論的な二項論理、すなわち二極構造（第Ⅰ-3図）を導いたのである（佐藤1988）。

前半期後葉のⅦ層（第二黒色帯上部）期には、下里本村遺跡（大竹・須藤ほか1982）に見るように、台形様石器Ⅰ類に加え台形様石器Ⅱ類が目立つ石器群が多いという傾向が指摘されている（第Ⅲ-2図2）。ただし、台形様石器Ⅱ類の発達は、群馬県波志江西宿<sup>(1)</sup>（麻生・桜井編2004）、同分郷八崎遺跡（白石・右島1986）や同磯山遺跡（芹沢編1977）のように（第Ⅲ-3図1～4・6・11・17・20・35）、北関東地方でより顕著である（佐藤1991）。形態

的に安定した台形様石器Ⅱ類に特徴を持つ石器群では、石刃モードでも打面部に最大幅をもつ中型尖頭形石刃が主体である。一方、群馬県後田遺跡(麻生 1986)や勝保沢中ノ山遺跡(岩崎ほか 1989)、見立溜井遺跡(小野・巾ほか 1985)などの石器群では、台形様石器をほとんど伴わず、より長狭型・大型の石刃と大小のナイフ形石器の形態分化(厚手大型品、長狭中小型品、幅広中小型品)に特徴をもつ(第Ⅲ-4図1~8、16・17)。Ⅶ層並行期の石器群にも、こうしたバリエーションがある。佐藤はこうした技術的特徴の差異を評価し、前後の時期との連続性も考慮して、前者をⅦ層下部期に、後者をⅦ層上部期として細別した。なお、Ⅶ層上部期の石器群には、特に南関東地方では台形様石器の衰退が著しく、かわって剥片製小型ナイフ形石器や切出形石器が台形様石器の機能的位置を置換する一方、北関東地方では、後田型台形様石器(同10~15、22~29)がⅦ層上部でも新しい時期に出現するといわれる。この後田型台形様石器は、関東地方の内部ではその由来を追跡できないため、同時期の東北地方にその出自を求める必要がある(佐藤 1991)。

さて、以上のほか、Ⅶ層並行期の石器群としては、東京都大門遺跡第4文化層(隅田編 1990)、千葉県北海道遺跡第Ⅶ文化層(阪田・藤岡 1985)、同東林跡遺跡(麻生・織笠ほか 1984)、香山新田中横堀〈空港No.7〉(西山・西川編 1984)、同聖人塚遺跡(田村編 1986)などが代表的とされる(第Ⅲ-6図)。

なお、ナイフ形石器には基部に弱い抉りを入れた厚手中型の有肩形のものがあり、Ⅶ層並行期に特徴的である。南関東地方では橋本遺跡第Ⅵ文化層(青木・金山ほか 1984)に(第Ⅲ-5図1)、北関東地方では群馬県大上遺跡第Ⅲ文化層(関口編 2008)に好例がある(第Ⅲ-6図24~27)。同図に見られるように、弧状一側縁加工のナイフ形石器(同13・28)も、Ⅶ層並行期を特徴づけるといわれる。

佐藤編年以後の資料を通覧しても、以上の特徴には変更を要しない。武蔵野台地立川ロームⅦ層出土の代表的な遺跡としては、成増との山遺跡第4文化層(林 1992)、羽根沢台遺跡第Ⅶ文化層(吉田・高麗ほか 1996)、瀬田遺跡第7文化層(寺田・高杉ほか 1997)、西台後藤田遺跡(藤波・林ほか 1999)、堂ヶ谷戸遺跡32次調査地第5文化層(久末・高杉ほか 2001)が知られている(第Ⅲ-5図)。これらの遺跡でも、先に紹介した佐藤の細分案におおむね沿うような石器群が出土しているといっていよい。堂ヶ谷戸遺跡32次調査地第5文化層や西台後藤田遺跡Ⅶ層石器群にはわずかに台形様石器(同10・16)がともなう。

続くⅥ層期の石器群としては、著名な神奈川県寺尾遺跡(鈴木・白石 1980)、同橋本遺跡第Ⅴ文化層、東京都鈴木遺跡Odグリッド(加藤ほか 1978)、千葉県栗野Ⅰ遺跡(田島 1991)、同権現後第4文化層(阪田・橋本 1984)、同飯仲金堀遺跡(蔀・酒井ほか 1994)、群馬県堀下八幡遺跡(岩崎 1990)があげられてきた(第Ⅲ-7・8・10図)。佐藤編年以後の代表遺跡としては、Ⅵ層付近出土の東京都堂ヶ谷戸遺跡32次調査地第4文化層(久末・高杉ほか 前掲)、同瀬田遺跡第6文化層(寺田・高杉ほか 前掲)、同菅原神社台地上遺跡(比田井・鶴間ほか 1997)、千葉県取香和田戸遺跡第5文化層(小久貫・新田編 1994)、群馬県書上本山遺跡(山口逸弘編 1992)、房谷戸遺跡第Ⅱ文化層(谷藤編 1992)などがあげられるが(第Ⅲ-9~11図)、それらの特徴は寺尾遺跡と鈴木遺跡の石器群の変異幅に収まり、

従来の見解を覆す内容ではない。すなわち、すでにⅨ層期のようなナイフ形石器・尖頭形石器と台形様石器からなる二極構造は変容し、大型品を中心とする尖頭形石器（第Ⅲ-7図11・12・26・32、第Ⅲ-8図1、24）や二側縁加工品を中心とする中大型のナイフ形石器（第Ⅲ-7図1～6、14～18、33～35、38～40、第Ⅲ-8図2～6、13・14・15）と、小型幅広の剥片・石刃製ナイフ形石器・切出形石器（第Ⅲ-7図21～25、28、第Ⅲ-8図16・18～20）が対をなしていると考えられる。ナイフ形石器はまだ厚みの均質化が図られていない。台形様石器は姿を消し、ナイフ形石器の形態内での二極的構造をなしているとされ（佐藤1992、安斎2003c）、二極構造にみるような剥片剥離技術と石器との規定的関係はみられない。基本的に北関東地方（第Ⅲ-10・11図）でも近い様相であるが、群馬県堀下八幡遺跡では剥片製で急斜度調整による矩形の台形様石器が残存している（第Ⅲ-10図4・5・8）。古本州島東北部に通ずる特徴である（第Ⅲ章第3節）。

ところで、東京都真砂遺跡（岡崎・岡本1987）、同四葉地区遺跡西部台地ブロック20（依田ほか1996）では、柳葉形を含む剥片製小型ナイフ形石器や、小型切出形石器が出土しており、出土層位から見てⅥ層期と考えられる（第Ⅲ-9図21～27）。北関東地方でも、群馬県三ツ子沢中遺跡（池田編2000）で剥片製小型ナイフ形石器や切出形石器がAT層直下からまとまって出土した（第Ⅲ-11図10～35）。Ⅵ層期には、こうした柳葉形のものを含む剥片製小型ナイフ形石器がまとまって出土することが特徴的である。柳葉形の剥片製小型ナイフ形石器や、切出形石器は、西南日本のⅥ層期を特徴づける石器群でもある（佐藤前掲）。

なお、Ⅵ層期の関東地方では、国府型ナイフ形石器に類似する石器の出土が知られている。神奈川県橋本遺跡第Ⅴ文化層例（第Ⅲ-7図31、青木・金山1990）や東京都西之台遺跡B地点Ⅶ層（小田編1980）の例がある。いずれも横長剥片を素材とし、素材打面側一側縁を加工するという意味で国府型に類似するが、小型薄手で、かつ打面調整が対向調整になるという点で異なる。実見したかぎり、これらの技術的特徴はむしろ後述するⅥ層並行期の剥片製小型ナイフ形石器に近い。関東地方以外でも類似した石器は広い範囲で認められる。時期的にみて国府型ナイフ形石器との直接的系統関係を想定する必要はないと思われる。

関東地方では、ナイフ形石器と台形様石器（・切出形石器・剥片製小型ナイフ形石器）からなる二極構造が、特にⅥ層期においてナイフ形石器の内部での大小二項性へと変換されたという評価が下されており（佐藤1992、安斎2003c）、新しい資料からみてもこのことには変更の必要は無いと考える。

## (2) 東海地方

後期旧石器時代後半期に入るまで、東海地方のうち東部（沼津・三島市を中心とする）は、型式学的には関東地方と非常によく共通する。この地域は富士火山を給源とするローカルテフラが頻繁に降灰して厚い地層を形成しており、石器群包含層の位置を時期比定の参照軸として用いることの有効性が、他地域よりもはるかに高い（第Ⅲ-12図）。資料数も豊富で、最近では第二東名道関連の発掘調査による資料の整理・報告作業が進行している。最近の資料を含めて検討された幾つかの編年案が既にあるが（高尾1994・2006、笹原2005）、それ

らの内容にも相互に大きな違いはない。要素主義的な石器群の解釈法には問題があるものの、編年的には妥当である。したがって、以下では既往編年を参照しながら、関東地方との並行関係を検討しつつ石器群の通時的配置を考察した。東海地方中・西部については後に触れる。

東海地方東部において、前半期後葉の石器群は基本的に Sc III b1 (第Ⅲスコリア帯上位黒色帯) 層から AT 包含層である NL (ニセローム) 層までに含まれている (第Ⅲ-12 図参照)。Ⅶ層並行期の石器群には、Sc III b1 層を主たる包含層とする中身代第Ⅰ遺跡第Ⅲ文化層・同第Ⅳ文化層 (高尾編 1989)・中身代第Ⅱ遺跡 X Ⅲ層石器群 (高尾編 1988)、BB Ⅲ (第Ⅲ黒色帯) 層を主たる包含層とする清水柳北遺跡中央尾根 (関野哲夫ほか 1990)・西大曲第Ⅰ文化層 (鈴木・小野ほか 1980)・初音ヶ原 A 遺跡第 2 地点第Ⅲ文化層 (鈴木・伊藤ほか 1999) のものが該当するだろう (第Ⅲ-13・14 図)。

出土層位の差異は石器の型式的差異とも概ね一致している。Sc III b1 層出土のものは尖頭形石器 (第Ⅲ-13 図 1) や二側縁加工ナイフ形石器 (同 8)、中見代Ⅱ遺跡 X Ⅲ層のようなやや短寸の弧状一側縁ナイフ形石器に特徴を有し (同 2)、いずれも厚手石刃ないし縦長剥片製である。これらには主に黒曜石からなる剥片製小型ナイフ形石器・台形様石器と少数の切出形石器が同時併存している (同 3~7)。中見代第Ⅰ遺跡第Ⅲ文化層では剥片製小型ナイフ形石器 (同 12~15) や台形様石器 (同 17・18)・切出形石器 (同 10) がまとまっており、截頂石刃も認められる (同 16)。同第Ⅳ文化層では大型の尖頭形石器が出土している。一方、BB Ⅲでは尖頭形石器のほかに対向調整によって石刃を厚く切り取った二側縁加工ナイフ形石器 (同 22~31) が多数認められるようになる。中大型が多く、かなり細身である。ここでも基部に抉り入り状の加工を持つものがある (同 31)。それらの素材は、平坦打面を有し両側縁のよく並行する長狭型の中大型石刃である。やはり黒曜石を主石材とする、前時期より形態的に安定した剥片製小型ナイフ形石器と切出形石器が同時併存するが (第Ⅲ-14 図 1~10)、台形様石器は少ない。剥片製小型ナイフ形石器は長狭なものが目立つ。Sc III b1 層 (古い時期) と BB Ⅲ (新しい時期) の様相差は、Ⅶ層並行期のなかにおける細別時期差と捉えられる。

Ⅵ層並行期に相当するのは基本的に第二黒色帯 (BB Ⅱ) 層から NL 層出土の石器群と考えられる。BB Ⅱ層出土石器群には、清水柳北遺跡東尾根 (関野哲夫ほか 前掲)・初音ヶ原 A 遺跡第 3 地点第 1 文化層 (鈴木編 1992) が、NL 層及びその直上にはやはり清水柳北遺跡東尾根と、子ノ神遺跡第Ⅱ文化層 (石川編 1982) の資料がある (第Ⅲ-15 図)。

前時期から増加した二側縁加工ナイフ形石器が継続し、基部に弱い抉り入り加工を持つものもあるが、やや小型化する (同 12~14)。子ノ神遺跡第Ⅱ文化層にみるように、同時期には黒曜石製の切出形石器 (同 22・23) や剥片製小型ナイフ形石器 (同 15~21・25) が併存し、その形態は前時期よりさらに安定化している。基部が幅広に仕上げられ幅広であるのが特徴となる。清水柳北遺跡東尾根 NL 層出土資料には柳葉形の剥片製小型ナイフ形石器 (同 30・31) と切出形石器 (同 33) がみられる。いずれも黒曜石製が中心となる。

以上のことから、Ⅶ層上部並行期では台形様石器が極めて少なくなり、切出形石器や剥片

製小型ナイフ形石器が中大型ナイフ形石器と対をなすが、両項に対応して石材種の違いと廃棄遺跡の違いが看取される。他方、VI層並行期には黒曜石製の石器が中心になり、また同一の石材から生み出されるナイフ形石器系列内部での作り分け（中型ナイフ形石器／剥片製小型ナイフ形石器・切出形石器）となり、VII層並行期までのような明瞭な対照性が確認し難くなることには注目すべきである。このことは、VII層上部並行期で明らかな技術構造の変容が見られ始めるが、VI層並行期に明瞭な技術構造の変化が生じたことを意味する。

東海地方中・西部では前半期後葉に相当する石器群が極めて乏しい。東海地方中部の石器群は、ほぼ静岡県西端の磐田市に位置する磐田原台地から発見されている。この地域ではIX層並行期と思われる道東遺跡下層（木村編 1992）出土台形様石器のほかは、前半期後葉の石器群として広野北遺跡 K3 期石器群（山下編 1985）があるだけである（第Ⅲ-16 図 1～15）。4cm 前後の二側縁加工ナイフ形石器（同 1～5・7・8・12）や尖頭形石器（同 11・13）、切出形石器（同 10）に特徴をもつ。ナイフ形石器は厚さが個体によって多様で均質でなく、背部加工に対向調整が見られるものがあることは、VI層期の石器群の特徴である。先端部の加工をやや屈曲させて施す特徴があり（同 2・4）、関東地方でも堂ヶ谷戸遺跡 32 次調査地第 4 文化層石器群（第Ⅲ-7 図 34・38）など VI 層並行期に多い特徴である。弧状一側縁加工ナイフ形石器を含む（同 15）。石器群は暗色帯中に含まれており、この暗色帯に確認された AT 火山ガラスの濃集層準とほぼ同位から出土したとされ、上層の砂川石器群（IV 層中部並行期）に対比できるであろう石器群よりも下位に位置することから、VI 層並行期と見てほぼ間違いない。

東海地方西部は愛知県西部・岐阜県である。愛知県西部の資料はきわめて零細で、前半期に遡る資料はほとんど知られていない。愛知県の上品野遺跡（愛知県史編さん委員会 2002、斉藤 2003）出土の台形様石器は IX 層並行期である。岐阜県下では、ほとんどの資料が、長良川・木曾川中流域に挟まれた各務原台地周辺地域から出土しているが、前半期の資料は乏しい。椿洞遺跡 K Ⅲ 期石器群（堀編 1989）は、角錐状石器を多出する K Ⅱ 期石器群より下位の、AT 降灰層準とほぼ同層位から出土したとされる（第Ⅲ-16 図 16～23）。基部が尖らない小型切出形石器（18～20）や、剥片製小型ナイフ形石器（同 16・17）からなる。小型の弧状一側縁加工ナイフ形石器を含む（同 21）。石器群の内容、出土層位からみて VI 層並行期と思われる。また、岐阜県寺屋敷遺跡（三島・藤根 2001）も、横打剥片製小型ナイフ形石器（24・25）、弧状一側縁加工ナイフ形石器（同 26・29）、切出形石器（同 30）と搔器等からなる石器群である。このほかには、IX 層並行期とおもわれる岐阜県寺田遺跡ブロック外出土（吉田編 1987）の台形様石器と局部磨製石斧をあげることができるだけである（佐藤 1992）。

### (3) 中部高地

長野県下の資料を取り扱う。ただし、野尻湖遺跡群については新潟県とのつながりが深いため、次節の古本州島東北部の編年において扱う。ここではそれ以外の地域の資料について述べたい。

和田・諏訪・鷹山および八ヶ岳の良質黒曜石原産地を擁するこの地域では、しかし前半期

に属する遺跡がそれほど多くはない。そのなかで、特に近年報告された追分遺跡群（大竹・勝見ほか 2001）の成果が最も重要であろう。追分遺跡では、遺跡近傍を流れる鷹山川から供給される砂礫層を間層として、5つの文化層が把握されている（第Ⅲ－17 図基本層序）。出土状態としては、この地域では例を見ないほど良好であり、編年的基準となりうる。各文化層からは、放射性炭素年代測定による年代値も比較的多く得られている。

このうち、AT から数枚の間層を挟んで下位に位置する第5文化層は、黒曜石製の石器群からなる（第Ⅲ－17 図9～18）。幅広大型～中型の基部加工尖頭形石刃石器（同9・10）に、Ⅱ類に特徴をもつ台形様石器（同11～18）が伴出したことが特徴である。Ⅱ類は錯向状ないし背面から腹面側への基部加工に特徴を有しており（同11～13）、その特徴は栃木県磯山遺跡や、後述の岩手県上萩森遺跡に対比可能で、Ⅶ層下部並行期に位置づけることができる。なお、石刃は平坦打面をもち幅広で、5～7cm 程度の中型品から主になっているが、その生産過程は遺跡内では顕著でないらしい。この文化層に与えられた放射性炭素年代は 29306～3130914CyrBP であるが、Ⅶ層並行期の年代としてはやや古く、報告書でも古い有機物が混入した可能性等の検討が必要としている。

追分遺跡第5文化層の内容を見る限り、中部高地Ⅶ層並行期でも、台形様石器Ⅱ類の発達が比較的顕著である。この特徴は南関東地方よりも、北関東地方から古本州島東北部に共通する。

Ⅵ層並行期では、茶臼山遺跡（藤森・戸沢 1962、諏訪市史編纂委員会編 1986）出土石器群（第Ⅲ－18 図1～13）が、例えば寺尾遺跡第Ⅵ文化層（鈴木・白石 1980）などの大型尖頭形石器・二側縁加工ナイフ形石器に共通する特徴をもち、定型的な搔器（同11・12）や長狭形の截頂石刃（同5～7）を伴う点でⅥ層並行期に位置づけられよう。出土している石斧（同13）は、やや小型の短冊形で直線的な刃部をもち、側縁の調整が直線的で丁寧であること等から、前半期でも新しい様相をもつことも矛盾しない（長崎 1987、佐藤 1991）。同じく諏訪市の池のくるみ遺跡出土石器群（金井・石井・大脇 1969、諏訪市史編纂委員会編 1986）は、尖頭形石器やナイフ形石器の特徴において茶臼山遺跡に共通し、多数の石刃製搔器を伴うこと等からⅥ層並行期と思われる（第Ⅲ－18 図14～25）。ここでは、池のくるみ型台形様石器が伴う。池のくるみ型とは、佐藤宏之によって抽出・設定されたもので、台形様石器の終末的形態を示す一型式とされる。長野県池のくるみ遺跡出土の台形様石器（同14～16）を基準資料とし、北海道北見市の美里洞窟例（宮 1985）や、野尻仲町風成黒色帯（野尻湖人類考古グループ 1987）出土例、等が関連する資料としてあげられている。その特徴は、「両側縁を弧状にトリミングし、急傾斜な背部加工を加えた平縁刃部の台形様石器」とされている（佐藤 1991）。古本州島東北部にかけて分布する型式であり注意しておく。古本州島東北部の編年研究（本章第3節）において再び触れたい。

このほか、追分遺跡第4文化層（大竹・勝見ほか 前掲）もⅥ層並行期であろう（第Ⅲ－17 図1～8）。本文化層はATの直上層にあり、尖頭形石器（同1・2・3）や幅広の剥片製ナイフ形石器（同4・5）に加え、截頂石刃とおもわれるもの（同6）、矩形の台形様石器（同7・8）が出土した。尖頭形石器やナイフ形石器の特徴および出土層位からみて、Ⅵ層並行期と考え

るべきだが、矩形台形様石器が残存している点が注目される。北関東地方や古本州島東北部との共通性が看取されるからである。与えられた放射性炭素年代はかなりのばらつきを見せる上に、AT直上であるにもかかわらず、25000±14CyrBPを超える値が多いなど、石器群の年代として用いるには問題を残す。

以上のように、中部高地のⅦ層並行期は、基本的には関東地方（特に北関東）やより北の地域と類似した台形様石器の進化を示し、台形様石器Ⅱ類の発達に特徴をもつ。さらにⅥ層並行期には池のくるみ型が存在することをみても、やはり古本州島東北部日本海側とのつながりが深い。ただし、石刃製石器（尖頭形石器・ナイフ形石器）の特徴は、関東地方と共通し、尖頭形石器の系統的進化に特徴づけられる古本州島東北部とは異なる。この意味で、中部高地の石器群は関東地方と古本州島東北部の双方と共通点をもちながら、独自の地域性をなしているといえそうである。池のくるみ型台形様石器の存在が特異的であるが、それでもⅥ層並行期の内部において石刃石器モードを中心とした石器製作技術構造へと傾斜を深めていく点は周辺地域と共通する。

#### (4) 近畿・瀬戸内地方

この地域では、後期旧石器時代前半期の石器群が少なく、後期旧石器時代後半期の資料が多数分布する大阪平野周辺丘陵部でも零細である。ただし、後述のようにⅥ層並行期の資料は抽出可能である。

現在、近畿地方とされている範囲内だが、ほぼ中国山地東縁に位置する兵庫県七市遺跡（久保・藤田編 1990〈1次調査〉、山本・青木ほか編 2004〈3次調査〉）および板井寺ヶ谷遺跡（山口編 1991）では、前半期後葉の石器群が層位的に検出されている。これらの遺跡の情報が編年上の鍵となる。

七市3次調査地第Ⅱ文化層（久保・藤田編 前掲）では、AT直下の第Ⅳ文化層よりさらに下位から、台形様石器を主とする石器群が出土している（第Ⅲ-19図 25～36）。やや短寸幅広の縦長剥片ないし尖頭石刃製の尖頭形石器があるが（同 19・20）、このほかは台形様石器からなっている。台形様石器には大小のⅠ類（同 27～29）、この地域では少ない基部加工の発達したⅡ類（同 31）、そしてⅢ類（同 32・35）が認められる。Ⅲ類の規格性は低いが、Ⅱ類は関東地方および古本州島東北部のⅦ層下部を特徴づける同種石器に対比できる。加工の精緻な薄手の切出形石器（同 33・34）や、撥型の局部磨製石斧（同 36）が相伴している。台形様石器と局部磨製石斧の特徴から見てⅦ層下部並行期である。大型の台形様石器の発達と、石刃モードの未発達な点が関東地方等と比べて特異である。

板井寺ヶ谷遺跡では、極めて良好なAT層の堆積が認められている。その下位（下位文化層）から、チャート縦長剥片素材の中大型ナイフ形石器・弧状一側縁加工ナイフ形石器（同 1～5）、チャート横長剥片製の側縁加工ナイフ形石器（同 10）、柳葉形横長剥片製小型ナイフ形石器（同 12～14・16）、形態的に安定しないやや大型の台形様石器（同 6～8）、撥型薄手の局部磨製石斧（同 26）、比較的安定した弧状刃部をもつ搔器（同 19～24）が多数出土している。AT下位出土で、細長い厚手の弧状一側縁加工ナイフ形石器を伴う点、形態の安定し

た弧状刃部を持つ搔器を一定数伴う点から、Ⅶ層並行期でも新しい時期とみなすのが妥当である。やはり大型の台形様石器の存在と、横長剥片製小型ナイフ形石器は、同時期の他地域では認められない特徴であるので、この地域における横長剥片剥離技術の特異性を示していよう。なお、七日市遺跡1次調査地第Ⅱ文化層も近い様相をもつ。

Ⅵ層並行期と思われるのは、七日市遺跡第Ⅲ文化層（久保・藤田編 1990）である（佐藤 1992）。AT直下から検出されたこの文化層では、チャート製の剥片製小型ナイフ形石器がまとまって検出されており、剥片剥離も活発におこなわれている（第Ⅲ-20 図1~17）。

七日市遺跡（第3次調査）第Ⅳ文化層（山本・青木ほか編 前掲）は、上記の第Ⅲ文化層と同様にAT直下出土の石器群であるが、第3文化層とは内容が異なっている（第Ⅲ-20 図18~35）。本石器群を特徴づけるのは、サヌカイト製の側縁加工横長剥片製小型ナイフ形石器（同22~26）で、柳葉形・薄手である点、背部加工が対向調整による点に特徴をもつ。この点で、Ⅶ層上部並行期の板井寺ヶ谷遺跡下位文化層と異なる。チャート製で形態・加工の安定した薄手の切出形石器（同19・20）、サヌカイトの横長剥片製で素材の先鋭な刃部を活かしつつ基部を作出したペン先形を呈する尖頭形剥片石器（同18）や、小型のチャート剥片を用いて対向調整により概ね逆三角形に仕上げた台形様石器（同21）等を伴う。まとまって含まれる柳葉形の剥片製小型ナイフ形石器、切出形石器の型式的特徴、出土層準から見てⅥ層並行期に位置づけるのが適当と思われる。

七日市遺跡第Ⅳ文化層と対比できるのは、大阪府粟生間谷遺跡ブロック1出土石器群（新海編 2003）である。本石器群ではサヌカイト横打剥片製の柳葉形小型ナイフ形石器、チャート剥片製の小型薄手の切出形石器がセットをなしている（第Ⅲ-21 図1~12）。小型ナイフ形石器（同6~11）と切出形石器（1・2・5・12）は七日市遺跡第Ⅳ文化層に共通する特徴を持つ。

剥片製の柳葉形小型ナイフ形石器は、古本州島西南部においてAT直下で広く確認されているといわれる（佐藤 1992）。素材の供給技術には差異があるものの、その例は現在も増加し続けている。近畿地方では、特に七日市遺跡第Ⅳ文化層の発見により、それまで編年的位置づけが難しかった大阪平野部のいくつかの石器群をⅥ層並行期に比定できる可能性がある（森先 2005・2006）。

ひとつは、大阪府八尾南第6地点（山田編 1993）である。この遺跡では以上で述べてきたようなサヌカイト横打剥片製の柳葉形小型ナイフ形石器がまとまって検出されている（第Ⅲ-21 図13~32）。ナイフ形石器の素材供給にかかわる接合資料も多量に得られているので、その集中的な製作地であったことが知られる（森川 2003・2008）。また、この石器群には少数の中大型のナイフ形石器も伴っている。重要な点は、これらの中大型ナイフ形石器が、その大きさを除いて、形態・製作技術の面で小型ナイフ形石器と類似していることである。つまり本石器群の大~小のナイフ形石器は、それぞれに個別の剥片剥離技術があるのではなく、類似の技術から得られた剥片から目的とする大きさの剥片を選別することによって作り分けられていることに特徴があり、この点で後述する国府石器群とは異なる。石核長軸に打点を並行移動させて中小型の横長剥片を剥離するのが特徴で、棒状に消費された石核が

しばしばみとめられる(同 30～32)。同様の資料に、長原遺跡 89-37 次調査地出土石器群(趙・田中ほか 1997) (第Ⅲ-21 図 33～48)、中間西井坪遺跡 1 区・5 区(ブロック 2 を除く) 出土石器群(森下編 2001) がある(第Ⅲ-75 図 19～22 など)。

同じく一側縁加工で柳葉形の剥片製小型ナイフ形石器からなるが、サヌカイト縦長剥片素材のものを中心とする奈良市法華寺南遺跡(井上・金子ほか 2002) の AT 直下出土石器群(第Ⅲ-22 図 1～16) も、VI 層並行期に比定される(佐藤 1992)。ナイフ形石器の素材は、小型の板状剥片を石核素材として、その小口側から剥離された長狭形(かつ幅のわりに厚手)の縦長剥片である(同 15・16)。AT 下位で、このように剥片製小型ナイフ形石器がまとまる石器群は、先ほど述べたように古本州島西南部の VI 層並行期に比定される。だとすると、VI 層並行期の近畿地方では、縦長剥片剥離技術と横長剥片剥離技術とが共に同じようなナイフ形石器に素材供給を行う技術構造が成立していたこととなる。

ところで、最近大阪平野南部の長原・瓜破遺跡群で発見された瓜破北遺跡(絹川・小倉 2008) では、AT 下位から石器群が出土している(第Ⅲ-22 図 17～27)。石材はほぼサヌカイトのみからなる。ここでは、基部を尖らせた石刃製の尖頭形石器や細身のナイフ形石器が相対的に大型品をなし(同 17・19)、ここに少数の横長剥片製ナイフ形石器が伴う。横長剥片製ナイフ形石器には柳葉形のものはなく、背部加工が対向調整からなる幅広・小型品である。石刃製の石器には、石刃末端側を弧状に加工した弧状一側縁加工ナイフ形石器と思しき石器(同 18) も認められる。台形様石器はない。

瓜破北遺跡については、横長剥片製のナイフ形石器の型式的特徴からみて、これまで位置づけてきた VI 層並行期に比定することは難しい。石刃製石器も法華寺南遺跡のものとは異なっており、かつ相対的に大型である。出土層準と、VI 層並行期石器群との型式差から、現在のところより古い時期、つまり VII 層並行期と考えておくと、本報告が提示されてから詳細に検討したい。

近畿地方では、VII 層並行期には縦長剥片製ナイフ形石器および尖頭形石器・横長剥片製ナイフ形石器が共に大型の石器を構成し、横長剥片製の柳葉形小型ナイフ形石器・切出形石器・台形様石器は小型品をなす。縦長剥片と、横長剥片とがいずれも大型品と小型品に素材供給をおこなっていることが特徴である。なお、両者は特定石材との結びつきも弱い(安斎 2003c)。VI 層並行期には、大型品に石刃ないし縦長剥片製の石器が認められず、少数の横長剥片製ナイフ形石器のみからなる。小型品には柳葉形のナイフ形石器と少数の切出形石器、台形様石器が認められる。台形様石器は非常に少なくなっているが、この時期まで存続する。VI 層並行期に起こった技術構造上の大きな変化は、大型品の素材供給が、基本的に横長剥片剥離技術に収斂していることであろう。このことは、前半期の二極構造が VI 層並行期にはっきりと変化を遂げたことを示す。

##### (5) 中国山地・山陰地方

中国山地では、AT 層との上下関係が捉えられている遺跡が複数あり、重要な目安を提供する。岡山県蒜山原の戸谷遺跡群や、恩原遺跡群が編年上の基準を提供することは佐藤

(1992) が述べるとおりであり、この点は現在でもかわらない。資料の増加も乏しいので、佐藤編年に加えて指摘すべきことが少ないが、ここではこの地域の石器群の特色を捉え直しておくと共に、後半期との関係を重視した記述をおこなっておきたい。

この地域では、Ⅶ層でもより古相の石器群として基部加工が発達した幅広のⅠ類台形様石器をもつ野原遺跡群早風A地点Ⅱ期石器群(平井編 1979)があげられていた。野原遺跡群早風A地点の石器群は、ユニットごとに様相を異にしている。佐藤はユニットAを構成する石器の中でも、黒曜石製の台形様石器をⅨ層上部、石英製のやや基部加工が発達した台形様石器をⅦ層下部に位置づけている(佐藤 前掲)。基本的に矛盾ない指摘とおもわれるが、筆者には、分布を同じくする石器群を容易に分離しうるほど形式的差異は顕著ではない。本論では、ユニットAのうち、西部にまとまる一群をⅦ層下部並行期として捉えておく(第Ⅲ-23 図 25~37)。最近、正式報告がなされた西ガガラ遺跡第1地点ブロック1(藤野・中村編 2004)でも野原遺跡群早風A地点ユニットAに比較的よく類似する石器群が出土している(第Ⅲ-23 図 6~13)。

Ⅶ層上部並行期には、直近の隣接地域にある板井寺ヶ谷遺跡下位文化層のナイフ形石器とよく共通する、野原遺跡群早風A地点ユニットC・D石器群の弧状一側縁加工ナイフ形石器が該当する(第Ⅲ-23 図 14~24)。また、戸谷遺跡第5地点(鎌木・小林 1986)の石器群は正式報告がなされていないため詳細が不明だが、石刃製の二側縁加工ナイフ形石器や薄手の弧状一側縁加工ナイフ形石器、楔形石器等からなる(第Ⅲ-23 図 1~5)。Ⅶ層上部並行期に位置づけたい。

鳥根県原田遺跡(伊藤・石橋 2008)では最近重要な調査成果が得られた。AT層と三瓶浮布火山灰を介在しながら、その上下から3つの文化層が確認されたのである(第Ⅲ-24 図 基本層序)。最下文化層である第Ⅲ文化層はAT直下層準から検出されている。第Ⅲ文化層は環状ブロックとそこから離れた複数のブロックからなるが、前者の出土層準は後者のそれよりもやや下位にあり、実際は二時期に分けられると報告されている(第Ⅲ-24 図 ブロック分布図)。環状ブロック周辺の石器群は素材打面からの平坦調整や、折り取り整形、折れ面からの平坦調整に特徴をもつ台形様石器Ⅰ類に局部磨製石斧をともない、Ⅹ層上部からⅨ層下部に相当する古い石器群とみられる。一方、環状部の北東数十mの地点に位置するブロック1~5からは、玉髓や安山岩製の二側縁加工ナイフ形石器・弧状一側縁ナイフ形石器・切出形石器が出土している(同 1~20)。ナイフ形石器は厚手石刃を大きく切り取ったもので、長狭型を含み、層位的にみても南関東のⅦ層並行期石器群や、後述する九州地方の耳切遺跡A地点第Ⅱ石器群に類似している。小型薄手の台形様石器Ⅲ類(同 13~20)をまとまって伴うことを勘案すると、Ⅶ層下部並行期の可能性が高い。

Ⅵ層並行期の石器群には、広島県西ガガラ遺跡第1地点ブロック3~5(藤野・中村編 前掲)、同第2地点ブロック7、岡山県恩原遺跡R文化層石器群(稲田編 1988・1990)、同戸谷遺跡第4地点(鎌木・小林 前掲)、鳥取県門前第二遺跡(辻編 2005)があげられる。恩原遺跡ではAT直下の礫混じり粘質土層より出土したもので、中小型(4cm前後)二側縁加工ナイフ形石器・切出形石器よりなっている(第Ⅲ-25 図 1~9)。背部整形に対向調整

が多く認められることが特徴的である。静岡県の大野北遺跡 K3 期石器群（山下編 前掲）等に対比可能である。西ガガラ遺跡のナイフ形石器も同様の特徴を有するが、ここには横長剥片製で小型の一側縁加工ナイフ形石器（同 13・14・24・25）がともなう。戸谷遺跡第 4 地点では非常に薄手の剥片製小型ナイフ形石器（同 10・11）が見られ、AT 直下という出土層位が正しければ VI 層並行期であろう。鳥取県門前第二遺跡では、最近 AT 直下の黄灰色粘質土層から黒曜石製の石器群が出土した（第Ⅲ-24 図 21～31）。小型切出形石器を中心として剥片製小型ナイフ形石器も伴出し、静岡県子ノ神遺跡 NL 直上石器群（石川編 前掲）に対比できることから、VI 層並行期の石器群と考えられる。

佐藤編年以後の資料を追加して再検討しても、中国地方における前半期後葉の石器群の変化を追跡することはまだ難しい。ただし、弧状一側縁加工ナイフ形石器の発達（佐藤 1992）、および VI 層期における大型ナイフ形石器の少なさと剥片製小型ナイフ形石器・切出形石器の卓越という点には、東海地方以西と広く共通した様相を看取することができる。一方で、広島県南部丘陵地帯を除き、中国地方では VI 層期に横長剥片製一側縁加工ナイフ形石器が発達しないという特徴も指摘でき、近畿・瀬戸内地方とは違いがある。この意味で、広島県南部丘陵地帯は、石器群の内容からみれば瀬戸内地方に含めるべきともいえる。

#### (6) 九州地方

九州地方では主に 1980 年代を通じて東北九州の大分県大野川流域を中心に前半期後葉の資料が蓄積されており、編年研究の重要な資料をなしてきた。このほかの地域でも 1980 年代後半から 1990 年代にかけて前半期研究における重要な資料（熊本県狸谷遺跡、同曲野遺跡、同石飛東遺跡）が相次いで報告され、資料の着実な蓄積が進められてきた。さらに、最近では 1990 年代後葉より継続されてきた東九州自動車道関係の発掘調査により、宮崎県・鹿児島県（九州地方東南部・西南部）を中心に後期旧石器時代後半期相当の石器群を主体とした莫大な考古資料の蓄積・整理報告が進行している。この中には AT 降灰層準との層位関係が確かめられている資料が多く含まれるため、編年上の貴重な情報を提供している。

他地域にくらべて豊富な資料を有する同地域では、しかしながら編年研究の方法が古本州島東北部（後述）と同様の問題を抱えており、前半期後葉の編年研究も、1990 年代以後あまり大きな進展を見ていない。この地域での編年研究の問題点は安斎正人や佐藤宏之が批判するところである（佐藤 1992、安斎 2000）が、最大の問題は、やはり石器群の組成に基づく類型化とその段階配置にある（木崎 1988、吉留 2004、宮田 2005・2006a など多数）。これに加えて、九州地方の従来類型編年に対する批判として提示された佐藤編年以後、前半期後葉に相当する考古資料の蓄積自体もあまり進んでいない。近年、発掘調査、整理報告の相次ぐ九州地方東南部・西南部でも、この時期に遡る資料は多くない。

このため、新出の資料による佐藤編年の検証作業は本格的にはおこない得ない。とはいえ、VI 層並行期の石器群を中心としたいくつかの新出の石器群も知られてはいるので、これらを含めながら、佐藤編年の検証および、従来不明確であった問題について言及しておきたい。

Ⅶ層並行期の石器群は次のものがある。まずⅦ層下部並行期には、対向調整を主とする二

側縁加工ナイフ形石器と、西ガガラ遺跡（藤野・中村編 前掲）に対比される、基部に弱い挟りを入れる台形様石器Ⅰ類（第Ⅲ－26 図 42・43）からなる牟田ノ原遺跡第Ⅰ文化層（萩原 1989）や、平坦剥離が相対的に顕著であるとはいえ牟田ノ原遺跡に共通する台形様石器（同 30）をもつ上場遺跡Ⅵ層上部石器群（池水 1967、岩崎・宮田ほか 2007）の一部が相当するであろう。耳切遺跡 A 地点第Ⅱ石器群（村崎編 1999）は AT 下位暗色帯出土であり、大きさのわりに厚みのある、対向調整の発達した中型二側縁加工ナイフ形石器と、急斜度調整による矩形の台形様石器から構成されている（第Ⅲ－27 図 1～10）。台形様石器の特徴は少なくともⅦ層以降に下ることを示しているが、ナイフ形石器が中型品を中心とし、短寸厚形である（素材の長狭化・薄手化が果たされていない）点を評価してこの時期に含めたい。なお、縦長剥片製で対向調整による弧状一側縁加工ナイフ形石器や小型ながら整った連続基部加工を有する台形様石器で構成される後牟田遺跡（橘・佐藤ほか編 2002）第Ⅱ文化層（AT 下位暗色帯中～上部出土）はⅨ層上部～Ⅶ層下部並行期に位置づけるのが妥当とおもわれる。

Ⅶ層上部並行期として、対向調整による背部整形で素材を大きく切り取って製作される中・大型の二側縁加工ナイフ形石器に特徴をもつ百枝 C 遺跡第Ⅰ文化層（清水・栗田編 1985）、駒方古屋遺跡第Ⅱ文化層（橘編 1985）と（第Ⅲ－26 図 1～16、17～28）、百花台 D 遺跡Ⅶ層（田川・副島ほか 1988）の黒曜石製中大型ナイフ形石器が比定される（第Ⅲ－28 図 1～5）。このナイフ形石器は、近畿・瀬戸内地方を除く古本州島西南部Ⅶ層上部並行期石器群を広く特徴づけるものである。Ⅶ層下部並行期ですでに認められていた石刃剥離技術であるが、この時期には明らかに石刃剥離技術の発達がみてとれ、しかも中大型ナイフ形石器製作に結びついている点（佐藤 2000）で前時期とは異なる。この時期の石器群には、現在のところ良好な出土状況下での台形様石器の共伴が確認されていないが、先行する時期（例えば耳切 A Ⅱ）と後行する時期（例えば狸谷Ⅰ）に明らかな台形様石器の存在が確認されるため、存在したことは疑い得ない。すなわち、ナイフ形石器と台形様石器の二極構造を認めることができる。

帖地遺跡 AT 直下 XⅦ・XⅧ層石器群（永野 2000）は、対向調整に特徴を持つ二側縁加工の中型ナイフ形石器や弧状一側縁ナイフ形石器、柳葉形の剥片製小型ナイフ形石器、切出形石器、台形様石器からなり、小型の楔形石器や弧状刃部の搔器を含む（第Ⅲ－28 図 6～16）。二側縁加工ナイフ形石器のうち、黒曜石製（同 14）のものはかなり厚手になる。出土層位と石器群の内容から、Ⅵ層並行期に及ぶ可能性を認めつつも、以下のⅥ層並行期石器群との差異を評価してⅦ層上部並行期とみなしておく。

Ⅵ層並行期石器群では AT 直下暗色帯上部で検出され、縦長剥片製の中小型二側縁加工ナイフ形石器と剥片製切出形石器・台形様石器、および整った弧状刃部をもつ搔器を多数伴う狸谷遺跡Ⅰ文化層（木崎編 1987）が基準資料である（第Ⅲ－30 図 1～22）。この石器群と極めて類似する特徴をもつものとして、熊本県久保遺跡（木崎編 1993）・宮崎県高野原第Ⅴ遺跡第Ⅲ文化層（日高・竹井ほか 2004）・東睦原第Ⅱ遺跡第Ⅲ文化層（大山編 2006）、上ノ原遺跡第Ⅰ文化層（谷口・山田編 2002）等が挙げられる（第Ⅲ－29・30 図）。九州地方西北部では長崎県の堤西牟田遺跡Ⅰ文化層（萩原 1985）が AT 包含層準から出土したとされ

(第Ⅲ-32 図最下段)、石器群の内容も狸谷に近似することから、Ⅵ層並行期と考えられる。長崎県の根引池遺跡(福田編 2000)もⅥ層並行期とみられ、大型尖頭形石器(同 1)、中型二側縁加工ナイフ形石器(第Ⅲ-31 図 2~6)や大型の弧状一側縁ナイフ形石器(同 7・8・9)が出土している。

宮崎県春日地区第 2 遺跡(柳田・加藤編 2003)では、かつて橘(1990)が指摘した内容を傍証するように、AT 直上に当たる層から、AT 直下の石器群に近い内容をもつ石器群が検出されている(第Ⅲ-33 図 1~17)。形態的な規格化が進展し、やや大型化する点で異なるが、縦長剥片製ナイフ形石器と切出型石器からなる点でほぼ同内容である。非調整打面をもち端部が尖らない中大型の石刃も共伴するが、主に削器の素材として用いられるだけで、刺突具の素材とはならない。金剛寺原第 1 遺跡(宮下編 1990)等も同様に評価される石器群である(第Ⅲ-33 図 18~26)。Ⅵ層並行期でもより新しい石器群であることが、層的に示される数少ない例といえよう。

九州地方では、剥片製小型ナイフ形石器や切出形石器が台形様石器を構造的に置換していく状況を、少なくとも前半期後葉の関東地方のようにはっきりとは読み取れないが、概ね古本州島西南部と共通する変化をみせる。石刃・縦長剥片製ナイフ形石器と剥片製の台形様石器からなる二極構造は、ここでもⅥ層並行期に変容することは確かである。九州地方ではⅥ層並行期にも台形様石器が継続するが、九州地方西北部を除いて中心的器種ではない。その意味で、九州地方西北部に限っては二極構造の解体の過程が他地域ほどはっきりしていない可能性が高いが、現在の資料状況からこれ以上の言及は難しい。九州地方の他地域では、やはりⅥ層並行期に二極構造の変容が認められると評価してよいだろう。

## (7) まとめ

石器群の編年的検討を通じ、後期旧石器時代前半期後葉における古本州島西南部の石器製作技術構造の変化を整理してきた。

佐藤によって、Ⅸ層並行期までは列島規模で共通する技術構造(二極構造)が認められ、これは次第に変容を遂げながらもⅦ層並行期まで存続する構造的であるとされている。Ⅶ層並行期には二極構造、すなわち石刃・縦長剥片剥離技術と幅広・横長剥片剥離技術とが対をなし、前者がナイフ形石器等の大型刺突具と、後者が台形様石器(切出形石器に置換される)や剥片製小型ナイフ形石器と結びついて石器製作を成り立たせるという技術構造では概ね共通しつつも、地域ごとに異なりが生じている時期でもある。これがⅥ層並行期に変化をとげ、ナイフ形石器内部での二項性(二極的構造)に変換されるという。

新出資料の検討をおこなった結果としても、佐藤のこの枠組みを大きく逸脱する現象は認められなかった。Ⅶ層並行期には、二極構造の枠組みの内部で理解できるものの、九州地方、近畿・瀬戸内地方、東海以東の地域ではそれぞれ主体となる器種・型式に差異が生じていることも確かである。たとえば近畿・瀬戸内地方では縦長剥片と、横長剥片とがいずれも大型品と小型品に素材供給をおこなっていることが特異的であった。また九州地方では剥片製小型ナイフ形石器や切出形石器が台形様石器を置換していく傾向が関東地方や東海地方よりも

弱い可能性があった。

Ⅶ層並行期になっても、この地域差の範囲には大きな違いがない。変化は、基本的には二極構造の一体的な解体と、ナイフ形石器内部での大小二項性の成立に特徴をもつ。関東地方から東海地方では、縦長剥片製の大型ナイフ形石器と剥片製の小型ナイフ形石器・切出形石器が対をなす。関東地方では大型品を組成する遺跡が他地域より明らかに多い。近畿・瀬戸内地方でもナイフ形石器内部での大小二項性をとるが、横長剥片剥離技術によって大型ナイフ形石器を製作する点が特異的である。九州地方は、西北部を除いてナイフ形石器内部での大小二項性に特徴をもつ。

ここまで見てきたように、Ⅶ層並行期・Ⅵ層並行期には、各時期にさまざまなかたちで地域性が生じるものの、まだ固定的なものとは言い難い。そこで、次にこれが後半期にかけてどのように変化するのかを見ていきたい。

## 2. 後期旧石器時代後半期前葉

### (1) 関東地方

先ほどと同じく、関東地方からはじめ、他の地域へと編年網をつなげていく。さらに、最近九州地方でも独自の地域編年を立てやすい条件（層位的出土例）が整ってきたため、関東地方とは異なる独自の基準で編年をおこなうことが可能である。この二つの地域の編年をもとに、周辺地域の石器群を位置づけていくことによって、古本州島西南部の編年を進めるという手順を採る。この編年は森先（2007a）を基本とし、追加と修正を加えたものである。関東地方については、北関東地方には遺跡が極めて少ないので必要に応じて触れるにとどめ、南関東地方を中心に扱う。

関東地方における後期旧石器時代前葉（立川ロームⅤ層・Ⅳ層下部期）についての編年研究には多くの蓄積がある。織笠昭（1987a・1988・1992）をはじめとして伊藤健（1991a）、西井幸雄（1996）、亀田直美（1995・1996）、須藤隆司（1996）らがこの時期の細分編年を提出しており、層位的根拠を持つため、各細分案にそれほど大きな食い違いは認められない。

織笠昭（1987a・1988）はかつて武蔵野Ⅱa期（Ⅴ層・Ⅳ層下部期）を細分し、前半と後半に分離した。また国府型ナイフ形石器が検出されるのは前半であり、これに置換するように後半には角錐状石器が卓越するとみなす見解を示し、その後の細分案の定点を成している。さらにその後、より詳細な3期区分を提示しており、国府型ナイフ形石器出現前後の変化を追述している（織笠1992）。一定の層位的出土例に支持されるため、この三期区分は現在もおおむね有効であると考えられる。この骨子に地域間比較に必要な知見を付け加えて本論の編年軸を立てる。

織笠の編年に拠れば、該期の変遷は慶応大学湘南藤沢校地内遺跡Ⅴ文（B2L下部、武蔵野Ⅴ層下部相当）（慶応義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編1992）から柏ヶ谷長ヲサ遺跡Ⅸ文（B2L中部、Ⅴ層中・上部相当）（堤編1997）を経て柏ヶ谷長ヲサ遺跡Ⅶ文・Ⅷ文（B2L上部からB2U、Ⅳ層下部相当）と変遷する。これを基本としながらも、この時期の個別石器の型式学的分析に重点を置いて細分編年を提出している伊藤健の編年案（1991a）も参照しつつ、新

たな資料を加えて作成した筆者による石器群変遷を示す。各時期は、その層位的位置も勘察して古い時期からV層下部期、V層上部期、IV層下部期と概念的に呼称する。

V層下部期の石器群には、神奈川県慶応大学湘南藤沢校地内遺跡第V文化層（慶応義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編 前掲）・同柏ヶ谷長ヲサ遺跡第XI文化層（堤編 前掲）・東京都天文台構内III遺跡第5文化層（吉田ほか編 2004）、同羽根沢台遺跡第VI文化層（吉田・高麗ほか 1996）、同武蔵台東遺跡V層中部（坂東ほか編 1999）、同嘉留多遺跡第3文化層（對比地ほか編 1982）、千葉県北大作遺跡（西沢 1995）、一本桜南遺跡第4文化層（落合 2000）などが相当する（第III-34・35図）。

この時期の石刃は厚手で、背面中央に一稜か間隔の狭い二稜を有する石刃が主体となる。第III-34図5～7のように、VI層期よりやや幅広の尖頭形石器と、同1・2のような石刃製のナイフ形石器（一側縁加工を基本に反対側縁基部加工あり）が主要大型刺突具である。特徴的なのは、大型尖頭形石器では基部加工の範囲が器体中部付近にまで及ぶ例が多い点であり、素材石刃の幅広化に対応した技術適応とみられる。このため、器体中ほどに最大幅を有する菱形形状の尖頭形石器が生じる（同6・13・20・23・28）。

また、石刃を切り取ったものや（同4）、前時期より存在する剥片を素材とした中型の切出形石器、小型尖頭形剥片石器や剥片製小型ナイフ形石器が存在する（同16・21・22）。ただし切出形石器に基部を強く凹入加工するものはほとんどない。武蔵台東遺跡V層中部では台形様石器（同27・29）や横長剥片製の小型のナイフ形石器（同26）がみられる。当該期は、石刃技法と大型刺突具製作は密接に関係し、他方小型石器製作には剥片石器モードが主になる。この特徴はVI層期の石器群と構造的には概ね共通する。

石材は黒曜石のほか、遺跡の位置する台地部から見てかなり遠隔に産すると考えられている珪質頁岩・硬質頁岩が利用される傾向が強い。

ところでこの時期には、角錐状石器とみなすには問題を残すが、それに関連しそうな石器はみとめられる。神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡第XI文化層（B2L下底～L3上面）、東京都天文台構内III遺跡第5文化層（V層下部～VI層上部）のものがそれである（第III-34図17・24）。石刃ないし縦長剥片を素材としてほぼ全周縁を加工したこれらの厚形の石器は、ナイフ形石器よりも加工がやや大振りで、尖頭部を有するが基部加工・裏面基部加工はみられず、器体が左右対称とはならない。加えて単品で出土していることや、石材がナイフ形石器・尖頭形石器とは異なっていることから、製作の機会もまた異なっていた可能性が示唆され、ナイフ形石器の変異で捉えるべきものではないと考えられる（亀田 1996）。なお、国府型ナイフ形石器やその関連資料は認められない。

つづくV層上部期の石器群は、神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡第IX文化層（堤編 前掲）、同代官山遺跡第VI文化層（上田・砂田編 1986）、同南葛野遺跡第II文化層（関根ほか 1995）（第III-36図）、東京都葛原B遺跡第III文化層（廣田・前田ほか編 1987）、同栗山第2遺跡（同調査会 1994）、同天文台構内III遺跡第4文化層（吉田ほか編 前掲）、同花沢東遺跡第4文化層（実川・廣瀬ほか編 1984）、同国分寺市No.37遺跡第IV文化層（中村・森先ほか編 2003）（第III-37図）、同堂ヶ谷戸遺跡32次調査地第3文化層（久末・高杉ほか 前掲）、千葉県一本

桜南遺跡第5文化層（落合 前掲）、同北海道遺跡第V文化層（阪田・藤岡 前掲）、同彦八山遺跡（田村・小林 1987）、同源七山遺跡第3文化層（香取・榊原ほか 2007）（第Ⅲ－38 図）などで代表させられる。下総台地での出土状態は、第Ⅲ－38 図の彦八山遺跡例にみるように良好とはいえないが、武蔵野台地ではV層上部に明瞭なピークを持って出土することを発掘調査において確認している（中村・森先ほか編 前掲）。

ナイフ形石器は縦長剥片の打面部を基部においた一側縁加工（＋反対側縁基部加工）（第Ⅲ－36 図 8・12・16・17、第Ⅲ－37 図 12・19・26・28・30・34・36 など）が多くみとめられる（伊藤 1991a）。尖頭形石器も細身の縦長剥片を素材として存続する（第Ⅲ－36 図 23・36、第Ⅲ－37 図 10・11・31・38）。切出形石器は片側縁を凹入するよう加工した中小型品が多く（第Ⅲ－36 図 9・11・21・22、第Ⅲ－37 図 23、柏ヶ谷長ヲサ型：須藤 1996）、また加工がやや平坦な五角形を呈する小型尖頭形剥片石器（基部加工尖頭形剥片石器）がこの時期特徴的に認められる（第Ⅲ－36 図 6・7・24・25・27、第Ⅲ－37 図 3・4・16・27・29・39）。五角形の尖頭形剥片石器は従来あまり注目されていないが、本時期を特徴づける石器のひとつといえる。国府型ナイフ形石器や角錐状石器も小数確認されている。例えば、柏ヶ谷長ヲサ遺跡IX文では、硬質細粒凝灰岩製の国府型ナイフ形石器（第Ⅲ－36 図 1）と黒曜石製の中型木葉形の角錐状石器（同 4）が確認されている。角錐状石器には管見の限り大型尖頭形のものは少なく、国府型ナイフ形石器同様、主体的な大型刺突具とはなっていない。伊藤（前掲）が指摘した以上に、この時期には石器型式が極度に多様化し、遺跡間変異も大きい。まとめると、石刃モードが後退し、縦長剥片剥離技術による側縁加工ナイフ形石器・尖頭形石器と、幅広剥片を用いた中小型切出形石器・尖頭形剥片石器が技術構造の基本を構成し、ここに国府型ナイフ形石器・角錐状石器が少数伴う。

IV層下部並行期の石器群の代表的なものとして、神奈川県用田大河内遺跡VI文（栗原・新開ほか編 2004）、同上草柳遺跡第2地点II文（安藤・堤ほか編 1984）、同上土棚遺跡Ⅲ・IV文（矢島ほか編 1996）、同橋本遺跡IV文（第Ⅲ－39 図）、同慶応湘南藤沢キャンパス内遺跡IV文（慶応義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編 前掲）、東京都自由学園南遺跡IV下文化層（伊藤・松浦 1983）、同 1991 年調査地 2 文（自由学園南遺跡発掘調査団編 1991）、同丸山東遺跡IV層出土石器群（窪田・大田ほか編 1995）（第Ⅲ－40 図）、同下柳沢遺跡 1・2 文（早稲田大学文化財整理室編 2000）、同大門遺跡 2 文（隅田編 1990）、同出山遺跡（関塚編 1985）、同西之台遺跡 B 地点IV下（小田編 1980）、同下戸塚遺跡 1 文（早稲田大学校地埋蔵文化財調査室編 1996）（第Ⅲ－41 図）、千葉県天神峰奥之台遺跡第Ⅲ文化層（矢本・横山 1997）、同和良比本山Ⅱ－5 地点（齊藤編 1991）、白幡前遺跡 S30 ブロック（大野・田村 1991）、一本桜南遺跡第 6 文化層（第Ⅲ－42 図）等が挙げられる。

縦長剥片製の中大型刺突具が明らかに少なくなるかわりに、切出形石器に、より大振りの横長・幅広厚手剥片を素材として先端部の狭い範囲に刃部を残す大型品が出現し（第Ⅲ－39 図 14・15・17・18・28、第Ⅲ－40 図 1・2・16、第Ⅲ－42 図 3・16・17）、同時に角錐状石器には中小型品だけでなく大型品が増加している（第Ⅲ－39 図 1・26、第Ⅲ－40 図 32・43、第Ⅲ－41 図 1・15 など）。小型石器にも切出形石器は多数見られ（第Ⅲ－39 図

32～34等)、横打剥片製一側縁加工ナイフ形石器などが認められる。横長剥片製ナイフ形石器には国府型類似のものも含まれる。

大型切出形石器についてはV層上部の縦長剥片製ナイフ形石器に由来するとみる意見があるが(伊藤 1991a)、切出形石器は切出形石器に系統を求めるのが妥当であると考えられ、本論の編年観では前段階の中小型切出形石器に直接的な系統関係を辿りうる。V層上部段階には相対的に小型であった切出形石器(基部を凹入加工したものを含む)がこの時期に機能転化し、大型刺突具化したと考えられる。左右対称形の大型角錐状石器は少なく、中小型品が主である。大型品には先端部片側に肩を持つ形態があり、切出形石器との形態的親和性が高くなっている。角錐状石器に大型品が少ないことは、東海西部以西と大きく異なる特徴である。

なお、北関東地方では、上白井西井熊遺跡第2文化層石器群がV層上部～IV層下部並行期に相当する可能性が高い。概要報告(大西 2008)によると、本石器群は、浅間白糸軽石(およそ18000±14CyrBP)より下位で、浅間板鼻褐色軽石群(およそ19000～24000±14CyrBP)下部の前橋泥流堆積物より上位の、河岸段丘礫層被覆土中から得られている。黒色安山岩を用いて瀬戸内技法を多用した翼状剥片剥離を集中的に行い、大型の国府系ナイフ形石器を含む。黒色頁岩では打面転移を繰り返しながら縦長・幅広の剥片を剥離し、スクレイパーを製作する例が多いが、大型の盤状剥片が得られた場合には、これを石核素材として翼状剥片剥離をおこなう。小型の角錐状石器(黒曜石)がある。時期比定の根拠となる石器が乏しいが、出土層位と翼状剥片・横長剥片剥離を中心とする内容から、V層～IV層下部並行期であることは確かだろう。

このほか、角錐状石器の形態的特徴等からみておそらくV層上部～IV層下部並行期の資料が得られているものに、栃木県伊勢崎Ⅱ遺跡第Ⅰ文化層(吉田・森嶋 2000)、同寺野東遺跡第Ⅱ文化層(森嶋・谷中ほか 1998)、群馬県今井三騎堂遺跡第Ⅲ文化層(岩崎 2004)、同今井見切塚遺跡第Ⅲ文化層<sup>(2)</sup>(岩崎・津島 2007)がある(第Ⅲ-43.図)。図示したとおり南関東地方と同内容であるが、いずれも内容は零細である。

以上をまとめておく。関東地方ではVI層期に台形様石器が認められなくなり(前半期二極構造の解体)、佐藤宏之のいうように、剥片製小型ナイフ形石器や切出形石器が台形様石器の機能的位置を代替していく。また、同一個体の消費過程に石刃モードから剥片モードへと移行する現象が確認され、剥片製小型ナイフ形石器や切出形石器は剥片モードと結びつきながらも、石刃モードにより生産された素材も利用して作られる。V層下部の石器群は、技術構造の面ではVI層期のもものと大きく異ならない。V層上部には体系的な石刃生産が全く見られなくなるといふ急速な変化を示し、剥片モード内部で縦長剥片生産技術/横長・幅広剥片生産技術が緩やかに二項性をなして、それぞれがナイフ形石器・尖頭形石器/尖頭形剥片石器・切出形石器と組み合っている。このうち、大型刺突具はほぼ縦長剥片生産技術と結びついている。一方、IV層下部には縦長剥片剥離技術は小型尖頭形石器に素材供給をおこなう程度にとどまって、大型刺突具(切出形石器・角錐状石器)から小型石器(切出形石器・角錐状石器)の大半が横長剥片剥離技術と結びつくようになる。

## (2) 九州地方西南部・東南部

西南日本における後期旧石器時代後半期の編年に関しては、関東地方だけではなく、近年では鹿児島県大隈半島北部でも層位的条件の良好な遺跡が複数調査されている。膨大な資料が蓄積され続けている宮崎県では、その成果に基づいていわゆる「10段階編年」(宮崎県旧石器文化談話会 2005) が提示されているが、本節の対象とする後半期前葉については2時期にしか区分されておらず、本論との対応を図ることはできない。この問題を解決するには、層位的根拠がより強固な鹿児島県下の諸遺跡を参照する必要がある。まず鹿児島県の資料を基に編年の基軸を立て、そこに宮崎県の資料を対比して九州南部の地域編年を構築したのちに、関東地方との比較を図りたい。なお、九州地方北部の既往の編年観(例えば木崎 1988、萩原 1995・1996、吉留 2004 等) は、同南部の成果をうけてこれから部分的な修正を必要としよう。また、杉原敏之(2004・2005) の編年観も最近の南九州の成果との対応が考慮されていない。南九州の成果を覆すべき根拠が北部九州にない以上、論拠が不十分といわざるを得ない。

各地に AT テフラを降灰させた鹿児島県始良火山の噴火は、とりわけ大隈半島北西部にシラスと呼ばれる極めて厚い火砕流堆積物を供給したため、この地域では AT より下位の石器群については調査の手が及んでいない。しかし AT 上位では始良カルデラ南縁に位置する後カルデラ火山である桜島火山を給源とするローカルテフラ(桜島テフラ群 P1 ~ 17) の堆積が認められ、編年の重要な手掛かりを提供している。本論にかかわるテフラとして、AT 上位にありおよそ 23000±14CyrBP の P17 テフラ、およそ 21000±14CyrBP の P15 テフラが確認されている(奥野 2002)。最近こうした情報をもとに、九州地方の編年研究において重要な編年研究を宮田栄二が提示しているので、まずこの検討をおこなう。

宮田栄二(宮田 2005、2006a・b) による大隈半島北部を基準とした最新の編年(第 III - 44 図) を参照すると、AT 上位の石器群は、AT 直上の IV 期に続き V a 期:「狸谷型ナイフ形石器」を主体とする石器群から V b 期:剥片尖頭器主体の石器群へ、続いて V c 期 1 群:「今峠型ナイフ形石器」を主体とする石器群および V c 期 2 群:「台形石器」を主体とする石器群へ、そして VI 期:角錐状石器を主体とする石器群へと変遷するとされる。例えば桐木耳取遺跡(長野ほか編 2005) 第 I 文化層エリア 1 ~ 7 の剥片尖頭器主体の石器群は、桜島 P17 テフラ下位から検出されており、少なくとも大隈半島北部では、基部側の狭い範囲を整形した大型厚手の長狭形剥片尖頭器を主とする石器群は、編年的に AT から P17 までの間に収まり、存続期間が短かったと考えられている。「今峠型ナイフ形石器」を主体とする石器群と「台形石器」を主体とする石器群は、わずかな層位差から剥片尖頭器石器群よりも後出的とされる。そして、城ヶ尾遺跡(有馬・馬籠ほか編 2003) では、桜島 P-17 より上位に堆積する桜島 P15 テフラと同層準か上位から、角錐状石器を主体とする石器群が検出されているという。

なお本論では、「今峠型ナイフ形石器」は今峠型尖頭形剥片石器、「狸谷型ナイフ形石器」は狸谷型切出形石器とそれぞれ呼称する(第 II 章参照)。

先述のとおり、大隈半島北部地域で相次いで報告されてきた層位的出土事例に基づく宮田編年は、九州地方北部を中心とする、型式変化のみに基づかざるを得なかった編年研究に対する強力なアンチテーゼであった。この意味で宮田編年の研究上の意義は大きいが、宮田編年には次の問題点がある。すなわち、①特定器種・型式（例えば剥片尖頭器・角錐状石器・台形様石器等）がまとまって出土する石器群を取り上げて、それらのみからなる「純粹」な段階を設定する傾向にあること。②したがって、段階の特徴となる器種・型式以外の石器が石器群中に認められた場合、それを混在として特別な根拠を提示しないまま除外する傾向にあること。③こうした資料操作のために生じる段階間の石器群の顕著な内容差の背景を説明できていないこと、である。これらは石器文化階梯論の根本的欠点である。編年の根拠の一部に明確な層位的裏づけをもつので、例えば剥片尖頭器から角錐状石器中心の石器群へ、といった大枠の編年観は認めてよいと思われるが、石器群の通時的変化の背景を詳細に明らかにするには不十分である。実際は、両石器群間の時間的推移はより複雑であったと考えられる（阿部 2005・2007、森先 2007a）。

宮田編年の大きな問題は、台形・台形様石器と狸谷型切出形石器の位置づけである。V b 期を代表する桐木耳取遺跡（長野ほか編 前掲）第 I 文化層エリア 2～5、エリア 10・11<sup>(3)</sup>では台形・台形様石器と剥片尖頭器がともに存在しており（第Ⅲ-45 図 1～16）、桐木遺跡（中原編 2004）でもブロックは異なるが両者が認められる（同 17～24）。一方、V c1 期とされる今峠型は台形・台形様石器とは共伴するが、長狭形剥片尖頭器と共伴する事例が少なく、また層位的にも若干上位から出土するとされる。今峠型は、むしろいわゆる中原型とも呼ばれる縦長剥片製二側縁加工ナイフ形石器か、あるいは上記 2 石器群には確認されない、長狭形剥片尖頭器が崩れたような、いわば「スレード形」を呈する基部の太い短寸形剥片尖頭器（第Ⅲ-49 図 1）に伴出する。したがって、台形・台形様石器は長狭形剥片尖頭器とも今峠型とも共伴するが、後二者は互いに共伴しない傾向があるため、台形・台形様石器は両時期を通して存続している可能性が高い。なお、鹿児島県の堂園平遺跡（寒川編 2006）では長狭型剥片尖頭器と台形・台形様石器に「今峠型」が共存しているとされている（第Ⅲ-47 図 3）。この「今峠型」は尖頭部が不明瞭であり、どちらかといえば矩形台形様石器により近い。筆者は安斎（2000）の視点を参照して、この種の台形様石器が次の時期の今峠型尖頭形剥片石器に系統上連続する具体的な資料であると考えている。なお、堂園平遺跡に対比される宮崎県前ノ田村上第 2 遺跡 1 期石器群（嶋田史子 2007）（第Ⅲ-46 図 1～16）でもやや類似した石器（同 12・13）が伴っているが、これも極めて小型で、かつ短寸である。

次に V a 期とされる狸谷型切出形石器を主体とする石器群について検討する。宮田編年では、狸谷型切出形石器を AT 直上にあつて、AT 直下石器群に類似する石器群（IV 期）の直後に位置づけ、剥片尖頭器石器群直前と考える。その根拠は大隈半島北部の層位事例と、一遺跡で狸谷型切出形石器が他の石器を含まずに検出される事例が増えてきたことと置く（宮田 2006a）。宮田の指摘どおり、狸谷型切出形石器を石器組成中に高比率に含む石器群では、他の石器の構成比は多くない。しかし狸谷型以外の共伴石器を一概に混在と片付ける根拠もまた、現時点では乏しい。

狸谷型の共伴石器には次のようなものがある。宮崎県長藪原遺跡ブロックI（時任・山田ほか編 2002）では、ブロック中央部に横打剥片製一側縁加工ナイフ形石器が共伴し（第Ⅲ-51 図 21）、またブロックIVを除けば本遺跡の器種構成は狸谷型・国府系ナイフ形石器と、「スぺード形」の短寸形剥片尖頭器からなる。同県上ノ原遺跡 BL18～21（谷口・山田ほか編 2002）も狸谷型・台形石器・国府系ナイフ形石器からなる。さらに重要なことに宮崎県中ノ迫第1遺跡第1次調査地Ⅱ期石器群（安藤・島木 2007）では AT 上位において検出された小規模な2基のブロックから、国府系ナイフ形石器、狸谷型を含む切出形石器、角錐状石器、短寸形の剥片尖頭器、台形様石器、今峠型類似の尖頭形剥片石器がまとまって出土している（第Ⅲ-50 図 1～20）。北牛牧第5遺跡 D 区Ⅱ文（草薙・山田ほか編 2003）では今峠型（同 26・27）、台形様石器（同 32・33）を主体に、短寸形剥片尖頭器（同 30）や国府系ナイフ形石器（同 28）が伴出する。野首第1遺跡Ⅱ期石器群（田中・山田ほか編 2004）では、同一ブロックから狸谷型と呼んでよいであろう切出形石器（第Ⅲ-51 図 16）と「北牛牧型」とも呼ばれる基部加工尖頭形剥片石器（もしくは台形様石器、同 17・18・19）とが伴出し、近接して国府系ナイフ形石器や角錐状石器（同 14・15）が検出されている。熊本県狸谷遺跡Ⅱ石器群（木崎編 1987）では、北牛牧第5遺跡 D 区Ⅱ文例に対比できるスぺード形の短寸形剥片尖頭器・厚手の国府系ナイフ形石器が共伴する（第Ⅲ-66 図）。

このように、狸谷型は、短寸で幅広のスぺード型を呈する剥片尖頭器と共伴する事例がしばしば確認されていること、今峠型との共伴例があることを評価すれば、厚手で長狭型の剥片尖頭器と台形・台形様石器からなる石器群の次の時期に位置づけられる可能性が高いと考えられる。前時期の、切出形石器に由来する石器であろう。そして、P15 と同層位かやや上位から出土する、大型角錐状石器を多く含む石器群が、それらに後続するとみるのが妥当である。

宮田編年の成果を参照しつつも、本論では以上の点に修正を加えておきたい。その結果、九州西南部・東南部では次のような地域編年が構築できる。①から③の順で新しくなる。

- ① 基部周辺に加工が集中する石刃製長狭形剥片尖頭器や尖頭形石器に台形様石器や平坦剝離を併用した切出形石器（第Ⅲ-45 図 12 など）が組み合わせられ、稀に中小型の角錐状石器（第Ⅲ-47 図 2）や両面調整石器（同 4）、小型の国府系ナイフ形石器（第Ⅲ-45 図 14）を伴う石器群（第Ⅲ-45～47 図）。

〈鹿児島県：桐木耳取遺跡第Ⅰ文化層エリア 2～5、同エリア 6・7、同エリア 10・

11、同エリア 15、桐木遺跡第Ⅰ文文化層、堂園平遺跡、宮ヶ迫遺跡（八木澤・桑波田ほか編 2000）、国道仁田尾遺跡Ⅲ地区Ⅷ層石器群（長野・堂込ほか編 2006）。宮崎県：前ノ田村上第2遺跡Ⅰ期石器群、上ノ原遺跡 BL6・7（谷口・山田ほか編 前掲）

なお、非常に小型の国府系ナイフ形石器と角錐状石器が含まれる桐木耳取遺跡第Ⅰ文化層エリア 6・7 は、剥片尖頭器の形態が大型とはいえ、加工が粗い鋸歯状のものが多く、側縁加工品が多いことから、次の石器群②との共通点も多く、①と②の中間的様相を示す。以上の石器群の中でも新相である可能性が高い。

- ② 石刃モードの痕跡が乏しくなり、縦長剥片を素材とした大型の二側縁加工ナイフ形石器

(中原型ナイフ形石器含む)、短寸形剥片尖頭器、横長剥片による中小型の国府系ナイフ形石器、今峠型尖頭形剥片石器、台形様石器、狸谷型切出形石器等の多様な石器に、稀に特大品(第Ⅲ-49 図 10・15・19)を含む角錐状石器が伴う石器群(第Ⅲ-48~51 図)。角錐状石器は対称性が低い。鹿児島県でのみ、両面加工石器が特徴的に含まれる(第Ⅲ-48 図 5・16・31、第Ⅲ-49 図 9)。

〈鹿児島県：桐木耳取遺跡Ⅰ文 12・15 エリア、箕作遺跡(宮下編 2004)、西丸尾遺跡Ⅷ層(宮田編 1992)、国道仁田尾遺跡Ⅳ地区Ⅷ層石器群、前山遺跡第Ⅱ文化層(寒川・宮田ほか 2007)、帖地遺跡ⅩⅣ層(永野 2000) / 宮崎県：中ノ迫第 1 遺跡一次調査地Ⅱ期石器群、前ノ田村上第 2 遺跡 2 期石器群、野首第 1 遺跡、北牛牧第 5 遺跡、長藪原遺跡、垂水第 1 遺跡(久富・中山編 1994)、金剛寺原第 2 遺跡(宮下編 1990)〉

③横長剥片剥離技術を中心とする剥片モードが主体となり、大型石器が角錐状石器と大型切出形石器(第Ⅲ-52 図 7、第Ⅲ-53 図 9・11・12・28・29)、前時期より不整形なものを中心とする縦長剥片製の側縁加工ナイフ形石器(第Ⅲ-53 図 19・20)、中小型石器が国府系ナイフ形石器(第Ⅲ-53 図 21 など)からなる石器群(第Ⅲ-52・53 図)。

〈鹿児島県：城ヶ尾遺跡Ⅱ文、前原和田遺跡(大保編 2002)、九養岡遺跡(福永ほか編 2004)、帖地遺跡ⅩⅢ層 / 宮崎県：東畦原第 1 遺跡四次・Ⅳ期(大山編 2006)、東畦原第 2 遺跡第Ⅳ・Ⅴ文化層(倉藪・興梠ほか 2005)、勘大寺遺跡一次(長友・今丸ほか編 2005)、唐木戸第 3 遺跡等(鶴戸・金丸ほか編 2005)、中ノ迫第 2 遺跡(佐竹 2008)〉

宮田のいうように、③に後続して城ヶ尾遺跡Ⅲ文化層にみるような中小型木葉形の尖頭形石器からなる石器群があらわれるようである(第Ⅲ-54 図)。この石器群は③に含まれる城ヶ尾遺跡Ⅱ文化層より確実に上位である<sup>(4)</sup>。角錐状石器はほぼみられないが、鋸歯縁加工を有する石器(第Ⅲ-54 図 25・30)があり、前時期との連続性を伺わせる。尖頭形石器は前時期にも認められた同種石器との連続性を追うことができる。他にも、鹿児島県小原野遺跡(中村・森田 1999)の一部や、宮崎県前ノ田村上第 2 遺跡 3 期石器群(同 39~53)が同種石器群である。

一方、前半期の編年において述べたとおり、宮崎県では AT 直下から剥片製小型ナイフ形石器がまとまって出土する事例が増加している。AT 直上にも類似した石器群があり、同型の技術構造が継続していたと考えられることは、すでに指摘がある(橘 1990)。この石器群は出土層位から見ても概ね武蔵野台地編年のⅥ層相当期に位置づけられるだろうから、後続して出現する剥片尖頭器を組成に加えた石器群は概ねⅤ層相当期石器群に並行させてよいと思われる。さらに、③の石器群は、鹿児島県においておよそ 21000±14CyrBP の桜島 P15 テフラと同層準ないし上位より出土している。

したがって、九州西南部、東南部の情報から構築した上記の編年は、概ね関東地方のⅤ層~Ⅳ層下部に並行するものとみてよいだろう。さらに、石器群①~③の変遷は、主要器種を異にしつつも次の点において関東地方と類似する。

例えば②にあたる野首第1遺跡や北牛牧第5遺跡にみる今峠型・狸谷型は、これとやや特徴を異にしつつも技術形態的に類似する石器が、遠く離れた関東地方V層上部並行期の国分寺市Na 37遺跡や柏ヶ谷長ヲサ遺跡等にも時期限定的に認められる(第Ⅲ-37図1~4など)。国府系石器群が多く出現するのもこの時期である。また、③に含まれる城ヶ尾遺跡や東睦原第1遺跡(四次調査)にみる大型角錐状尖頭器と大型切出形石器などは、直接的な型式対比は困難であるものの、関東地方IV層下部段階の諸遺跡によく類似した石器が認められる。

以上のことから、南九州において構築した上記編年は、関東地方のV層下部並行期からIV層上部並行期にかけての変化とおおむね連動している蓋然性が高い。よって①~③についても、それぞれV層下部/V層上部/IV層下部並行期という時期概念で捉えたい。

ここでは、地理的に極めて遠距離にある二つの地域間で、形式的差異をもちつつもほぼ時間的に連動する石器モードの変化(例えばV層上部並行期の石刃モードの衰退と剥片モードの進展)や国府系石器群・角錐状石器の出現(同じくV層上部並行期)が認められたことが特記されよう。ただし、角錐状石器の発達度合いやナイフ形石器の形式的特徴、量的比重は関東地方と九州地方では大きく異なっており、V層並行期(特にその後半期)にそうした地域差が顕在化していた。

さらに、この編年からは、九州地方西南部鹿児島県と東南部宮崎県とのあいだにも、次のような相違点が見出される。宮崎県では「北牛牧型」と呼ばれる基部加工尖頭形剥片石器や、国府型が多く特徴的に認められ、長狭対称形の大型角錐状尖頭器が発達する。鹿児島県では両面調整尖頭器が存在し、角錐状石器には精美で細身の大型品はほとんどみられない。これらのことから両地域は主としてV層上部並行期以降に異なる地域性を呈しはじめるといえる。

### (3) 東海地方

上でみた関東地方と九州東南部との連動性は、他の地域についても認められるだろうか。九州地方南部では火山灰層序に基づいて関東地方との大まかな並行関係を推定できたが、こうした情報がない場合、型式対比のみに基づく広域編年は困難と考えられる。そこで、以下では、関東地方、九州地方を編年の基軸にして、それぞれの隣接地域である東海地方・中部高地と、九州東北部・西北部との石器群の型式比較を中心に、編年的対比を試みたい。

すでに笹原芳郎・高尾好之らの詳しい編年(笹原2005、高尾2006等)がある東海地方東部の愛鷹・箱根山麓地域では、本論で重要視するV層並行期の細分を加えれば、次のような変化を辿る。NL直上の小型ナイフ形石器・基部加工尖頭形石刃石器・弧状一側縁ナイフ形石器等からなるVI層並行期相当の石器群より上位のBB I層に、先細り石刃と尖頭形石器で構成されるV層下部並行期の中村分遺跡BB I層(寺田編1998)や桜畑上遺跡BB I層下部(望月・森嶋ほか2003)、尾上イラウネ遺跡II遺跡BB I層下部がある(第Ⅲ-55図)。桜畑上遺跡では左右非対称の非尖頭角錐状石器(同6)が含まれる。BB I層の上部からは厚手縦長剥片を素材とした側縁加工(一側縁主体)ナイフ形石器や短寸の尖頭形石器(第Ⅲ-56

図4・13・15・16・25)、五角形の尖頭形剥片石器(同5・21)にわずかに小型角錐状石器(同6)が伴うV層上部並行期の上ノ池遺跡Ⅲ文(前島編1998)、イラウネ遺跡BB I層上部(平川・廣瀬ほか編1986)、中見代第Ⅱ遺跡BB I層(高尾編1988)、中見代第Ⅲ遺跡BB I層(高尾編前掲)等が存在し、この上層のBBO層から大型品を少数含む切出形石器(第Ⅲ-57図2・17・18・32)や、尖頭形・対称形を含む角錐状石器(同11~15、26・27)を中心とするIV層下部並行段階の中身代第Ⅱ遺跡、中身代第Ⅲ遺跡、子ノ神遺跡BBO層(石川編1982)、上ノ池遺跡第Ⅱ文化層が出土するという変化を辿り、関東地方とは技術構造の変遷のみならず型式変遷も比較的一致する。なお、子ノ神遺跡BBO層石器群では、中型の角錐状石器を1点含む以外は小型の角錐状石器とナイフ形石器からなり、やや新しい様相を示す可能性が高い。

東海地方中・西部にはやはり資料が少なく(進藤1995)、これまでも本論で求める精度よりも大まかな編年案(齋藤2003等)しかない。関東地方と東海地方東部を参考にすると、いまのところ次のように編年できる。中小型の縦長剥片製一側縁加工ナイフ形石器(同1~4)を特徴とし、国府型・国府系ナイフ形石器(第Ⅲ-58図5・6・15・17)をもつ岐阜県日野1遺跡(吉田編1987)が柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅸ文化層の内容に近くV層上部並行期であろう。報告書によると、縄文時代草創期の石器群との混在があり、旧石器時代石器群の抽出が困難であったというが、旧石器時代石器群各ブロック出土の石器は大部分において同時期と捉えて矛盾のない内容である。日野2遺跡(高木編1987)でも近い内容の石器群が石器集中部をなして出土している(第Ⅲ-59図上段)。匂坂上2遺跡(山崎1997)にも、国府系ナイフ形石器や角錐状石器があり、V層上部ないしIV層下部並行期の資料が含まれている(同1~5)。

IV層下部並行期には大型対称形の角錐状石器(同6~9)を多く有し、横長剥片製ナイフ形石器(同10・12)を伴う岐阜県椿洞遺跡KⅡ期石器群(堀編1989)の一部が相当する。同じく岐阜県の寺田遺跡(吉田編1987)は多時期の石器群が複雑に混在しており、報告書の記載からではこれらを分離することは到底出来ないが、角錐状石器や国府系ナイフ形石器が出土しているので、この時期ないし前時期の石器群を含んでいる<sup>(5)</sup>(第Ⅲ-60図1~5)。また、岐阜県下呂石原産地の初矢遺跡(鈴木・片田1979)や大林遺跡(井上2001)、富山県境付近の宮ノ前遺跡(早川・河野ほか編1999)では国府型・国府系ナイフ形石器が出土している(第Ⅲ-60図)。ただし、前二者は表採資料であり、またこのナイフ形石器のみでは時期比定が困難である。V層上部~IV層下部並行期であることはいえるだろう。静岡県岩田原台地の京見塚遺跡(磐田市史編纂委員会編1993)は、正式報告がないのではっきりしない(同6~10)。IV層下部段階に特徴的な基部の長い大型切出形石器(同6)が存在している。ただし、基部が丸く鋸歯状加工による小型幅広の角錐状石器(同8)や切出形ナイフ形石器(同10)が主体となる点から見て、IV層下部段階でもより新しい時期、国武貞克(2003)のIV下最新段階石器群との共通点も多く、多時期を含む可能性がある。とはいえ、石器の型式学的共通性からいって、これらの地域でも少なくとも本時期までは関東地方との型式対比によって編年できる可能性が高い。さらに続く時期にも薄手中型の二側縁加工ナイフ

フ形石器が発達し（たとえば山田原Ⅱ遺跡（松井・高野ほか 1994）等）、関東地方Ⅳ層中部の砂川石器群に対比可能である（同 18～24）。

以上を次のようにまとめておきたい。東海地方の様相は関東地方と類似する。東海地方東部では、Ⅵ層並行期に、ナイフ形石器系列内部での作り分け（中型ナイフ形石器／剥片製小型ナイフ形石器・切出形石器）が顕著な技術構造へと変化する。ただし関東地方と異なって、Ⅵ層期に大型の刺突具が少ない。これは東海以西に共通する特徴と思われる。Ⅴ層下部並行の石器群は大型の尖頭形石器からなり、剥片製小型ナイフ形石器と対をなす。Ⅴ層上部並行期には石刃モードが明らかに後退して、剥片モードが優勢となる。縦長剥片生産技術／横長剥片生産技術が緩やかに二項性をなし、それぞれがナイフ形石器・尖頭形石器／ナイフ形石器・切出形石器と組み合っているが、大型刺突具はほぼ縦長剥片生産技術と結びついている。Ⅳ層下部並行期になると、少数の大型刺突具として角錐状石器があらわれており、小型石器（切出形石器・角錐状石器）の大半が横長剥片剥離技術と結びつく。関東地方を特徴づける大型切出形石器は東海地方東部には非常に少なく、その発達の弱さは地域差を示す可能性がある（伊藤 1996b）。

#### (4) 中部高地

中部高地ではこの時期の石器群がほとんど知られていないが、城ノ平遺跡（茅野市史編纂委員会 1986）や柳又遺跡 C 地点（青木・内川ほか編 1993）が相当する（第Ⅲ－61 図）。城ノ平遺跡は、基部加工尖頭形剥片石器（同 12）や、やや平坦な剥離で調整した切出形石器（同 14）の特徴が国分寺市 № 37 遺跡（中村・森先ほか編 2004）に対比でき、縦長剥片製二側縁加工ナイフ形石器もこの時期に特徴的な石器である（たとえば北海道遺跡第Ⅴ文化層：第Ⅲ－38 図 7）。詳しい報告がなされていないため単位性が不明であるが、Ⅴ層上部並行期の石器を含むとおもわれる。野辺山 B5 遺跡（佐藤 1970）や柳又遺跡 C 地点では横長剥片製ナイフ形石器（同 3・9・10）や角錐状石器（同 2・4～7）、大型の切出形石器（同 1・8）が出土している。細別編年に組み入れることは難しいが、Ⅴ層上部からⅣ層下部並行期と考えられる。

中部高地においては、男女倉型尖頭器を有する石器群や二側縁加工ナイフ形石器に特徴を持つ石器群等、おおむね関東地方Ⅳ層中部並行期に相当する時期になってようやく遺跡が増加する（男女倉遺跡 B 地点・J 地点（森嶋・川上編 1975）、御小屋ノ久保遺跡（茅野市史編纂委員会 1986）、追分遺跡第 3 文化層（大竹・勝見ほか 2001）、手長丘遺跡（諏訪市史編纂委員会編 1986）等：一例を第Ⅲ－62 図 16～24 に示した）。この遺跡の増減現象は、最終氷期における寒冷化によって中部高地の通年開発、冬季立ち入りが困難になったことを示すと解釈されている（佐藤 1991）。

#### (5) 九州地方東北部・西北部

九州東北部にあたる大分県の石器群では、長狭型の剥片尖頭器は確実に分布するため九州東南部Ⅴ層下部並行期の石器群の存在は確かであるが、良好な出土状態の石器群が認められ

ない。西北部の福岡県有田遺跡6次調査地(山崎・井澤ほか1994)では、長狭型剥片尖頭器と小型細身の二側縁加工ナイフ形石器や細身の一侧縁加工ナイフ形石器が共伴している(第Ⅲ-63図1~7)。佐賀県平沢良遺跡(杉原・戸沢1962)では、有田遺跡より若干幅広い弧状一侧縁加工ナイフ形石器などが検出されている(同38~44)。長崎県西輪久道遺跡A区下層石器群(副島編1981、副島・伴編1985)、同川原田遺跡(松尾1983)、では長狭型の剥片尖頭器に原ノ辻型台形様石器と切出形石器が共伴する(第Ⅲ-63・64図<sup>6)</sup>)。これらの石器群は剥片尖頭器の型式対比から、V層下部並行期と捉えておきたい。日ノ出松遺跡(田島編1993)や百花台東遺跡第I文化層(松藤編1994)、西輪久道遺跡下層の剥片尖頭器は、形態がやや崩れて、若干幅広・短寸のもの、加工が側縁部に及ぶ剥片尖頭器(ないし縦長剥片製ナイフ形石器)を含む(第Ⅲ-63図9・10・29・30、第Ⅲ-64図29)。こうした石器群において平刃の原ノ辻型(第Ⅲ-63図17~19、32・33)が伴う傾向があり、若干の時期差を示している可能性が想定される。熊本県大丸・藤ノ迫遺跡(木崎編1986)も同様の特徴を持つ(同34~37)。とはいえ、V層上部並行期を特徴づける他の器種をほぼ含まず、原ノ辻型・切出形石器と剥片尖頭器のみからなるので、ここではV層下部並行期の新しい時期として捉える。西北部では、二側縁加工ナイフ形石器・原ノ辻型台形様石器の存在が九州地方南部と異なる特徴である。

V層上部並行期石器群を抽出する(第Ⅲ-65図)。隈・西小田遺跡第13地点(森山・吉留・杉原2001)では横長剥片製で比較的大型の角錐状石器(同1)、側縁に加工の及ぶ剥片尖頭器(同3)や横打剥片製ナイフ形石器(同2)が得られており、一括性を有するならV層上部並行期とおもわれる。大分県一方平I遺跡東区(ブロック8~13含む)石器群(綿貫編1999)は幅広化し裏面基部加工が施されるなどV層下部並行期とは異なる剥片尖頭器(同5・9)・狸谷型切出形石器(同14)・基部加工尖頭形剥片石器(同10・13)・角錐状石器(同8)などからなり、V層上部並行期の石器群に型式対比しうる。一方平I遺跡出土石器群は、全体的にみても、ほとんどがV層上部並行期の枠内で理解可能である。今峠型に特徴づけられる大分県大坪遺跡(綿貫・坂本ほか編1989)も同時期に相当するとおもわれる(同15~19)。長崎県西輪久道遺跡C区上層石器群では短寸形の剥片尖頭器に黒曜石製の角錐状石器・横長剥片製ナイフ形石器や、中小型の平坦調整を多用した台形様石器・切出形石器および今峠型尖頭形剥片石器が伴い、V層上部並行期の石器が中心であると思われる(第Ⅲ-64図12~19)。佐賀県船塚遺跡(八尋1984)では、国府型ナイフ形石器の製作がおこなわれており、ここに短寸形の剥片尖頭器や大型厚手の縦長剥片製二側縁加工ナイフ形石器(いわゆる中原型)が共存することから本時期で捉えたい(第Ⅲ-66図1~18)。黒曜石製の小型二側縁加工ナイフ形石器・切出型石器が共伴しており、西北九州の特異性を浮き彫りにしている。佐賀県馬川谷口遺跡(武谷編2001)は、出土石器群の特徴が船塚遺跡によく類似するため(第Ⅲ-65図20~28)、大部分は本時期に帰属するとおもわれる。熊本県狸谷II石器群(木崎編1987)については前述のとおりこの時期である(第Ⅲ-66図19~33)。

IV層下部並行期には、横長剥片製の大型切出形石器や、左右対称形で大形の角錐状石器の発達等からみて、岩戸I遺跡(芹沢編1978)、岩戸遺跡6層下部(清水・高橋ほか編

1986)、駒方池迫遺跡(後藤編 1995)、駒方津室迫遺跡(橘・牧尾ほか編 1992)、百枝遺跡 C 地点Ⅱ文(清水・高橋ほか編 1985)、福岡県宗原遺跡(水ノ江編 1994)、春蘭遺跡(木下 1993)、熊本県下城Ⅰ遺跡(緒方編 1979)、同下城Ⅱ遺跡(緒方編 1980)、同白鳥平 B 遺跡(宮坂編 1994)を位置付けておく(第Ⅲ-67・68 図)。ただし、九州地方西北部でも佐賀県・長崎県では、上記特徴をもつ切出形石器や角錐状石器が良好な出土状態を保って検出された例がない。角錐状石器は百花台遺跡等に多数あるので、将来の資料の増加を待ちたい。また、西輪久道遺跡 B 区上層石器群では中型(4cm 前後)木葉形の角錐状石器がまとまって出土する例があり(第Ⅲ-64 図 1~11)、こうした石器群も本時期に位置づけ可能かもしれないが、不確実である。

百枝 C 遺跡と宗原遺跡、そして筑後川最上流域の下城Ⅱ遺跡の石器群には、宮崎県と同様に長狭対称形の大型角錐状石器(第Ⅲ-68 図 1~23)が多数存在することが特筆される。下城Ⅱでは発達した大型の枝去木型台形様石器(同 26~28)が伴出しており、共伴関係にあるとみれば、東南部における切出形石器の機能的位置を代置しているとみなせる。一方、大分県では国府系ナイフ形石器や非常に細身の角錐状石器(第Ⅲ-67 図 9、18・19、31)が分布しており、宮崎県とは比較的類似性が高い一方、九州南部とは異なった地域性を形成している。

さて以上から、関東以西の地域は、地域ごとに発達する石器型式に偏りや相違があるものの、「関東~東海」「九州」というそれぞれの地域枠内では型式対比が成り立ち、またテフラ年代・層位的上下関係も考慮した九州地方東南部と関東地方との地域間の編年比較によれば、西南日本で広域にわたって時期的にはほぼ一致し連動した変化を想定可能である。関東地方でも、九州地方でも、V 層上部並行期に石刃モードが後退し、縦長剥片剥離技術や横長剥片剥離技術が中心となる。この技術の変動期に、国府系石器群や角錐状石器の広域的出現も確認することができた。環境条件が異なる広い範囲で、共通する変化・変動が認められることになる。

そこで問題となるのが、まだ検討を済ませていない近畿・瀬戸内地方の当該期の石器群変遷である。

## (6) 近畿・瀬戸内地方

### ・国府型ナイフ形石器の出現時期

ここまでの広域的な編年比較の結果、後半期前葉の時期には、時期的に概ね連動した石器群の変遷が窺えるとともに、石器モードと器種との関係にみる技術構造の変化も概ね類似した推移を辿ることが推測された。このとき、AT 直後の時期には、尖頭形石器や石刃製ナイフ形石器、剥片尖頭器が大型刺突具の位置を占め、これに少数種の小型剥片石器が組み合わされている。つまり、技術構造の上では、前半期の二極構造的な技術構造が見てとれる。国府系石器群の出現はこれに後続する時期において認められ、それは古本州島西南部の広い範囲で一致していると考えられる。

しかしながら、近畿・瀬戸内地方では V 層下部並行期の石刃石器モードからなる大型刺突

具が認められない。それゆえ、近畿・瀬戸内地方以外の地域で国府系ナイフ形石器がV層上部・IV層下部段階に見出されることから考えて、近畿・瀬戸内地方の国府石器群もこの時間幅に収まり、瀬戸内地方においてはV層下部並行期の石器群が存在しないことになるのだろうか。

近畿・瀬戸内地方以外の、本論で扱った諸地域のV層下部並行期の大型刺突具は、地域ごとに特徴的型式が出現しているにもかかわらず、石刃モードで製作されるのが通常で、小型石器は石刃モードや剥片モードで製作されるという二極構造的な技術構造が、基本的な技術構造として存続している可能性があった。先の検討を考慮して、この技術構造が少なくとも西南日本に共通する構造的なものであると仮定すれば、先述したように近畿・瀬戸内地方の場合は、VI層並行期から横打剥片モードで大型刺突具を製作していたので、直後のV層下部並行期にもそれまでどおり横長剥片製ナイフ形石器が大型刺突具の位置を占めていたとみるのが自然である。であるならば、その大型刺突具とは、現在の資料からみて国府型ナイフ形石器であったに違いない。

国府型ナイフ形石器の成立が周辺のV層下部並行期石器群と全く一致するかは明らかではない。ただし、先に検討した九州地方西南部・東南部の編年において、V層下部並行期新相の石器群とみなした桐木耳取遺跡第I文化層エリア6・7で、小型の国府系ナイフ形石器が見られたことは、上述の推定と矛盾しない。

瀬戸内地方において石器群がこのような変化を遂げたのは、やはり主たる大型良質石材が、安山岩というより横剥ぎに適した石材にほとんど限られており、横長剥片剥離技術が技術構造内において伝統的に重要な位置を占めていたことに起因しよう。

ここでは、以上の推論から国府型ナイフ形石器がV層下部並行期にすでに近畿・瀬戸内地方では発達を遂げていたと考える。しかしV層下部・上部並行期を編年的に細別する根拠は現在のところかなり乏しいので、この点は保留にしておかざるを得ない。

#### ・編年的検討

V層下部並行期の問題を除けば、近畿・瀬戸内地方の編年も周辺地域との対比によってV層並行期とIV層下部並行期の石器群は推定可能である。とくに隣接する九州地方で確認した、角錐状石器の推移や切出形石器の大型化など、共通して比較できる資料を手掛かりにする。なお最近では、悉皆的資料集成を踏まえての瀬戸内編年を藤野次史(2006)が提示しており、現在最も進んだ編年であるので、本論でも参照した。ただし、藤野編年では本論で対象とする時期の石器群の多くがほぼ同一時期に含められていることから、ここではそのまま採用できなかった<sup>(7)</sup>。

大阪平野周辺丘陵部からみていきたい。V層並行期には郡家今城遺跡C地点(大船編1978)・はさみ山遺跡(一瀬編1990)・西大井遺跡1999年度調査区(森井・竹原ほか編2003)・翠鳥園遺跡(高野・高橋編2001)・長原遺跡97-12次調査地(絹川編2000)・粟生間谷遺跡BL3(新海編2003)が相当する(第Ⅲ-69~71図)。いずれの石器群も大型刺突具の位置は国府型ナイフ形石器が占め、これに小型の横打剥片製ナイフ形石器(第Ⅲ-71

図5・7・17～19・26～30など)や小型の切出形石器(第Ⅲ-70図24・27、第Ⅲ-71図6・33)が伴うことがある。翠鳥園遺跡では小型の横打剥片製ナイフ形石器や切出形石器も多数認められ、基部を凹入加工するものが1点認められる(第Ⅲ-70図27)。また翠鳥園遺跡と長原遺跡97-12次調査地では、共通してやや細身の縦長剥片素材一側縁加工ナイフ形石器が一定数確認されている(第Ⅲ-71図20～25など)。郡家今城遺跡C地点の角錐状石器(松藤1980)は半折しているが(第Ⅲ-69図17)、いずれも形態的特徴が木葉形で厚みに乏しく、細身で長身・甲高のⅣ層下部並行期の角錐状石器とは異なる。郡家今城例は、敢えて比較すれば関東地方の柏ヶ谷長ヲサ遺跡IX文例など、Ⅴ層上部並行期のものに近い。

Ⅳ層下部並行期には長狭対称形の精美な角錐状石器と、大型切出形石器の存在などからみて、八尾南遺跡第3地点(福田編1989)、国府遺跡第6地点(一瀬編1990)、板井寺ヶ谷遺跡上位文化層(山口編1991)、粟生間谷遺跡BL6が該当する(第Ⅲ-72・73図)。粟生間谷遺跡BL6の小型切出形石器(第Ⅲ-72図8・9、21～33)は、Ⅴ層並行期の翠鳥園遺跡や長原遺跡のそれらとは異なり、相対的に形態的斉一性が高い。南花田遺跡(安里ほか編1988)には細身で長狭対称形の角錐状石器(第Ⅲ-73図24)が存在し、切出形石器(同29～31)の特徴も粟生間谷遺跡BL6に近いので、出土状態は良好ではないが、この時期の石器を多く含むであろう。馬見二ノ谷遺跡(光石編2006)では、石刃・縦長剥片製の二側縁加工ナイフ形石器と小型切出形石器が多く、「馬見型尖頭器」(第Ⅲ-73図6～8、12～14)と呼ばれる特異な小型石器も伴出している。粟生間谷遺跡BL6や南花田遺跡に近いが、二側縁加工ナイフ形石器(同2～4)の存在が特殊である。若干新しい時期に属する可能性もある<sup>(8)</sup>。

これに後続する時期(Ⅳ層中部並行期)の石器群は、今のところよくわかっていない。あくまで型式学的な観点からの推測に過ぎないが、兵庫県碓岩南山遺跡(山口・成瀬ほか1995)がこの時期に相当する可能性がある。薄手中小型の横長剥片製ナイフ形石器(同43～48)からなる、主にサヌカイトを用いた石器群である。一見、Ⅵ層並行期とした石器群に類似するようにもみえるが、背部整形に対向調整がみられず、整形加工が精細である特徴が指摘できる。削器が卓越する。横長剥片剥離技術は盤状剥片の長軸に沿って打点を配置する並列剥離である(同49)。これらは恩原2遺跡S文化層や、後述の瀬戸内系石器群と共通する。AT包含層よりもかなり上層から出土することが報じられていることを考えても、新しい時期の石器群である可能性が考えられる。

さて、瀬戸内地方の備讃瀬戸地域では、瀬戸大橋建設関連の調査で出土した石器群にみられるように、膨大な石器が重畳して検出される場合が多く、編年上の単位性が明確な石器群がほとんどないため、取り扱いが難しい。そのような中で、中間西井坪遺跡(森下編2001)の調査例は重要である。本遺跡では総計2845㎡の発掘区から、12,811点と膨大な点数の石器が検出されている(第Ⅲ-74図)。相互に距離を隔てて配置されている小調査区単位(1区・3a区・3b区・3c区・5区)では石器群の様相が異なっている(第Ⅲ-75～76図)。このうち、①3a区エリア3と3b区からは、国府型ナイフ形石器製作を集中的に遂行した石器集中部が、②3a区エリア1・2と3c区からは長狭対称形の大型角錐状石器を大量生産した石器集中部が、

それぞれ複数検出されている。5区ではブロック2から長狭対称形の角錐状石器と切出形石器が出土している（第Ⅲ-77図）。③5区のブロック2以外のブロックおよび1区では前半期末葉のⅥ層並行期の石器群が検出された（前述）。

上記③の時期は推定できるが、①・②については次のように考える。①では国府型ナイフ形石器の製作をおこなっているが、角錐状石器は認められない。②では角錐状石器の大量生産に加え、横長剥片製のナイフ形石器が出土しているが、①の国府型と異なって翼状剥片を素材としないものが大半であり、一側縁に帯状の石核底面が残るものであっても、決まって背面剥離痕が多数枚確認される。この素材を剥離した石核は、石核幅いっぱいに翼状剥片を連続剥取したものは極めて少なく、またそうであっても打面調整が施されていない。①と②のナイフ形石器には型式差とともに製作技術上の差異が認められる。①の石器群は近畿地方Ⅴ層並行期の石器群や国分台遺跡東地区（絹川1988a・b）の石器群に近いが、②は上記の点で①とは大きく異なっており、遺跡間変異では説明が困難であるため、時期差の可能性が高い。大阪平野周辺丘陵部の石器群編年に照らし合わせれば、①はⅤ層並行期、②は後述のⅣ層下部並行期に相当するとみなすのが妥当であろう。

なお、5区ブロック2で細身長身の角錐状石器に共伴する切出形石器は、大型で基部の長いタイプであり、関東地方の同種石器（例えば第Ⅲ-40図2）に対比可能であるため、この編年案を傍証する。

備讃瀬戸地域ではこの編年を基本に、Ⅴ層並行期には中間東井坪遺跡（信里編2004）や郡家田代遺跡（佐藤1996）、香西南西打遺跡（小川編2000）を位置づけておきたい（第Ⅲ-78図）。編年の指標は極めて乏しいが、これらの石器群は国府型ナイフ形石器・国府系ナイフ形石器を中心とし、左右対称形の大型角錐状石器や、小型切出形石器等を全く含まないことによる。瀬戸大橋建設関連遺跡の与島西方遺跡（藤好1985）・羽佐島遺跡（秋山・渡部1984）でもⅤ層並行期に帰属するであろうと考えられる資料が大量に出土している（第Ⅲ-78図9～14）。Ⅳ層下部並行期には大洲遺跡（真鍋編1982）・三条黒島遺跡（森下1997）があり、瀬戸大橋関連遺跡群でも与島西方遺跡で多数の当該期資料が得られている（同15・16）。なお、徳島県吉野川流域の石器群では、Ⅴ層並行期として坊僧遺跡東段地区（氏家・栗林ほか2001）・椎ヶ丸～芝生遺跡（久保脇1994）・日吉谷遺跡（小泉1994）を比定しておく（第Ⅲ-79図）。

このようにみてくると、近畿・瀬戸内地方では、Ⅴ層段階の細別はできないとはいえ大勢としては周辺地域と時期的に対応させることは可能と考える。まとめると、Ⅵ層並行期には剥片モード内部でのナイフ形石器の二項性（横長剥片剥離技術＝大型刺突具／小型石器、縦長剥片剥離技術＝小型石器）が成立し、Ⅶ層期とは異なる技術構造へと大きく変化していたが、Ⅴ層期にはいって、盤状石核の幅いっぱいに規格的な横長剥片（翼状剥片）を剥離する技術が大型刺突具製作と結びついた結果、国府型ナイフ形石器を主体的に製作する国府石器群が成立したとみられる（佐藤1992）。Ⅵ層期と同様に小型ナイフ形石器の製作には依然として縦長剥片剥離技術が用いられているため、技術構造上はⅥ層期と同型的であるが、大型刺突具製作における規格的素材供給技術が確立したため、石材消費の効率性と計画性が向上

していると評価できる。IV層下部並行期には小型切出形石器の形態が規格化し、なにより大型刺突具に角錐状石器・切出形石器が加わって、大型石器製作技術が複雑化している。

#### (7) 中国山地・山陰地方・四国地方南部

まず、広島県冠遺跡群について検討する<sup>(9)</sup>。冠遺跡群は原産地遺跡であるので、一括性が保証されておらず、編年的単位としての有効性に乏しい。以下の編年は、主たる出土石器に基づくもので、あくまで目安程度のものである。

九州に近接するこの地域でも、剥片尖頭器や今峠型尖頭形剥片石器・狸谷型切出形石器が分布しないため、編年対比の指標にできない。冠原産地石器群は、瀬戸内を取り巻く山中に位置する安山岩原産地であるにもかかわらず、いわゆる瀬戸内技法が発達した石器群が相対的に少ないといわれてきた。このため、瀬戸内地方（大阪平野周辺丘陵・備讃瀬戸地域）の編年基準（松藤 1980・1985・1992、佐藤 1989、久保 1989・1999）、すなわち瀬戸内技法関連資料の組成率が高いほど古いという基準で編年的位置づけが与えられると、多くの石器群が相対的に新しい時期に編年されることとなった<sup>(10)</sup>（藤野・保坂 1983）。だが、すでに一応の分布調査が行われている冠原産地近傍に瀬戸内技法関連資料が量的にまとまって検出されていないという事実（藤野・保坂 前掲）は、むしろこの地域が瀬戸内地方東側とはやや異なった石器製作技術構造を有していたことを強く示唆する。むしろ瀬戸内地方東側の地域で横長剥片剥離技術が特異に発達した（佐藤 1992）のであり、「瀬戸内技法の優先度」といった旧来の技術的指標だけに基づいて編年することは適切ではないと考えられる。

近畿・瀬戸内地方編年との比較では、V層並行期として冠遺跡A地点（植田・梅本ほか 1983）に該当資料が含まれる。国府型ナイフ形石器やこれに類する横打剥片製ナイフ形石器が多く存在し、基部を細めて器体上半まで加工を加えた基部加工尖頭形剥片石器が共伴する可能性がある（第Ⅲ-80図1～4）。この石器群には両面調整体も存在するため、全てが同時期とはいいがたいが、整った国府型ナイフ形石器が量的に多いことと、少なくとも公表資料に整った対称形の角錐状石器が認められないことから、本時期に含めた。

IV層下部並行期には、いまのところ冠遺跡D地点第2次調査地（妹尾 1989）と冠遺跡C地点（植田・梅本ほか 前掲）を位置づけておきたい（同9・10、11～19）。大型角錐状石器が多数検出された冠遺跡B地点（植田・梅本ほか 前掲）にも可能性があるが、原産地ということもあって折損品が多く（織笠 1988、藤野 1996）加工が粗いものを主体とし、長狭対称形の大型品も存在しない（同5～8）。その位置づけは予断を許さない状況であるが、長狭型を含むので、一応IV層下部並行期の石器を多く含むものと考えておきたい。

最後に、四国地方南部・中国山地・山陰地方の石器群にふれておく。中国山地では恩原遺跡群の調査成果による稲田孝司の編年が参考となる（稲田編 1988・1996）。恩原遺跡群を含む周辺では、AT火山灰層の上に下のホーキ・オドリ・上のホーキ・弥山軽石という大山系火山灰層が検出され、石器群はこれらとの層位的関係で捉えられている。稲田はこれを手がかりに、中国山地の旧石器時代石器群の変遷を考えた。稲田によると、AT上位のナイフ形石器群は2時期に分けて理解されている（第Ⅲ-81図）。ひとつはオドリ火山灰層上

部の暗色帯中の石器群（フコウ原遺跡（鎌木・小林 1987）、恩原 1 遺跡 O 文化層（稲田編 1988））、もうひとつは弥山軽石層上位のソフトローム層出土の石器群（恩原 2 遺跡（稲田編 1996）、笹畝遺跡第 2 地点（白石・小林 1998）、野津見第 1 遺跡（稲田・日野 1993））である。大局的な石器群の変遷案としては賛成したいが、稲田の編年は本論の編年観のような地域間対比の視点に乏しく、不十分である。以下で本論独自の検討を加えておきたい。

まず山陰地方である。島根県原田遺跡（伊藤・石橋 2008）では新しい石器群の発見があった。本遺跡では、比較的良好な土層堆積が確認されており、AT 包含層準である第 6 層より上位の第 5 層から安山岩と凝灰岩を主たる石材とする石器群と、多数の礫群が検出されている（第Ⅲ－24 図）。主に横長剥片製ナイフ形石器・国府系ナイフ形石器（第Ⅲ－82 図 23・24・25・26・29）と、大型対称形の角錐状石器（同 22）や、大型切出形石器（同 19）が検出されており、IV 層下部並行期の位置づけを与えられよう。

中国山地東部では、フコウ原遺跡でオドリ火山灰層上部暗色帯から石器群が出土しており、層位的にみて次に述べる恩原 2 遺跡 S 文化層や笹畝第 2 遺跡より明らかに古い（同 14・15）。本遺跡を特徴づける縦長剥片製で細身の二側縁加工ナイフ形石器は、九州地方で V 層上部並行期に特徴的な石器である。ただし、フコウ原遺跡のものはやや薄手である。恩原 1 遺跡 O 文化層でも同層準から類似のナイフ形石器が出土し、ここに翼状剥片石核が伴うとされる（同 16・17）。これらの石器群は、V 層並行期の石器群とみなしておきたい。

笹畝第 2 遺跡では、上のホーキ火山灰層・弥山軽石層等の大山系火山灰より上位のソフトローム層から石器群が出土している（第Ⅲ－82 図 1～13）。ナイフ形石器の特徴は幅広短寸の厚手タイプ（同 1～5）で、搔器や角錐状石器（同 6・7・8・11）を伴う。なお、この大山系火山灰の年代値は未だはっきりしない。弥山軽石層を 18000～16000 14CyrBP とする測定例（野村・田中 1986）や、20000～22000 14CyrBP とする測定例（津久井 1984）がある。したがって、これらの測定結果に則ると、弥山軽石層より上位から出土した本文化層石器群は一番古く見積もっても 22000 14CyrBP より新しいことになる。石器群の内容からは V 層上部から IV 層下部あたりの時期が想定されるので、前者の年代値では整合しないし、後者の年代値でも若干新しい可能性が高い。火山灰編年、地質編年の進展を待って結論すべきだが、本論では、石器群の内容を重視して V 層上部・IV 層下部並行期に位置づけておく。ただし、V 層上部石器群は、層位的にも明らかに下層から出土しているフコウ原遺跡出土石器が相当すると考えられるので、笹畝遺跡は IV 層下部付近に位置づけたい。

同じくソフトローム層より出土し、稲田により笹畝第 2 遺跡と同時期とされる恩原 2 遺跡 S 文化層（第Ⅲ－83 図）では、主に安山岩よりなる石器群が出土している。石材が非安山岩（凝灰岩・黒曜石製）製の少数の国府型ナイフ形石器（同 21・22）を含むが、他の安山岩製ナイフ形石器は次の特徴を持つ。すなわち、盤状剥片の縁辺に沿って打点を並列移動しながら剥離される、大きさのわりに薄手の横長剥片を素材とし、背部一側縁を加工した、薄手の幅広木葉形のものである。加工は腹面側からだけでなく対向方向から、あるいは背面側から加えられることも特徴である。また背部加工が鋸歯状となるものはきわめて少なく、技術形態的に明らかに国府型と呼べる長狭型のナイフ形石器（凝灰岩・黒曜石製）にのみ施

される。国府型ナイフ形石器の存在にもかかわらず、ほとんどの横長剥片製ナイフ形石器の型式の特徴は、大阪平野周辺丘陵部や備讃瀬戸地域には認められないものである。なお、角錐状石器は1点も含まれない。

もっとも類似するのは古本州島東北部西端に位置する、北陸地方のIV層中部並行期前後の瀬戸内系石器群（後述）であるが、地域が離れすぎており、対比の有効性に問題を残す。笹畝第2遺跡で指摘したように、出土層位から位置づけることはできない。地質編年の進展を見なければ確言は難しいが、ここでは、その技術的特殊性と、瀬戸内系石器群との類似性などから、一応IV層中部並行期前後に相当するものとみなしておきたい。

以上、中国山地の後期旧石器時代後半期前葉の石器群は少なく、その技術構造を考察することは難しい。また、冠遺跡群と、中国山地東部の遺跡では様相が大きく異なる。中国山地東部に関していえば、VI層期からV層期には縦長剥片製ナイフ形石器が発達しているようにみえる一方、IV層並行とおもわれる時期になって横長剥片製ナイフ形石器が卓越することは注意しておきたい。冠遺跡群は、むしろ瀬戸内地方との関連が強い。

なお、四国地方では、国府型ナイフ形石器を多数出土した和口遺跡（木村 2003）がV層並行期に、奥谷南遺跡（松村・山本 2001）、佐野楠目山遺跡（森先・山崎 2006）出土・採集の、大型品を含む角錐状石器や横長剥片製ナイフ形石器を多数有する石器群がIV層下部並行期に位置づけられる（第Ⅲ－84図）。

#### (8) まとめ

古本州島西南部における後期旧石器時代前半期から後半期にかけての編年研究を通じて、技術構造の変遷過程を検討してきた。VII層並行期にはいずれの地域でも認識可能であった二極構造が解体し、特にVI層並行期とV層上部並行期を経て変化を遂げる過程がみてとれた。

VI層並行期では、ナイフ形石器の大小二項性が広い地域で成立した。大型品は原則として石刃・縦長剥片剥離技術と結びついているが、小型品は特定の剥片剥離技術と結合しない。また、ここでは、関東地方における大型刺突具の発達と、東海地方以西におけるその発達の弱さが特徴的である。このなかで、近畿・瀬戸内地方では大型刺突具も横長剥片製であり、横長剥片剥離技術によるナイフ形石器の大小二項性が特異的に認められる。また、この時期以後、搔器や削器といった刺突具以外の定型的な石器が頻繁に組成に加わるようになる。

V層下部並行期には、技術構造上の地域差の空間的範囲はVI層並行期とあまり大きな違いをみせない。ただし、石刃製の大型刺突具が再び顕著に増加し、小型石器と対をなす現象が関東地方・東海地方東部・九州地方では認めることができた。九州地方では大型刺突具を石刃・縦長剥片製の剥片尖頭器が占め、小型石器に剥片製の台形様石器が発達するなどの点で顕著な地域差を示す。台形様石器は、ごく少数ながら、関東地方のこの時期に再び一時的に現れている。近畿・瀬戸内地方では大型刺突具としての国府型ナイフ形石器が出現していた可能性が高い。

技術構造が最も大きな変化を見せ、地域差が顕著になるのはV層上部並行期である。ここで地域差の特徴をまとめておきたい。関東地方から東海地方東部では縦長剥片剥離技術によ

る中大型ナイフ形石器・尖頭形石器が、剥片製の小型の切出形石器・ナイフ形石器や角錐状石器・尖頭形剥片石器と対をなしている。東海地方西部では、大型刺突具として縦長剥片製ナイフ形石器のほかに国府型ナイフ形石器やその類似品も多く現れて、技術構造が複雑化している。近畿・瀬戸内地方は国府石器群が成立する。九州地方西北部では大型刺突具に国府型ナイフ形石器やその類似品、角錐状石器、剥片尖頭器が組み合わせられ、小型の切出形石器や台形様石器が認められる。九州地方東南部・西南部では縦長剥片製ナイフ形石器・角錐状石器・剥片尖頭器が大型刺突具を占め、小型の切出形石器・台形様石器や尖頭形剥片石器が認められる。西南部では両面調整尖頭器も出現する。

この時期には石器の機能転化がしばしばおこり、素材供給技術と大小の石器との結びつきが多様化しているばかりでなく、石器そのものの形態的特徴も多様化し、技術構造レベルでの地域差が一挙に顕在化するのがこの時期である。そしてほぼ同時に国府系石器群・角錐状石器の広範囲への広がりが確認された。

IV層下部並行期はこの多様性の幅がやや縮小するとともに、地域性がより明確化する。また、大型刺突具と小型石器の位置に、それまでとは異なる石器が発達する傾向がV層上部より顕著である。また、横長剥片剥離技術の進展も特徴となる。

大型刺突具と小型石器との関係をまとめると、次のようになる。関東地方では大型剥片製の切出型石器と相対的に少数の角錐状石器に、小型剥片製の尖頭形剥片石器や切出形石器、小型角錐状石器が組み合わさる。東海地方中・東部は資料が少ないが、大型剥片製の角錐状石器に小型剥片製のナイフ形石器・切出形石器や小型角錐状石器が組み合わさる。東海地方西部は大型剥片製角錐状石器・横長剥片製ナイフ形石器に小型剥片製のナイフ形石器が対をなす。近畿・瀬戸内地方では大型の角錐状石器・国府型ナイフ形石器およびその類似品に小型のナイフ形石器・切出形石器が対をなす。九州地方西北部は様相が不明瞭である。九州地方東南部・西南部では大型剥片製の角錐状石器・横長剥片製切出形石器と少数のナイフ形石器に、小型の角錐状石器・切出形石器・尖頭形石器・国府系ナイフ形石器が組み合わさっている。九州地方西南部では、同東南部と異なって角錐状石器の発達が著しく、逆に国府系はほとんど認められない。

このように、V層上部並行期には地域分化が進行し、地域間の技術構造の差異が極めて明瞭となる。この傾向はIV層下部並行期にも続いている。技術構造の変化には、V層上部並行期を中心とする特定石器・石器群（国府系石器群・角錐状石器）の広域での出現が関与している可能性が高い。

ところで、古本州島東北部では、ナイフ形石器（背部加工尖頭形石刃石器）の代わりに尖頭形石器（基部加工尖頭形石刃石器）が卓越し、後期旧石器時代前半期の段階から古本州島西南部とは異なる地域性を呈するため、西南部とは一応の区別を設けていることを前述した。次に、この東北部の編年的検討をおこなっておきたい。

### 第3節 古本州島東北部の編年研究

#### 1. 古本州島東北部の編年研究：後期旧石器時代前半期後葉

##### (1) 古本州島東北部における前半期編年研究の問題

古本州島東北部における後期旧石器時代前半期研究に好資料を提供した、秋田県七曲台遺跡群を初めとする秋田県下の諸遺跡の調査以後に提示され、現在も主要な編年となっている研究例には、石川恵美子（石川編 1991）・渋谷孝雄（1992）・藤原妃敏（1983・1992）・柳田俊雄（2006）・吉川耕太郎（2007）らの研究がある。これらの編年案を比較したものが第Ⅲ-1表である。吉川を除く編年観に共通しているのは、台形様石器群からナイフ形石器群へ、という固定的枠組みである。すなわち、最初に台形様石器のみからなる石器群が存在し、続いて石刃技法が発展するという構図である。これらの編年の具体的な難点は後述するが、こうした構図自体は理論的にいっても成り立ち難いので、最初にこの点をまとめておく。

渋谷・藤原らは、二極構造論批判において、台形様石器から主に構成される石器群に石刃技法の痕跡がないことを主たる根拠として、台形様石器のみからなる一時期を設定し、二極構造を証明するためには遺跡間接合が不可欠であるとみなす（渋谷 1992、藤原 1999）。しかし、あくまで現実の組み合わせである石器・技術の組成をもとに設定した石器群類型に、石刃石器モードが伴わない、とする根拠もまた無い。

一方、システム・構造論的視点にたつ二極構造論では、古本州島東北部においても、最も古相の台形様石器を含む石器群には、これと対をなして機能する石器モードが存在していたと考える。なぜなら、両遺跡には、関東地方と比較した場合、Ⅸ層相当の石器群と型式学的に共通する台形様石器が確実に存在しているためである（佐藤 1991）。このとき、柳田らの考えによるなら、関東地方では管理的な石刃石器モードと二項的に機能している台形様石器に対比可能な石器が、直近の隣接地域である東北地方において、単独で機能していたということになる。しかもこのことは、視野を広げた場合、東北地方に限って他地域とは極端に異なった石器群構造が生成されていたということの意味する。したがって、東北地方においても、石刃石器モードを有する石器群が、最古期の台形様石器群と同時期に存在すると仮設するのが適当であろう<sup>(11)</sup>。

さらに、台形様石器の変遷観にも問題がある。第Ⅲ-1表でみると、〈風無台Ⅱ遺跡〉→〈小出Ⅰ遺跡ないし松木台Ⅲ遺跡〉→〈此掛沢Ⅱ遺跡ないし下堤Ⅵ遺跡〉という変遷観は、全ての編年観に共通する（遺跡文献は後記する）。これは、変異幅の大きい風無台Ⅱ遺跡（大野・高橋ほか 1985）の台形様石器から、整形度の低い規格的な「米ヶ森型台形石器」へ、という段階的發展を意味している（第Ⅲ-85図）。

しかし、台形様石器という枠組みを一括して、単一特定の論理で配列することは難しい。なぜなら、台形様石器の各細別類型の発達度合いは、地域や時期によりそれぞれ異なっているからである（佐藤 1988・1991）。このことは、少なくとも各類型が別々の系統進化を遂げているのであり、単純に台形様石器全体を多様な形態から規格的な形態へという時間的先

後関係に置けないことを示す。まずは、それぞれの類型毎に系統立てて前後関係を考察すべきである。たとえば、後で図示するが、Ⅲ類中には米ヶ森型のほかにも小出Ⅰ遺跡（石川編1991）、地蔵田遺跡<sup>(12)</sup>（菅原2002）、松木台Ⅱ遺跡（大野・高橋ほか1985）、風無台Ⅱ遺跡の各遺跡にみるようなバリエーションがあり、明らかに時期を異にした系統進化を示す。米ヶ森型の位置づけは、連綿と続く「整形度の低い」Ⅲ類内部の系統で検討されねばならない。撥形と呼ばれる台形様石器（Ⅰ類）も、例えば松木台Ⅱ遺跡、地蔵田遺跡、上萩森遺跡（菊池1988、鹿又2005）のものは各々異なっている。これらもまずⅠ類の系統で新旧関係を考察すべきものである。つまり、多様な台形様石器の整形技術・形態が一方向的に規格化を遂げて米ヶ森型化したとするよりも、ある時期に台形様石器の中でもとりわけⅢ類が特殊発達したものが米ヶ森型である、と理解するほうが、共伴する他の台形様石器の存在を合理的に説明するためにも、より説得的である（森先2007b）。たとえば、従来の変遷案では、Ⅰ・Ⅱ類とともに米ヶ森型を多く含むⅢ類からなる、まさに多様な上萩森遺跡や、笹山原No.16遺跡（会田2007）の解釈が困難となる（第Ⅲ－89・90図）。

一方、田村隆による構造変動論（田村2001）には、上記の批判は当てはまらない。まず田村の議論を確認しておく。

田村は、富山平野の石器群の構造性とその変換関係の追究を通じて、「端部整形石器」（田村が従来の台形様石器の一部から分離・抽出したカテゴリー）を母体とし、基本構造を等しくしつつも剥片製小型ナイフ形石器や「台形石器」が端部整形石器を置換していく通時的・空間的変換関係を見出そうとする。しかし、層位的出土事例に乏しい富山平野の石器群では時間的新旧関係の推定が明らかに困難であるため、視点を関東地方東部に移してこれを確認しようと試みている。関東地方のⅩ～Ⅸ層相当の石器群を構造分析した結果、ここでは端部整形石器に象徴される石器群構造が、田村のいう台形石器に先行して存在し、ここから各種の変換群が生成されていく可能性が指摘される。さらに視点は東北・北海道地方へと広げられ、端部整形石器群の普遍的分布と、これを基盤としたその後の変換関係を叙述している。

ところが、田村の論では、端部整形石器群の時間的位置の根拠は、関東、特に関東地方東部での層位的出土事例に置かれている。つまり、関東地方の出土事例を基にして富山平野や東北・北海道地方の端部整形石器群を後期旧石器時代初頭に位置づける、という論理展開となっている点に、同論文の最大の問題がある。このことは、田村による東北地方の石器群の検討でも明らかである。

田村は自身の分類に基づいて、まず、東北地方の後期旧石器時代前半期石器群の石器型式論と型式間関係を再整理した。すなわち、風無台Ⅱ遺跡の資料に基づく「風無台型端部整形尖頭器／刃器」を設定し、米ヶ森型が「風無台型端部整形刃器」の変異体であることを指摘する。また、小出Ⅰ遺跡出土資料に基づき「小出型端部整形尖頭器／刃器」を設定する。そして東北地方の石器群を五つのグループに整理し、その新旧関係を次のように考えた。すなわち、まず端部整形刃器と端部整形尖頭器からなり、少量の尖頭石刃をもつ小出Ⅰ遺跡を最古期に位置づける。次に、「台形石器」と端部整形刃器からなる風無台Ⅱ遺跡、松木台Ⅱ遺跡、上萩森遺跡（ただし時間差をもつ）と、これらと「台形石器」と端部整形刃器が共通するが

多量の石刃から構成される風無台Ⅰ遺跡（大野・高橋ほか 1985）を後続させる。引き続いて、多量の石刃からなり端部整形石器は共伴しない松木台Ⅲ遺跡（大野ほか 1986）と、石刃および「端部整形刃器（米ヶ森変異体）」からなり、松木台Ⅲ遺跡と同様の「尖頭部を持たない基部加工石刃」を共有する此掛沢Ⅱ遺跡（柴田 1984）、家の下遺跡（高橋・五十嵐 1998）に、より後続的な位置を与えたのである。

小出Ⅰ遺跡が最古期、すなわち武蔵野Ⅹ層並行期に編年された根拠は、千葉県御山遺跡第Ⅱ文化層（矢本編 1994）に共通した特徴を有する石器がある点におかれている。これにもとづき、東北地方では端部整形尖頭器／端部整形刃器の組み合わせがやはり最初において、後者は長期的に継続したが、前者は時間の経過にともなって尖頭石刃や「台形石器」に置換されていく、という基本的な構造変換の構図を導いたわけである。

田村の論に対しては、編年上の定点に据えている下総台地の層位事例から、そのまま東北地方の編年を推定できるのかどうかという批判が可能である。もちろん、関東地方との対比と整合性の追究は重要であるが、小出Ⅰ遺跡を御山遺跡第Ⅱ文化層に直接対比することは難しい。例えばこの論理では、小出Ⅰ遺跡と類似する台形様石器Ⅲ類を伴う新潟県前山遺跡（鈴木・田中 1996）や岩手県岩洞堤遺跡 2 文（村木 2007）を、同じく武蔵野台地立川ロームⅩ層並行期に位置づけねばならなくなり、これらの石器群に伴う、対向調整による長狭型二側縁加工ナイフ形石器の出現時期があまりにも早すぎることとなる。このことに対する説明が困難となる。

台形様石器Ⅲ類の形態的特徴に編年の基軸を設定したことが最大の問題といえる。台形様石器Ⅲ類は、きわめて機能的性格の強い便宜的な石器であるので、特別な場合を除いては、その技術形態のみに編年の積極的根拠を求めることは危険である。

ところで、最近柳田俊雄は AT 直下の古土壌層（暗色帯）と石器群の出土層位との関係を手がかりとした独自の編年研究をおこなっている（柳田 2006）。しかし、ローカルな形成要因をもつ古土壌層を東北地方全域で対比可能な鍵層とみなせるかについて、地質学的・土壌学的検討が不可欠であるが、提示されていない。東北地方においては、今後、より様々な堆積環境での遺跡探査と、地考古学（Geoarchaeology）的な発掘調査が必要である（Izuho and Sato 2008）。が、それには長い時間が必要となることが予想され、地質編年に関わる作業に重心をおいての石器群編年は現状では困難である（出穂 私信）。

## (2) IX層並行期の石器群について

さて、ここでは上述の問題を解消し、筆者の対案を提示したい。本論の対象とする前半期後葉（Ⅶ層並行期以後）について述べる前に、先述の編年案との相違点を明瞭にするために、まずⅨ層並行期に位置づけられる石器群に簡単に言及しておきたい。

Ⅸ層並行期には松木台Ⅱ（大野・高橋ほか 1985）・風無台Ⅱ遺跡（大野・高橋ほか 1985）が相当する（第Ⅲ－86 図）。台形様石器はⅠ類を中心とするが、弱い尖頭部を持つⅡ類（同 11・16）も確認される。平坦調整が多用され（一部粗い急斜度調整併用）、素材形態と加工部位に安定した関係が成立していないため、全体的に多様な形態を呈する。素材端部に微弱

なトリミングを施したⅢ類には魚鱗状のものからなり、小型のもの（同 15・21・22）、やや大型（20）の二種類があるらしい。これらの石器群を最も古相に位置づけるという点に関しては、佐藤編年や東北地方各研究者の編年でも一致しており（第Ⅲ－1表）、今後とも大きな変更を要しないだろう。ただし、本論では風無台Ⅰ遺跡（大野・高橋ほか 1985）の尖頭形石器群（同 43～64）が、これらの台形様石器群と対をなしてこの時期に存在していたと考える（佐藤 1991）。その根拠は、尖頭形石器が中小型品を中心とし、また後述するⅦ層並行期以降のどの中小型品とも明らかに異なり、薄手かつ調整加工が微弱で、形態的安定性に乏しいこととする。福島県上悪戸遺跡（福島県文化センター編 1983）も、台形様石器の特徴が松木台Ⅱ・風無台Ⅱ遺跡に共通し、概ね同時期に比定される（第Ⅲ－87 図 13・14）。同県大谷上ノ原遺跡 1 次調査 BL1・2（山内・小野ほか 2001）は、尖頭形石器が基部片側縁のみを加工する中小型品からなるという特徴も有している。台形様石器も平坦剥離によるⅠ類（同 20）が認められ、Ⅸ層でもより古い時期に位置づけられる可能性が高く、さらに時期を遡る可能性（Ⅹ層上部）もある。また同じく福島県笹山原 No. 7 遺跡（堀・藤原 1990）も近い時期に比定できよう（同 1～12）。新潟県坂ノ沢 C 遺跡 AT 下位石器群（田中・鈴木 1998、鈴木 1999）は、精製の台形様石器Ⅰ類（同 21）を有し、これに形態的に多様な台形様石器Ⅰ・Ⅲ類が共伴する。本石器群には大型の石刃が伴っており（同 27）、この時期の石刃モードの存在が示される。Ⅸ層並行期とみなせる。同県樽口遺跡 A-KATD 文化層（立木宏編 1996）は、時期推定に適した石器を欠くため位置づけが困難だが、全体的に不整形で非常に技術形態的個性の強い少量の台形様石器Ⅲ類（同 15～18）からなる点を評価して、Ⅸ層並行と捉えておく。新潟県上野林 J 遺跡（藤田・早田ほか 2004）も風無台Ⅱ遺跡に類似し、Ⅸ層上部並行期である（第Ⅲ－88 図）。

### (3) Ⅶ層～Ⅵ層並行期の編年

#### ・Ⅶ層下部並行期

Ⅶ層並行期の石器群について述べる。地藏田遺跡（菅原 2002）の石器群は、先に述べたとおり、従来は風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡と同段階に比定されてきたが、佐藤宏之はⅦ層上部並行とみなしている（佐藤 1991）。地藏田遺跡は台形様石器Ⅱ類に特徴を有する（第Ⅲ－89 図 11～16）。Ⅱ類（ペン先形）は基部を錯向調整によって整形した、相対的に厚手で大型のものからなる。その他のⅠ・Ⅱ類（平刃）は風無台Ⅱ遺跡のものによく類似しつつも、厚みの均質性に表れる素材選択度の高まりや、加工部位の規格化が看取され、風無台Ⅱ遺跡よりは新相であると思われる。加工に平坦調整が多用されていることからみても、これはⅦ層上部並行とする位置づけよりも、風無台Ⅱ遺跡との連続性を評価して、より古期、すなわちⅦ層最古期に位置を与えるべき石器群と考える。ここには略全面研磨の石斧（同 25）が共伴している。また、仮にこの石器群をブロック配置のやや崩れた環状ブロック群とみなすとすれば、この時間的位置づけは、列島の環状ブロック群の存続時期（主としてⅩ層上部～Ⅸ層）からみても、より整合性が高い。最近、会田容弘によって速報のあった笹山原 No. 16 遺跡（会田 2007）も、地藏田遺跡によく類似した特徴を有する（同 26～

34)。笹山原No. 16では、石器群と分布上の相関関係を有すると考えられる「特殊遺構」から、28000±14CyrBP前後の年代が得られていることも注意されよう（第Ⅲ-12図参照：Ⅶ層下部～Ⅸ層上部の年代値）。両石器群は、極めて類似した特徴を有し、ホライズンをなす。

上萩森遺跡（菊池1988、鹿又2005）の石器群は、東北地方の編年におけるひとつの定点となりうる。この点はすでに佐藤宏之による次のような説明が加えられている（佐藤1991）。本遺跡を特徴づける台形様石器Ⅱ類の特殊的発達（第Ⅲ-90図23～34）、北関東や北陸を含めた東北日本に広く観察される現象であるため、これを編年的基軸の一つとすることが可能である。具体的には、その発達が北関東の石器群（磯山遺跡・分郷八崎遺跡：第Ⅲ-3図）を参照すれば武蔵野Ⅶ層相当期でもより古い時期（Ⅶ層下部並行期）に顕著であり、Ⅱ類における形態の共通性の高い範囲、すなわち東北から北陸までの範囲に対しても、近い編年的位置を想定し得る。筆者は、上萩森遺跡は笹山原No. 16遺跡や地蔵田遺跡と時期的に近接してはいようが、笹山原No. 16遺跡や地蔵田遺跡のほうが、風無台Ⅱ遺跡に型式学的特徴が類似しており、より古相と判断している。

上萩森遺跡の石器群をもとに、米ヶ森型と、角形基部をもつ中型品を中心とした尖頭形石器からなる石器群の位置づけを推定可能である。米ヶ森型と中小型尖頭形石器からなる石器群には岩手県愛宕山遺跡（佐藤編1993）（第Ⅲ-90図1～19）、秋田県此掛沢Ⅱ遺跡（柴田1984）・下堤G遺跡（菅原1983）・家の下遺跡（第Ⅲ-91図）、山形県懐の内F遺跡（渋谷・大川2000）・岩井沢遺跡（加藤・米地ほか1973）、岩手県二ノ台長根遺跡（吉田2006）がある（第Ⅲ-92図）。報告されていないが、岩井沢遺跡には米ヶ森型を多数伴う。上萩森遺跡と下堤G遺跡・二ノ台長根遺跡は、中型尖頭形石器の特徴も共通する（第Ⅲ-90図32、第Ⅲ-91図29～32、第Ⅲ-92図21～23を比較されたい）。一方、家の下遺跡・此掛沢Ⅱ遺跡は中大型尖頭形石器および多量の米ヶ森型がまとまって組成されており、互いに近い時間的位置づけを与えうる。また、以上の石器群は、型式学的特徴から、相互に若干の時期差が予想されるとはいえ、それはⅦ層下部期という時間幅の中においての変異と捉えるほうがよいだろう。

福島県笹山原No. 8遺跡（柳田1995）では、後述する岩洞堤遺跡や前山遺跡のように規格的ではないが、側縁加工で中型のナイフ形石器（第Ⅲ-92図35・36）と、角形基部をもち大型の尖頭形石器（同29～34）、弧状一側縁ナイフ形石器（同37）、片面全面研磨の石斧（同42）等を有し、Ⅸ層上部からⅦ層最古相、すなわち地蔵田遺跡とほぼ同時期の位置づけを与えうる。尖頭形石器の共通性から、福島県成田遺跡（鏡石町史編纂委員会1982）も同時期かやや新しい時期に比定されよう。笹山原No. 10遺跡（阿部・柳田1998）も岩井沢遺跡と共通する尖頭形石器（同44～47）をもち、矩形の楔形石器（同50）をもつⅦ層下部並行期の石器群と考えられる。

前述の通り、筆者編年は、地蔵田遺跡をⅦ層でも最古期の石器群と位置づける点において佐藤編年とは一部異なっている。したがって、筆者の案では、関連する北陸地方の石器群をどのように理解するかという問題が当然生じるため、ここで説明しておく。

佐藤によって、地蔵田は富山県西原C遺跡（山本1977）に対比されているが（佐藤

1991)、この点を変更する必要はないと考える。したがって、筆者は西原C遺跡・地蔵田遺跡をともにⅦ層でも最古期の石器群とみなす。西原C遺跡の台形様石器Ⅲ類は魚鱗状・貝殻状の形態で、調整も微弱な非急斜度調整のものを中心としている(第Ⅲ-93図7~9・12・13)。大型の石核素材を得にくい、節理の多いジャスパーを主石材とするため、そうした制約のない良質頁岩を背景に発達した米ヶ森型のように均質的・規格的形態とならないが、例えばⅦ層下部並行の上萩森遺跡のものとは形態・厚み・調整の特徴が類似している。台形様石器Ⅱ類の発達や台形様石器Ⅲ類の上記特徴、局部磨製石斧の特徴から、富山県白岩藪ノ上遺跡(岸本・松島1982)・石川県宿向山遺跡(松山ほか1987)・宿東山遺跡(本田1987)もほぼ同時期に位置づけられる。宿東山遺跡では、大型の尖頭形石器(同16)が出土している。

一方、ウワダイラI遺跡・同L遺跡(橋本ほか編1974)では、矩形急斜度調整の、やや大型の台形様石器Ⅲ類がまとまって出土している(第Ⅲ-94図)。Ⅲ類の型式比較という点では、上記した石器群とは異なっているが、一遺跡におけるⅢ類の豊富さは東北地方Ⅶ層石器群の特徴として注目される。両石器群には中型幅広の尖頭形石器が共伴する。これらの石器群をⅦ層上部に比定すれば、細部では異なるが東北地方日本海側の大部分において一致した石器群の変遷を読み取れる。次にこの点を確認していく。

#### ・Ⅶ層上部並行期

さて、大型~小型の尖頭形石器と、急斜度調整により矩形に仕上げられた台形様石器Ⅲ類に特徴を有する秋田県小出I遺跡出土石器群(石川編1991)は、Ⅶ層でもより新しい時期であろう(第Ⅲ-95図1~18)。その理由をのべる。北関東地方では、Ⅶ層上部(佐藤によればⅦ層最上部)並行期に、関東地方の内部では系統関係を追跡できない後田型台形様石器(Ⅲ類)が出現する。この由来を説明するためには、台形様石器Ⅲ類の系統を、Ⅲ類の発達する東北地方に求めることが適当と考えられる。このとき、後田型がⅦ層上部並行期に位置づけ可能ならば、東北~北陸の石器群に伴う類後田型Ⅲ類の位置づけも、概ね同時期に位置づけられねばならないのである(佐藤1991)。この点について、佐藤編年の論理に変更の必要はないと考えている。

基部を角形に仕上げた大型尖頭形石器や、尖端が平刃となる基部加工石刃石器(類へら形石器)、小出I遺跡に類似するⅢ類(中型石刃ないし縦長剥片製)を有する松木台Ⅲ遺跡は同時期の石器群と考えられる(同19~31)。太平洋側では、整理中の遺跡であるが、大型の尖頭形石器・弧状一側縁ナイフ形石器・中型の二側縁加工ナイフ形石器(同36・37)と、矩形急斜度調整のⅢ類(同38)を伴う岩洞堤遺跡第2文化層(村木2007)や、大型の尖頭形石器(同39・40)および小出Iに近いⅢ類を多量に製作(同45)している峠山牧場I遺跡A地区のBL3(AT下位)(高橋・菊地編1999)が、Ⅶ層でもより新しい時期に位置づけ可能である。峠山牧場I遺跡A地区・BL3には、矩形縦長剥片の打面部を基部側におき、一側縁を弧状に整形した半月形の弧状一側縁加工ナイフ形石器が存在する(同41~43)。これは、先にⅦ層上部並行期に位置づけた富山県ウワダイラI遺跡に類似する一方、Ⅶ層下部

並行期の富山県白岩藪ノ上遺跡例とはやや特徴を異にしている。新潟県前山遺跡（鈴木・田中 1996）も、ナイフ形石器と台形様石器Ⅲ類の特徴から、この時期であろう（同 32～35）。長野県北部の太子林遺跡（高橋・望月編 1981）は、平刃・撥形の局部磨製石斧と大型の尖頭形石器等の存在からみて、同時期でよいと思われる。（第Ⅲ－95 図 46～48）。

小出Ⅰの基部加工尖頭形石刃石器・台形様石器Ⅲ類と近い特徴を有する石器群として、秋田県縄手下遺跡（吉川編 2006）があげられる（第Ⅲ－96 図 1～28）。縄手下遺跡では、このほかに特徴的な切出形石器が出土しており、同種石器を最初に出土した秋田県狸崎B遺跡（安田編 1993）にちなんで（同 29～44）、筆者はこれを「狸崎型」と呼んでいる（森先 2007b）。ブロック状の石核から剥離された、主に矩形を呈する剥片を素材とし、その末端部と打面部の両側を内湾状に加工して基部を作出した斜刃の石器で、刃部両端がとがることに特徴をもつ。これと類似する技術形態的特徴を持つ石器に、「池のくるみ型台形様石器」がある。池のくるみ型とは、佐藤宏之（1988・1991）によって抽出・設定された台形様石器の終末的形態を示す一型式である。長野県池のくるみ遺跡出土の台形様石器を基準資料とする。その特徴は、「両側縁を弧状にトリミングし、急傾斜な背部加工を加えた平縁刃部の台形様石器」である<sup>(13)</sup>（佐藤 1991）。両者は類似し、縄手下遺跡や狸崎B遺跡で共存するようだが、基軸と刃部の配置システムが異なっており、また両者間には中間的形態が多くない。

狸崎型はその先行形態を上萩森遺跡の台形様石器Ⅱ類に求められるだろう。上萩森遺跡の台形様石器Ⅱ類は、素材剥片の打面側が器体横位置に配置され、また側縁は内湾状に加工される点に特徴を有しており、その一部は斜刃となることから、狸崎型の先行形態として相応しい特徴を持つといえる。上萩森遺跡では前時期の石器群にくらべⅡ類の発達が明瞭化しているが、いまだ台形様石器Ⅰ・Ⅱ類の区別があいまいで連続的である。おそらく、この分化が時間の経過に伴って進行し、Ⅱ類が特殊化したものが狸崎型であると解釈したい。基本的には台形様石器Ⅱ類が発達する地域において、狸崎型が認められていることがその傍証となるだろう。同じ論理で、池のくるみ型の由来は前時期の（たとえば上萩森遺跡）台形様石器Ⅰ類にもとめたい。この点については後述する。

なお、佐藤により池のくるみ遺跡はⅥ層並行期に位置づけられている。池のくるみ遺跡の位置づけは同遺跡を構成するあらゆる石器の検討の結果導かれており、筆者には異論がない。縄手下遺跡は、上の型式学的分析からⅦ層上部並行期と考えたいが、台形様石器Ⅲ類の規格化の程度において同じくⅦ層上部並行期の小出Ⅰ遺跡ともわずかな異なりをみせ、細別編年上は時期が異なることが考えられるので、縄手下遺跡は小出Ⅰ遺跡よりもやや新相と考えられる。とはいえ、やはり前記した台形様石器Ⅲ類の特徴からⅦ層上部並行期で捉える。したがって狸崎型・池のくるみ型はⅦ層上部からⅥ層並行期に存在した石器であろう。

#### ・Ⅵ層並行期

この時期には、AT降灰層準直下から出土しながらも、他の石器群とは異なって既に発達した周縁型の石刃技法を有し、石刃製搔器・彫器、および少量の台形様石器Ⅲ類を組成する

岩手県大渡Ⅱ遺跡Ⅰ文石器群（中川・星ほか編 1995）と（第Ⅲ－98 図 1～7）、新潟県樽口遺跡 A-KH 石器群（立木宏編 1996）が相当する（第Ⅲ－97 図）。尖頭形石器の特徴（素材石刃は薄手であるが湾曲が大きい点、基部両側を直線状に加工して尖鋭化する点、細身である点、基部付近に最大幅があるものが主体となる点）は、金谷原遺跡（加藤・小林 1974、藤田 1992）のそれに対比可能であり（第Ⅲ－98 図 8～17）、現在の情報からみても田村（1989）や佐藤（1991）が予測していたとおり、金谷原遺跡はⅥ層並行期であろう。宮城県野田山遺跡（窪田・佐藤 2002）、同上ノ原山遺跡（主浜 1995）、福島県一里段 A 遺跡東区（石本・松本ほか編 2000）（第Ⅲ－99 図）、富山県直坂Ⅰ遺跡（橋本 1973）も同様の技術形態の特徴をもち（第Ⅲ－100 図 10～22）、ほぼ同時期とみなせる。一里段 A 遺跡東区の石器群は、Ⅵ層並行期を特徴づける長い石刃の両端を切り取った石器（第Ⅲ－99 図 19）や石刃製搔器が多数出土している。近年秋田県で発見された龍門寺茶畑遺跡（加藤 2004）では、周縁型石刃技法を有しているものの（第Ⅲ－98 図 24・25）、石刃製搔器は全く伴わず、小出Ⅰ類似だが相対的に大型の台形様石器Ⅲ類や（同 23）、幅広剥片素材の台形様石器Ⅲ類（同 21・22）等、変異幅の広い台形様石器Ⅲ類が伴っている。金谷原等より尖頭形石器の基部加工が粗雑という特徴があり、相対的に古相の可能性があるが、Ⅶ層石器群との相違点の大きさから、やはりⅥ層相当の位置をあたえるのが妥当であろう。

同じⅥ層並行期でも、津南町の大原北Ⅰ遺跡（佐藤・新田 2002）では、大型の尖頭形石器と中型側縁加工ナイフ形石器、剥片製小型ナイフ形石器とを主とする石器群が出土した（第Ⅲ－100 図 1～9）。これはⅦ層上部からⅥ層に位置づけることができるが、剥片製ナイフ形石器の存在からみて以上の石器群とは異なり、関東地方との類似性が強い（安齋 2003c）。また、野尻湖の裏ノ山Ⅱ遺跡（土屋・谷 2000b）では、やや幅広の二側縁加工ナイフ形石器と小型の切出形石器に特徴づけられる石器群が出土している（第Ⅲ－101 図：ただし、同 37～39 の台形様石器は型式学的にみて他の石器群から除外すべきである）。神奈川県寺尾遺跡第Ⅵ文化層等（鈴木・白石 1980）に比定でき、同時期であろう。これも、型式学的にみて上述してきた在地の系統をひく石器群とは考えにくく、関東地方に由来を持つ石器群とおもわれる。同じ意味で、山形県弓張平 B 遺跡（加藤編 1979）の小型切出形石器・ナイフ形石器類も、関東地方に由来を持つ、Ⅵ層並行期の石器群とみられる。

なお、野尻湖周辺では、先述の池のくるみ遺跡を紹介することで、東裏遺跡 H1 地点第Ⅱ石器群・東裏遺跡 H2 地点ブロック 6（土屋・谷 2000b）の一部をⅥ層段階に比定できる（第Ⅲ－102 図）。東裏遺跡 H1 地点は比較的狭い範囲にまとまって石器群が出土しているが、同 H2 地点の出土状況は極めて不良である。後者では尖頭形石器と側縁加工ナイフ形石器が池のくるみ型に近接して出土するという傾向がある。前者では大型の尖頭形石器（同 15）と中大型の側縁加工ナイフ形石器（同 13・16・17）が池のくるみ型（同 19～21）、狸崎型（同 22）と共伴している。なお、両遺跡のナイフ形石器には横打剥片製のものがあるが、横打剥片製ナイフ形石器は板状剥片石核から剥離されたものではなく、加工も鋸歯状とならない。

ところで、野尻湖仲町丘陵上にあつて、堆積条件が比較的良好な仲町遺跡除雪ステーション

ン(JS)地点(鶴田・谷ほか 2004)の調査例は重要である(第Ⅲ-102 図 24~28)。ここでは、槍先形尖頭器など明らかに新しい時期の石器は上Ⅱ上部から、局部磨製石斧など明らかに古い時期の石器は上Ⅱ最下部~黒色帯において層位的に出土している(第Ⅲ-2表)。池のくるみ型(同 27・28)・狸崎型(同 24~26)は、特に上Ⅱ最下部(上部にAT層準)~黒色帯上部にかけて出土している。両者が集中するBL21では、石器群の出土ピークは上Ⅱ最下部~黒色帯上部にある。BL21石器群はジャスパーとチャートを主要石材としているのだが、明らかに両者と同一母岩のジャスパー(個体No.2)も上Ⅱ最下部~黒色帯を中心に出土する(第Ⅲ-2表)。なお、後半期型の器種(搔器・彫器)の出土は乏しい。こうした出土状況は、両者が後期旧石器時代前半期末葉に遡行する石器であることを傍証しよう<sup>(14)</sup>。

#### (4) まとめ

佐藤編年以後の新出資料を加えて編年的検討をおこなってきた。その結果、個別遺跡の位置づけに若干の変更を要すると考えられたものの、二極構造論の基本的枠組みに変更を要しない。

東北地方においても、Ⅸ層並行期石器群は明瞭な二極構造を呈している(佐藤 1991・1992)。台形様石器(I~Ⅲ類)と尖頭形石器はそれぞれ遺跡間で発現程度に大きな開きがある。つまり石刃モードと中小型尖頭形石器、剥片モードと各種台形様石器、という技術と器種の結びつきが強固であり、またその製作の機会がはっきりと異なっていたことが示される。なお、台形様石器の内部では、I・Ⅱ類の区別が非常に曖昧で、それぞれの機能分化が不十分であることを示す。この時期は地域間(東北地方日本海側/太平洋側/北陸地方)で大きな差異が見出せない。

Ⅶ層下部並行期において、この構造は変容し、例えば地藏田遺跡・笹山原No.16遺跡にみるように台形様石器の内部における尖頭形態(Ⅱ類)の発達と、I類との分化が相対的に明確化する。この過程は二の台長根遺跡や上萩森遺跡に至ってより顕著となる。逆に、家の下遺跡では、おそらく石刃モードによって生み出された幅広尖頭形の剥片を用いて、台形様石器Ⅱ類と形態的に共通する石器が製作されている。さらに家の下遺跡における石刃モードと剥片モード(貝殻状剥片剥離)とが同一個体で発揮されているという状況も、関連して生じた現象であろう。結果として、廃棄の場面において、石刃石器モードと剥片石器モードが同一遺跡に多数残されるという現象(家の下遺跡・此掛沢Ⅱ遺跡・岩井沢遺跡・愛宕山遺跡)も目立つ。つまりⅦ層下部並行期の内部では、石材消費における石刃モード・剥片モードと各器種との結びつきがやや不明瞭となり、モード間での製作と廃棄の機会が明確に分離されなくなっていく一方で、素材選択性に重点をおいた諸器種(大形尖頭形石器・中小形尖頭形石器/台形様石器Ⅰ類・台形様石器Ⅲ類)の作り分けが顕著となる。なお、当該時期には略全面研磨の石斧が東北地方から北陸地方までの範囲に散見される(白岩藪ノ上遺跡・地藏田遺跡・笹山原No.8遺跡)。

この変化は、Ⅶ層上部並行期にかけて一層強化される。Ⅶ層上部では、盤状剥片を石核素材として求心剥離ないし並列剥離により得られる貝殻状剥片を素材とした台形様石器Ⅲ類か

ら、ブロック状の石核消費による小型縦長剥片素材のⅢ類へと製作技術の重心がシフトしている。尖頭形石器の大小分化も継続し、大型品の発達が著しい。また、前段階において分化しはじめていた台形様石器Ⅰ・Ⅱ類は、例えば上萩森遺跡の台形様石器Ⅱ類でさらに分化をとげ、一部において基部加工や刃部の設定において切出形石器に類似する形態をもつ石器が生じている。この変化の過程を踏まえると、筆者が先にⅦ層上部並行期ないしわずかに新しい時期とみなした狸崎型と池のくるみ型の二者は、系統論的にはⅦ層下部並行期の台形様石器の形態分化が進行し発達した結果、出現したと理解し得る。狸崎型は台形様石器Ⅱ類からの系統進化で、池のくるみ型は、おそらくⅠ類からの系統進化で説明できるのではないだろうか。前述したように、台形様石器Ⅱ類の発達と池のくるみ型の出現は中部高地においても確認でき、両者間の関係を窺わせる。

佐藤宏之は、池のくるみ型が、関東地方においては北関東地方の後田型とわずかに関係を有していると予測しつつも、主分布域は東北日本の日本海側にあると述べている（佐藤 1988）。後田型の一部には、確かに基部加工を有する平刃形態の台形様石器があり、これらは池のくるみ型との関係が想定できるかもしれない。

Ⅵ層並行期になると、切出形石器・台形様石器系は急速に衰退し、少数みられる台形様石器Ⅲ類、および池のくるみ型・狸崎型もこの時期を通じて消滅する。前時期と決定的に異なるのは、基本的に尖頭形石器と石刃製の石器類（搔器・彫器）が中心となる石器製作技術構造が成立することで、前半期二極構造が変化していることである。この変化の時期は、古本州島西南部と概ね一致している。Ⅵ層段階では、尖頭形石器石器群である山形県の金谷原遺跡と、尖頭形石器石器群ながら台形様石器を伴う大渡Ⅱ遺跡第1文化層との差異にみるような地域差も指摘できるが、まだ明瞭ではない。地域差が本格化するの続く時期であるようなので、後半期前葉の編年研究を次におこなう。

## 2. 古本州島東北部の編年研究：後期旧石器時代後半期前葉

### (1) 古本州島東北部における後半期編年研究の問題

後期旧石器時代後半期の古本州島東北部では、1990年代に入るまで、東山系石器群・杉久保系石器群と呼ばれる二つの代表的石器群の編年関係が主たる問題となってきた。これらの石器群は、細身薄手の石刃を素材として両端を尖らせた「杉久保型ナイフ形石器」（設定当初は「杉久保形 knife blade」と呼称：芹沢・麻生 1953）が出土した長野県北端の野尻湖半にある杉久保A遺跡（林・樋口ほか 1966）と、大型の石刃の基部に微弱な加工を施した「東山型ナイフ形石器」（当初は「東山型ナイフ」：芹沢 1963）が出土した山形県東山遺跡（加藤 1964）を基準資料としている。ナイフ形石器以外の器種に関しては、「神山型彫器」（芹沢・中村・麻生編 1959）、「小坂型彫器」（高橋 1963、加藤 1965a）などが注意されており、前者が「杉久保系石器群」に、後者は多量の石刃製搔器とともに「東山系石器群」に特徴的に組成されるものとして、研究の初期から注意されている（中村 1965、加藤 1965a・b）。

しかし、古本州島東北部では、後期旧石器時代後半期についても前半期と類似した編年法上の問題がある。すなわち、特定の石器群の要素（型式や技術属性）の組み合わせに基づい

て石器群を類型化し、この類型を単位に一系列的な段階変遷を組み立てるという方法である。

例えば、加藤稔は当該地域の石器群を分析するなかで、「東山系石器群」と「杉久保系石器群」とする石器群類型の通時的関係について多くの論考を提出しているが、当時は両者の関係を推定するための決定的根拠が存在しなかったため、内容は定まらなかった。1965年には「東山型ナイフ形石器」が「杉久保型ナイフ形石器」に比して古くなる可能性にも注意を喚起しながら、佐藤達夫の見解を受けて、ひとつの案として両者の並行説もありうるとした(加藤 1965b)。また別の論考では東山型ナイフ形石器の出現を石刃石器群の最終末期とし、それは「杉久保以降」であると考えている(加藤 1965a・1975)。その後、最も新しい見解(加藤 1992)では東山系石器群が杉久保系石器群に後行すると考えている。

また、藤原妃敏は加藤と同様に石刃技法の技術的特徴から東北地方の石刃石器群の編年を行った(藤原 1983)。この中で藤原は「東山系」と「杉久保系」にかかわる議論に触れ、両者の分布が重複することと、秋田県米ヶ森遺跡(富樫編 1977)の例から両者は漸移的に変化する可能性があるとして、両者は年代差に置き換えられるものと考えている。

前半期の編年研究同様、特定の指標に基づく石器群の類型化による編年は、石器群の多様性を捨象し、単調な段階編年を帰結する危険性が高い。類型編年では、ある石器組成が常に同じように遺跡に残されるという前提を基本としているが、石器組成は生活の各場面の機能的要請に応じて残される多様なものであることが通常であるので、この前提も成り立ちがたい。

ただし、こうした方法上の問題があるとはいえ、古本州島東北部では 1990 年代に入るまで層位や理化学年代といった編年研究上の手がかりが非常に乏しかったことも事実であるので、編年研究が遅滞することもやむを得ない状況ではあった。1990 年代以後は、広域火山灰 AT テフラの検出、<sup>14</sup>C 年代測定例の蓄積もあるため、研究事情は改善されつつある。特に、先にも触れた岩手県大渡Ⅱ遺跡や新潟県樽口遺跡を始めとする多くの遺跡から得られた、相対的な上下関係ないし AT との上下関係をもった石器群の出土事例は、編年研究に一定の根拠を与えた。

1990 年代以後の編年研究の代表として、沢田敦の研究をみてみたい。沢田は、東北日本において「東山石器群」が AT 火山灰(約 25000<sup>14</sup>CyrsBP)の上下から出土していること、上ノ平遺跡 A 地点(沢田・飯坂編 1994)での「杉久保石器群」が AT 上位に位置づけられ、層位的には AT よりも AS - YPk 降灰(約 13000<sup>14</sup>CyrsBP)層準に近いことを根拠に、「東山石器群」が AT 降灰前から降灰以後にわたる石器群とし、「杉久保石器群」がこれに後続すると位置づけた。また「杉久保石器群」は二側縁加工ナイフ形石器の有無によって細別される。さらに「国府石器群」については「東山石器群」の一部に並行して流入すると考えている(沢田 1996)。この編年は他の研究者にも承認されている。

一方、佐藤雅一は、新潟県津南段丘遺跡群を対象とした地域編年において、個別石器群を単位とし、津南地域における層位状況を基礎とした編年を提示している(佐藤 2002)。編年の細別において、遺跡ごとに偏りの大きい石材組成等をその基準とする点には問題がある

が、AT 降灰前後の大型石刃を用いたいわゆる「東山石器群」に、「杉久保石器群」が後続するという大きな変遷観は沢田の研究と共通している。

層位的な情報が得られたことにより、石器群の大枠での変化は確定したように思われるが、類型編年の枠組みには変化が見られない点が問題である。また、1990年代以後の研究は新潟県下の諸遺跡を扱ったものが多いので、新潟県下での成果が古本州島東北部全域に敷衍できるとは限らない。例えば渋谷孝雄らの研究では、東北地方という範囲内で石器群類型が段階変遷することが前提として議論されているので問題がある（渋谷 1994・2003、山田 1999）。「杉久保型ナイフ形石器」と「東山型ナイフ形石器」が分布をずらす、あるいは後者がより広い分布を持つことは、すでに研究の初期から繰り返し指摘されていることであり（佐藤 1969）、これらが単純に先後関係に置かれるとするならば、分布の大きな違いを説明せねばならない。

以上のことを踏まえると、まずは類型編年の枠組みから離れ、やはり本論でここまでおこなってきたように、個別石器群を単位とした編年研究の遂行が必要である（佐藤 1992）。東北地方全域での一様な石器群変遷を想定するのではなく、個別石器群の年代編成の後に、地域差や通時変化の多様性を読み取っていくべきであろう。

## (2) 新潟県・北陸地方

大渡Ⅱ遺跡第2文化層（中川・星ほか編 1995）、樽口遺跡 B-KH 文化層（立木編 1996）は、石刃モードのみからなる AT 上位の尖頭形石器石器群である（第Ⅲ－103 図 9～14、15～29）。尖頭形石器は打面調整を有する厚手の石刃を素材とし、打面を残すように基部加工を加えたものである（同 9・15～19）。石刃製の搔器や（同 13・14・24～27）、切断／折断面を打面とする器体長軸に沿った彫刀面を残す小坂型彫器が伴う点で共通している（同 12）。大渡Ⅱ遺跡では、第1文化層の尖頭形石器の形態が長狭型で基部を尖らすタイプであるのに対し、第2文化層では基部を残置する厚手タイプのものへと型式変遷を遂げているが、相互に類似した器種組成をなしており、技術系統的にもよく連続する。同じ傾向は樽口遺跡における A-KH 文化層と B-KH 文化層との間にも認められる。さらに、両遺跡ではこの上層から杉久保型尖頭形石器（森先 2004a・b）と神山型彫器からなるいわゆる杉久保石器群（樽口遺跡 A-KSU・B-KSU 文化層）が出土している（同 1～8）。

杉久保石器群について得られている放射性炭素年代値は、新潟県津南町の向原 A 遺跡（阿部 2000）の例（約 19000±14CyrBP、4 点）、大渡Ⅱ遺跡第3文化層直上の例（約 19000±14CyrBP、1 点）などがあり、関東地方と比較すると概ね砂川石器群の展開する時期（Ⅳ層中部）と重なっている。少なくとも一部は砂川期並行であるということができるので、大型尖頭形石器石器群より確実に新しい。このことから、AT 上位の大型尖頭形石器石器群は、少なくともⅤ層～Ⅳ層下部並行期のどこかに位置づけられる。新潟県の大型尖頭形石器石器群には、胴抜原 A 遺跡（佐藤ほか 2001、佐藤 2002）、円山遺跡（土橋編 2003）、二太子沢 A 遺跡（田中・鈴木 2000）、太子林Ⅱ遺跡（望月 1999）がある（第Ⅲ－104 図）。円山遺跡には大型尖頭形石器石器群に小型の台形様石器Ⅲ類がごく少数伴っている。

ただし、杉久保石器群の分布範囲は第Ⅲ-105図に示すように新潟県を中心としており、大渡Ⅱ遺跡第3文化層、峠山牧場Ⅰ遺跡B地区（阿部2000）は点的な分布である。したがって、新潟県域以外において、上記の編年関係は適用できない。大渡Ⅱ遺跡の位置する和賀川最上流域には、杉久保石器群と異なる石器群が存在していると考えられる。なお、新潟県周辺域における杉久保石器群には他に、上ノ平遺跡A地点（沢田・飯坂1994）、同C地点（沢田1996）、吉ヶ沢遺跡B地点（沢田・坂上2004）、山形県横道遺跡（加藤・会田1998）がある。

ところで、新潟県樽口遺跡ではAT上位のB-KH文化層とほぼ同層準からA-KSE文化層と呼ばれる、石刃石器群（第Ⅲ-106図7～9・13・14）に伴って角錐状石器（同12）や国府系ナイフ形石器（同1～3）、二側縁加工ナイフ形石器（同4）、切出形石器（同5）などが含まれる石器群が出土している。すでに見てきた古本州島西南部の編年からみても、V層上部～IV層下部に相当するとみなすべきであるが、ここでは石刃石器群の存在が特異的である。ほかにも、坂ノ沢遺跡C地点（鈴木1999）は樽口遺跡A-KSE文化層と近似する（第Ⅲ-107図17～22）。このほか、山形県河井山遺跡では大型の切出形石器が複数出土しており、関東地方IV層下部並行期の同種石器に対比可能である（同23・24）。新潟県御淵上遺跡（中村編1971）、山形県越中山遺跡K地点（加藤1975、加藤編1976、加藤・鈴木1976）、東裏遺跡H2地点（土屋・谷2000b）（第Ⅳ-11図）ではまとめて国府系石器群が出土しており（同1～8、9～16）、上記石器群とおおむね同時期であろう。

以上のことから、新潟県域ではAT降灰後の編年は、おそらくAT直上に、前半期からの連続的变化を追える大型尖頭形石器石器群が成立し、これに遅れて国府系石器群+石刃石器群が出現したあと、IV層中部並行期前後の杉久保石器群へ変化していくという変遷が考えられよう。大型尖頭形石器石器群の存続時期はおそらくV層下部並行期と大きくずれることはないだろうが、V層上部・IV層下部並行期の細別は困難といわざるを得ない。

さて、この変遷観は、杉久保石器群が分布しない北陸地方には直接敷衍できないが、新潟県で認められた大型尖頭形石器石器群が灯台笹下遺跡（松浦・西野編1999）等でも見つかっており（第Ⅲ-108図1～7）、これは直前にあたるVI層期の直坂Ⅰ遺跡からの系統進化で無理なく理解できる。また、北陸地方には良好な発掘資料ではないものの国府系石器群も散見されている。この地域の国府系石器群に石刃石器群が共伴するかどうかを明らかにできる資料がないが、直前期の技術伝統が急速に失われるということも考えにくい。直近の隣接地域である新潟県の石器群変遷を鑑みれば、北陸地方でも大型尖頭形石器石器群→国府型ナイフ形石器+石刃石器群という変遷が想定される。福井県西下向遺跡（平口編1983）は、国府型ナイフ形石器を伴う石器群である（同8～13）。

杉久保石器群が分布しない北陸地方には、同時期に独自の石器群が展開していたと考えられる。筆者は直坂Ⅱ遺跡（橋本編1976）で最初に発見された瀬戸内系石器群（麻柄1984）と呼ばれる石器群がそれにあたると考えている。

瀬戸内系石器群とは、かつて直坂Ⅱ型（麻柄1984）と仮称されたナイフ形石器を一部に含む、主として素材背面側からの整形加工による横打剥片製ナイフ形石器と、鋸歯縁削器に

特徴づけられる石器群としておく。この石器群は安山岩にかなり特化した石材利用パターンを示す。

代表的な遺跡として、長野県野尻湖遺跡群の西岡 A 遺跡・貫ノ木遺跡 H1 地点（土屋・大竹 2000）・上ノ原遺跡県道地点（中村・森先編 2008）・東裏遺跡特別養護老人ホーム地点（渡辺 1994）・仲町遺跡（野尻湖人類考古グループ 1987）・新潟県上越市大堀遺跡（立木由編 1996）・富山県大沢野町直坂 II 遺跡（橋本編 1976）・新造池 A 遺跡（関・山本ほか編 1983）が挙げられる（第Ⅲ－109 図 14～31 に一例を示した）。麻柄（2006）も指摘するとおり、岐阜県最北端の宮川村宮ノ前遺跡（早川・河野ほか編 1999）では、輝石安山岩製のナイフ形石器 3 点や並列横打剥離を示す接合資料が検出されており、これらは明らかに上述の瀬戸内系石器群の特徴を共有する。また最近、新潟県三条市（旧下田村）で調査された芋ノ原遺跡（勝山 2007）も、剥離技術の特徴等からみて瀬戸内系石器群である可能性が高い。以上のことから、瀬戸内系石器群は富山県～野尻湖を中心として分布し、新潟県域には点的な分布を示す。

瀬戸内系石器群については年代測定例もなく位置づけが難しいが、野尻湖遺跡群では杉久保石器群とほぼ同層準（上部野尻ローム層 II 上部）から検出されていることや、杉久保石器群とは排他的に、北陸地方を中心とする地域限定的な分布を示し、地域化が進んだ石器群と見られる点から、杉久保石器群とほぼ同時期の石器群とみなしておきたい（森先 2004b、須藤 2005）。したがって、北陸地方では大型尖頭形石器石器群→国府系石器群＋石刃石器群→瀬戸内系石器群という変遷が想定される。

### (3) 奥羽山脈東部・西部

次に、山形県・秋田県・岩手県・宮城県・福島県の編年研究をおこなう。前半期後葉にみられた、奥羽山脈東西の地域差が、どのように推移するのかを確認したい。

先ほど触れた大渡 II 遺跡第 2 文化層出土の尖頭形石器との型式比較によると、山形県乱馬堂遺跡（長沢編 1982）、同横前遺跡（柏倉編 1964）（第Ⅲ－110 図）、秋田県小出 IV 遺跡（石川編 1991）、岩手県峠山牧場 I 遺跡 A 地区ブロック 16・18（第Ⅲ－112 図）、同峠山牧場 I 遺跡 B 地区・範囲確認調査（吉田・三浦 1996）、同耳取 I 遺跡 B 地区（村上 1999）の石器群（第Ⅲ－113 図）が類似した大型尖頭形石器を共有し、いずれも石刃製の搔器や小坂型をはじめとする石刃製彫器が共伴しており、近い時期に位置づけられる。ただし、太平洋側にあたる峠山牧場 I 遺跡 A 地区・B 地区（範囲確認調査）や耳取 I 遺跡 B 地区、上ノ原山遺跡では剥片製小型石器（切出形石器、基部加工尖頭形剥片石器：第Ⅲ－112 図 34、第Ⅲ－113 図 15～18、34～43）や剥片生産の痕跡（第Ⅲ－113 図 48）が認められることは重要であり、奥羽山脈をはさんだ東西の地域差を示している。また、峠山牧場 I 遺跡 A 地区・B 地区（範囲確認調査）・耳取 I 遺跡 B 地区では、基部加工が器体上半部におよび、片側縁基部加工が抉り入り状となる有肩形の尖頭形石器（有肩尖頭器：第Ⅲ－112 図 23、第Ⅲ－113 図 8・9、26～28）が出土していることも、東西の地域差を際立たせている。

新潟県から北陸地方では大型尖頭形石器石器群出現後に国府系石器群が現れるが、奥羽山

脈東西では国府系石器群がほとんどみつかっていない。これに関連して次のことは重要である。山形県乱馬堂遺跡では、主たる器種が大型の尖頭形石器（乱馬堂型：森先 2004a）や石刃製搔器・彫器と、相対的に少数の削器からなる、多量の石刃石器群を出土したことで著名である。注目すべきは、この遺跡から中型の珪質頁岩製切出形石器が出土していることである。報告書中、第 37 類とされた 4 点の石器には、恐らく折断した石刃を整形して作られた、基部に抉りを有する特徴的形態の切出形石器 2 点が含まれる（第Ⅲ－110 図 12・14）。これらは樽口遺跡 A-KSE 文化層や上ミ野 A 遺跡 1・2 次調査地（羽石・会田ほか編 2004）に含まれる切出形石器（第Ⅲ－106 図 5、第Ⅲ－111 図 6～12）と、素材以外の属性において酷似する。切出形石器は山形以北の後半期石器群では決して発達しているとはいえないが、岩手県の耳取 I 遺跡 B 地区に類例がある。要するに、特殊な形態の同種石器を共有しているため時間的接近性が想定されるが、新潟県域では一部に国府系石器群を伴う剥片モード＋石刃モードの石器群が存在するのに対し、奥羽山脈西部では石刃石器群が同時期に併存していた可能性が高い。また、この理由で上ミ野 A 遺跡 1・2 次調査地も V 層・IV 層下部並行期に位置づけられる。

とはいえ、杉久保石器群のほとんど分布しない当地域では、新潟県において杉久保石器群が成立している時期の様相もはっきりしない。ここでは、いくつかの手がかりをもとにこの時期の石器群を抽出してみたい。

岩手県東部の早坂平遺跡第 2 次調査地第 I 文化層（北村・米田ほか 2004）では、大型の石刃石器群が検出されている（第Ⅲ－114 図）。遺跡近傍で採取可能な黒色頁岩を用いて大量の石刃生産をおこなった遺跡である。第 I 文化層では、10 号礫群内炭化物を対象とした放射性炭素年代測定（AMS）より約 23000calYBP(INTCAL98)の年代が得られている。この 10 号礫群周囲から回収された石器群は第Ⅲ－113 図 1～6 に示した。基本的に、10 号礫群周囲とそれ以外の石器群（同 7～21）とは類似した様相を呈し、同一の石器群と捉えてよいと思われる。この尖頭形石器は上に述べた諸石器群と異なって細身かつ薄手のものが多く、小型幅広のタイプも認められ、全体的に小型である。切出形石器（同 11）や横打剥片製のナイフ形石器（同 12）が相伴している。石器群は、年代値から見て杉久保石器群と近い時期に相当する石器群であり、杉久保石器群並行期の一様相を示している可能性が高い。神山型彫器（同 2・18）が複数伴っている点もこのことを傍証する。

早坂平遺跡第 I 文化層とは異なるが、この石器群の尖頭形石器のうち、第Ⅲ－114 図 1・7・8 に近い特徴を有するものを含む石器群には、山形県太郎水野 2 遺跡（菅原・齋藤 2008）、同上ミ野 A 遺跡 3 次調査区（柳田・須藤ほか 2000）や、秋田県二重鳥 A 遺跡（細田 2006）、同上ノ野遺跡（和泉 1998）があげられる（第Ⅲ－115 図）。太郎水野 2 遺跡・上ミ野 A 遺跡 3 次調査区では、早坂平や二重鳥 A に比べてやや大型のものが多い傾向があるが、細身かつ薄手の尖頭形石器が主体となることは共通し、前時期の乱馬堂遺跡等に比べて基部が先鋭化される傾向が強い。したがって、早坂平・二重鳥 A と太郎水野 2・上ミ野 A とは細別時期を異にする可能性はあるが、いずれも後期旧石器時代後半期に属し、かつ AT 直後の大型尖頭形石器石器群よりは新しい様相を示すものであろう。これらの石器群は奥羽山脈西部に

南北に走る内陸盆地群に分布する傾向がある。早坂平の年代値を考慮して、IV層中部並行期前後の時期で、杉久保石器群に並行する石器群と考えたい。

さて、これらの石器群のほかに、岩手県柏山館遺跡（菊地ほか1996）ではAT包含層準より上位のII a(下)文化層から薄手石刃を用いた中型（4cm前後）の有肩尖頭器（第III-116図2）や二側縁加工のナイフ形石器（同1・5）、石刃製の彫器（同9）、石刃素材の楔形石器（同4）、截頂石刃（3・7）、礫器類などが二箇所の集中部をなして検出されている。薄手・有肩形の背部加工尖頭形石刃石器は最近報告された青森県八戸市の田向冷水遺跡（船場・杉山編2008）と共通し（同11～17）、ここでも多量の楔形石器や（同28～31・33～36）、その製作・使用に関係するとおもわれる台石類が多数検出された。田向冷水遺跡は、層位的にはAT降灰以後の石器群であるとされている。他にも、岩手県愛宕山遺跡から同種の石器が検出されているが（同38～46）、出土コンテクストが不明である。ナイフ形石器の特徴から、以上の石器群に近い時期に位置づけておきたい。

この、薄手・有肩形の背部加工尖頭形石刃石器に特徴づけられる石器群の位置づけには決定的な根拠がない。田向冷水遺跡や柏山館遺跡II a(下)文化層はいずれもAT降灰層準より上位からの検出と考えられていること、AT降灰直後と考えられる大型尖頭形石器石器群には、より大型厚手の尖頭形石器は含まれるものの中型薄手のものが無いこと、搔器や削器等の器種が乏しいこと等からみて、より後出の石器群である可能性が高い。同地域の先行する時期にあたる峠山牧場I遺跡A地区・同I遺跡B地区（範囲確認調査）や耳取I遺跡B地区に少数含まれている有肩尖頭器が、系統的に進化して生じた石器が中心的構成要素となった石器群であり、岩手県中部から北上川を經由して青森県東部までの範囲で盛行した可能性を考えておきたい。地域が離れているため問題があるが、関東地方における砂川石器群の二側縁加工ナイフ形石器の形態的特徴（中型薄手、基部尖鋭）に共通する点も考慮して、IV層中部並行期前後の石器群とみなしておくのが、現状では妥当であろう<sup>(15)</sup>。

秋田県の鴨子台遺跡（小山内ほか編1992）は杉久保石器群に類似する石器群である（第III-117図）。薄手長狭形石刃を素材とする杉久保型尖頭形石器（同1・2・13）と、神山型彫器（同4・5・9～11）に特徴をもつが、二側縁加工のナイフ形石器（同7・8・14）も一定数共伴し、新潟県北部の杉久保石器群とはやや異なっている。が、時期的には杉久保石器群に並行するであろう。杉久保石器群の分布は、現在知られている限りでは新潟県を中心とするが、奥羽山脈西部の日本海側に点綴するように分布が伸びる可能性もある。

さらに異なる石器群が宮城県南部・福島県を中心に展開する。V層～IV層下部並行期の石器群は今のところ弥明遺跡（藤原編1999）しか認められない（第III-117図49～51）。福島県塩坪遺跡（藤原ほか1983）は、関東地方の砂川石器群に対比される石器群を出土したといわれる。二側縁加工のナイフ形石器（同20～24・26～30）に截頂石刃（同25）や搔器・彫器が伴う。VI層並行期に位置づけられる可能性がないわけではないが、福島県および宮城県南部では、一里段A遺跡東区（石本・松本ほか編2000）・上ノ原山遺跡（主浜1995）・野田山遺跡（窪田・佐藤2002）等の、尖頭形石器と石刃製搔器に特徴を持つ石器群をVI層並行期に位置づけることが適当と考えられた。よって塩坪遺跡はIV層中部並行期とみなすのが

やはり妥当である<sup>(16)</sup>。福島県三貫地遺跡（福島県文化センター編 1987）や宮城県賀籠沢遺跡（東北学院大学佐川ゼミナール 2005）の石器群は、在地の石材を用いた二側縁加工ナイフ形石器と小型剥片製ナイフ形石器に削器等を有し、前者では神山型彫器（同 44）や截頂石刃を有するので、現状ではIV層中部並行期としておくのが適当だろう。

#### (4) まとめ

古本州島東北部でも、VI層並行期に前半期二極構造が解体していく。前半期の地域性についていえば、例えばVII層上部並行期には二側縁加工ナイフ形石器が奥羽山脈西部地域を挟む東西（新潟県／奥羽山脈東部）に認められたことや、VI層並行期にみる金谷原遺跡と大渡遺跡第1文化層の技術構造の違いといったように、奥羽山脈の東西で地域差が生じ始めている可能性があったが、いまだ明瞭かつ固定的なものではなかった。

V層並行期には、まずVI層並行期からの連続的変化を追える石刃石器モードのみからなる大型尖頭形石器石器群（石刃モード巡回群：田村 1989）が広く展開する。そして、これに遅れて国府系石器群が出現することにより、地域差が明確化する。国府系石器群は新潟～北陸までにしか出現しないためである。この時期、新潟以西、奥羽山脈西側、奥羽山脈東側に明らかな技術構造上の地域差が生じている。このうち、石刃モード巡回群が継続するのは、奥羽山脈西部の地域に限られ、新潟～北陸では国府系石器群と石刃石器群の共存、奥羽山脈東部では石刃石器モードと小型剥片石器モードからなる二極構造・二項的モードの復活ともいべき技術構造が成立した。国府系石器群は、AT直後の大型尖頭形石器石器群に遅れて出現し、このとき新潟～北陸とそれ以北・以东との地域差が生じるのだから、同西南部同様、技術構造の地域性はV層並行期でもその後半を通じて顕在化した可能性が高い。ただし、奥羽山脈東西の地域差（有肩尖頭器の有無）がどのタイミングで生じたかを特定する根拠は、現状では無い。

古本州島東北部では、西南部でおこなったV層～IV層下部並行期の細別が困難である。したがって、この後に、新潟県や北陸で杉久保石器群や瀬戸内系石器群が出現する時期を西南部のように詳しく特定することはできない。とはいえ、多少のずれがあるかもしれないが、杉久保石器群は、得られている年代値について見る限り砂川石器群の年代値（およそ20000～1900014CyrBP）とほぼ一致し、IV層中部並行期前後の時期に位置づけられるとみられる。

古本州島東北部では、遅くともこのIV層中部並行期に至り、北陸地方で瀬戸内系石器群、新潟県周辺で杉久保石器群、奥羽山脈西部で太郎水野2遺跡や二重鳥A遺跡に代表される中型尖頭形石器石器群、奥羽山脈東部北半で有肩尖頭器を特徴的に含み二側縁加工ナイフ形石器・楔形石器・截頂石刃を組成にもつ石器群、奥羽山脈東部南半で二側縁加工ナイフ形石器石器群が展開し、顕著な地域性が形成されたと考えられる。その基礎はV層（上部）～IV層下部並行期に成立していたとおもわれる。

#### 第4節 技術構造の変化と情報伝播

以上の内容を要約したものが、第Ⅲ-3～5表である。ここまでの検討から次のことが言える。すなわち、後期旧石器時代前半期後葉は、二極構造の枠組みで捉えることができるが、佐藤宏之（1992）の指摘するとおり、やはりⅥ層並行期を介して、そうした構造が解体する過程が見て取れた。

さらに古本州島東北部と西南部での検討結果を総合すると、Ⅵ層並行期からⅤ層下部並行期までの技術構造の変遷は、九州地方をのぞく各地域で、在地技術伝統の系統的進化として理解することが可能であった。また、技術構造の地域差も、両時期でそれほど大きな差はない。例外は九州地方で、Ⅴ層下部並行期に、韓半島から新しい刺突具スタイル（剥片尖頭器）の導入が図られ、急激なスタイルの変化が起こっている。これは九州に限定された現象であることから、特別な説明が必要であろう。考えられるのは、AT噴火に伴い南九州を中心に壊滅的な人口の減少が起こったことによる、社会関係の再編過程と関連している可能性である。南九州ではAT直上にもAT直下に類似する石器群がいくつか認められるため、AT噴火からある程度の時間がたってこの地域に人間集団が再居住したことがわかる。おそらく、このときに人口配置の再編成を背景として新しい社会間関係網を構築する必要から、九州地方内部での社会統合を強化する必要性が生じ、ネットワーク強化のための共有スタイル（Gamble 1986）として剥片尖頭器という新しい刺突具様式が導入され普及したものと考えておきたい。

このような九州地方固有の現象が起こっていたものの、それ以外の地域ではⅤ層下部まで伝統的な技術系統の内部で技術構造の変化が理解可能であった。

しかしこれに続くⅤ層上部とは、技術構造が各地で大きく変化し、さらに顕著な地域化を遂げる時期であると同時に、在地技術の系統進化では説明出来ない異系統技術の出現がみとめらることに特徴をもっていた。それは、多くの地域においてはそれ以前にまったく認められなかった国府系石器群と角錐状石器の広域的出現である。これらの石器群が広い範囲の石器製作技術構造に組み込まれたということの背後には、在来の技術では対応が難しい、あるいは新来の技術のほうが利便とされるような状況が生じていたこと等をはじめ、様々な可能性が想定できる。ただし、両者の展開する地域や程度には様々な差異があり、一様ではなく、また影響が及ばない地域もあって、状況は複雑である。

ともあれ、Ⅴ層上部並行期石器群の抽出から次のことがいえる。すなわち、地域間での主要石器の型式差の顕在化と、地域独自の技術構造の成立が、より地域的適応の進行した地域社会の成立を反映していると考えれば、以上の結果は佐藤宏之が提出していた前半期から後半期への移行仮説（後半期における地域社会の成立過程：佐藤 1992）と一致する。地域社会間の交流関係の活発化を反映している可能性がある国府系石器群・角錐状石器の広域展開も、この地域社会化の過程と軌を一にしていることも、佐藤が予測している。しがたって、後半期までを含めたこれまでの編年的検討によって、佐藤の仮説は検証されたといえる。

本論ではさらに地域性が顕在化する時期と、地域性の形成過程をより詳しく提示した。

未解明の問題は、各地域独自の技術構造がどのような背景を持って成立したものかということである。この問題の検討はここではおこなわず、最終的に第Ⅵ章で取り組むこととし、その前に整理しておくことがある。それは、この技術構造の変化の過程に、上述した国府系石器群と角錐状石器がどのようにかかわりを持ってくるのか、という問題である。両者がⅤ層上部の技術構造に広範囲で深い影響を与えていることは明らかなのである。後期旧石器時代前半期から後半期への移行を記述し、地域適応戦略の変化として叙述するためには、地域ごとに石器群の変化を追跡するだけでは不十分で、国府系石器群・角錐状石器が広がった社会生態学的背景を分析する視点が必要となる。

そこで、第Ⅳ・Ⅴ章では、この国府系石器群と角錐状石器の広域展開現象について詳しく分析を加えていく。

## 註

- (1) 若干古くⅨ層上部並行期に相当する可能性もある。ここでは台形様石器Ⅱ類の形態を評価してⅦ層下部並行期に含めた。
- (2) 第12地点等において、明らかにⅣ層中部砂川並行期の石器群を含むので、これらは除外すべきである。
- (3) 宮田は桐木耳取遺跡第Ⅰ文化層のエリア1-7を同時期とみている。ただし平面分布上をみると、エリア1、エリア2-5、エリア6・7、エリア8以北は相互に大きく離れている。筆者は、剥片尖頭器等の時期推定の手がかりになる石器を含むエリアに限り編年研究の対象とし、長狭型剥片尖頭器を主とするエリア2-5、エリア6・7、エリア10・11、エリア15、今峠型・大型台形様石器に特徴をもつエリア12・16を、それぞれ編年の単位として扱う。
- (4) 馬籠ら（馬籠・長野2006）により再検討された文化層内容に基づいている。
- (5) 周辺地域との対応関係が明示されていないが、日野Ⅰから椿洞という通時的变化の認識は、長屋幸二（1995）がすでに提示している。
- (6) 西輪久道遺跡については、出土地区と石器群の内容をわかりやすくまとめている阿部敬（2007）の図を使用した。
- (7) 藤野次史の最新編年（藤野2006）では、本論の対象とする石器群の多くが同時期（Ⅱb）とされ、さらに国府型を含む横長剥片製ナイフ形石器主体の石器群をより新しい時期（Ⅲ期）と位置づけている。したがって、角錐状石器主体の石器群→ナイフ形石器主体の石器群という、本論とはまったく異なる変遷観がみられる。周辺地域との対応関係についての考慮が不足しているためと考えられる。
- (8) 「尖頭器」や小型のナイフ形石器が伴うことを根拠に、この遺跡を「ナイフ形石器終末期」（光石2005）とする段階編年がもはや成り立たないことは、第Ⅰ章で述べてきたとおりである。
- (9) 技術的には瀬戸内地方との関連が強い冠遺跡群であり、前項で扱うべきかも知れないが、本論では遺跡が位置する中国山地の項で取り扱うこととした。

- (10) 藤野のこの編年観は、すでに変更されている（藤野 2006）。しかし、この新編年にも問題があることは註 (7) で述べた。
- (11) なお、本文中で後述するように、現在ではこのことを示す具体的資料がある。
- (12) 地蔵田 B 遺跡と呼称されていたが、地蔵田遺跡に改称されている（菅原 2002）。
- (13) 池のくるみ遺跡第Ⅲ - 18 図 15 は池のくるみ型とするよりも、狸崎型の範疇で捉えたほうがよいと思われる。
- (14) 縄手下遺跡については、池のくるみ型・狸崎型と、尖頭形石器・台形様石器Ⅲ類が、実は共伴しないという可能性も考慮する必要はある。しかし、それぞれ別個の根拠（池のくるみ型は池のくるみ遺跡と茶臼山遺跡とのナイフ形石器の対比から、狸崎型は仲町遺跡 JS 地点の層位や東北地方内部での台形様石器Ⅲ類の対比から）に基づいて与えた位置づけは、互いに極めて近接したものとなっており、敢えて分離すべき根拠は見当たらない。念のため、その出土状況を概観しておく。

発掘調査報告書（吉川編 2006）によれば、縄手下遺跡は米代川下流域左岸にある幟山丘陵北西端の台地上に位置する。発掘調査ではこの台地北西部をほぼ全面的に調査しており、総調査面積は 8500m<sup>2</sup>である。石器群が検出されたのは調査区西側のおよそ 960m<sup>2</sup>の範囲である。石器集中部は南北に長い楕円形を呈しており、この集中範囲内で、重複しながらも東西に二つの集中域が認められる。報告書所収のデータによる限り、基部加工尖頭形石刃石器と台形様石器Ⅲ類は西側にまとまり、池のくるみ型・狸崎型は東側に多い傾向が指摘できる。このうち、東西いずれの集中部でも多数の剥片・チップが得られているが、特に西側において多い。接合資料の内容から見て、西側では主に台形様石器Ⅲ類の製作がおこなわれたらしく、尖頭形石器や池のくるみ型・狸崎型の製作は乏しい。分布には器種毎に一定程度の偏りが認識できるとはいえ、そもそも広い台地上において、ごく一部の範囲に限って石器の分布が認められ、かつそれらが微妙に分布をずらしつつも、ごく近接して残されているという状況は注意すべきだろう。両者が無関係に残されたのではないことを傍証する。

また、主要石材である珪質頁岩において、母岩分析がどれほど有効であるか問題が残るが、各器種は頻繁に母岩を共有する。筆者も実見してこのことを確認したが、特に池のくるみ型・狸崎型と台形様石器Ⅲ類は、外見にも特徴的な母岩を共有する傾向が強いことは認めてよい。

なお、北海道木古内町の湯の里 4 遺跡出土の「台形石器」（畑編 1985）との類似性から、池のくるみ型・狸崎型をより新しい時期に位置付ける解釈もありうるが、次の理由から本論では支持しない。湯の里 4 遺跡の台形石器は、より小型かつ薄手で刃部と平らな基部が平行する平刃タイプなので、すくなくとも狸崎型とは異なっている。仮に、縄手下・狸崎 B において、狸崎型とそれ以外の石器とが分離されるとしても、湯の里 4 遺跡のものと相同の石器と考えることは困難である。狸崎型が約 20000 年前以後に位置付けられると考えると、東北地方におけるその由来を説明することは一層困難である。湯の里 4 遺跡の台形石器の由来を説明することは難しいが、湯の里 4 遺跡を基準にして池のくるみ型・狸崎型の位置づけを与えるよりも、池のくるみ遺跡出土の石器や、同じ東北日本地域を構成する野尻湖遺跡群の出土事例を重視したほうがよい。狸崎型と狸谷型の関係と同じく、時期をたがえて類似する石器が出現する理由を、機

能的側面から考察するほうが重要であろう。

(15) 田向冷水遺跡については、すでに佐藤宏之により後期旧石器時代後半期中葉（砂川石器群並行）と考えられている（佐藤 2007a）。有肩尖頭器は、関東地方後期旧石器時代前半期後葉にも認められるが（第Ⅲ－6 図）、前半期のものは厚みがあり、また厚みの均質性がなく、加工に対向調整が多用されるので、異なっている。

(16) ただし、関東地方に系譜をもつ集団の石器群だとすれば、一里段 A 遺跡等との並存していた可能性もないわけではない。しかしそうすると、塩坪遺跡、三貫地遺跡、賀籠沢遺跡などこの地域の多くの石器群が関東地方に系譜を持つ石器群の進入によって形成されたと解釈せねばならず、この特異な現象の背景に対する説明が必要となってくる。より清楚な解釈で理解したい。